

県総合福祉・女性センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告

駿河遺跡

福岡県文化財調査報告書

第 98 集

1992

福岡県教育委員会

県総合福祉・女性センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告

駿 河 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第 98 集



1. 駿河遺跡から春日丘陵を望む（東上空から）

1990年12月撮影



2. 駿河遺跡調査地区全景（北東上空から）

1990年12月撮影

1.
7号住居跡周辺
(上空から)



2.
10・11・12号住居跡
(上空から)





1. 調査区全景（南西から）



2. 調査区と旧米軍施設（南から）



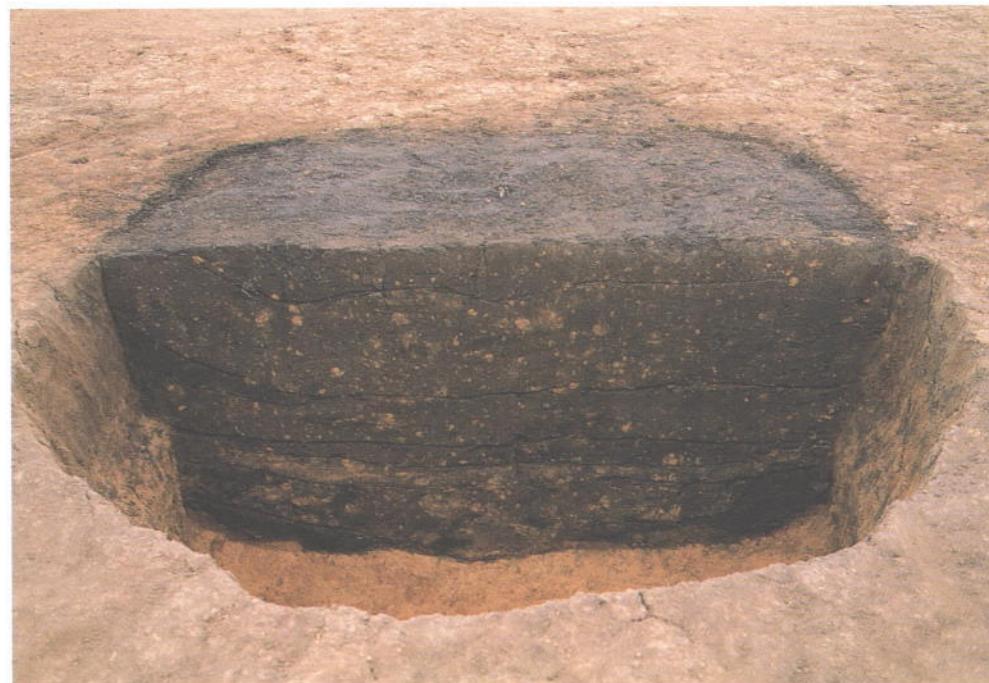
1. 6号住居跡（北東から）



2. 1・2号住居跡（南から）



1. 2号掘立柱建物（南から）



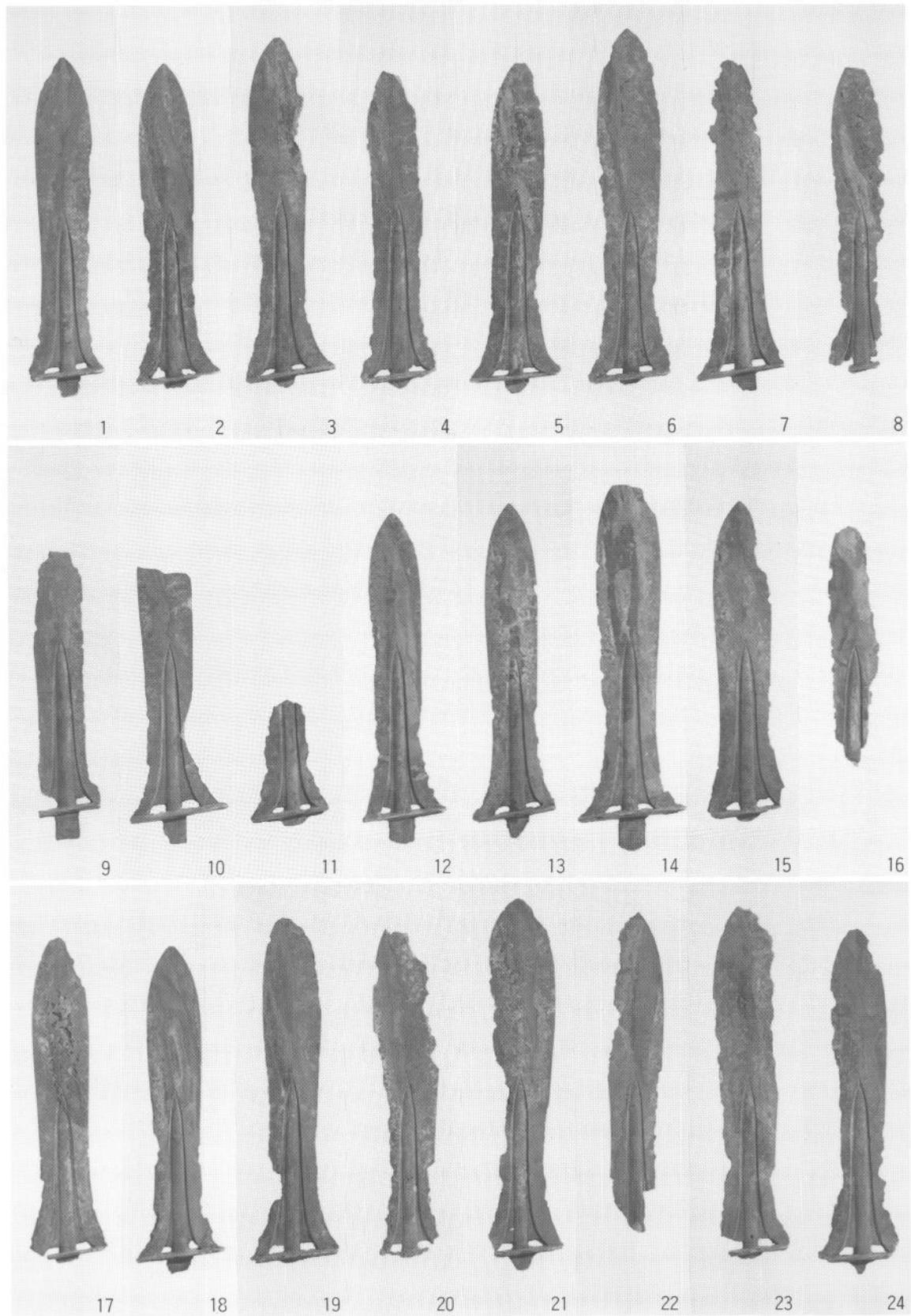
2. 5号竖穴（南東から）



1. 10号住居跡 青銅製鋸先出土状態

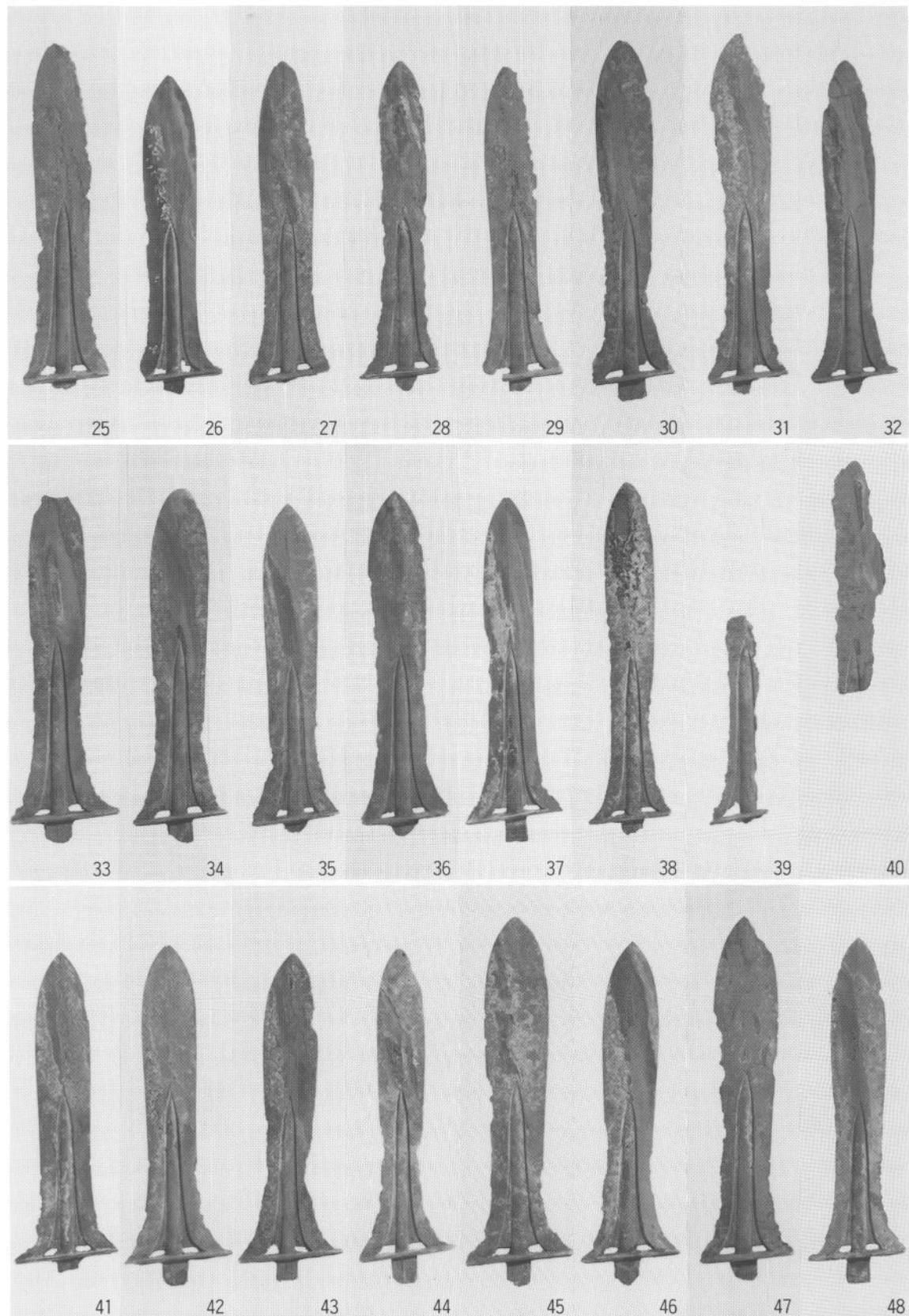


2. 3号掘立柱建物P3 壺形土器出土状態



春日市原町3丁目無番地出土銅戈 1

[国(文化庁)所管]



春日市原町3丁目無番地出土銅戈 2

[国(文化庁)所管]

序

本書は、福岡県総合福祉・女性センター（仮称）の建設に先立ち実施した発掘調査の記録であります。

遺跡の所在する春日市は福岡平野の南部に位置し、弥生時代以来文化の先進地として栄え、特に須玖・岡本遺跡周辺は奴国を中心地に推定されており重要な遺跡が密集しています。

ここに報告する駿河遺跡は、先年春日市庁舎建設に伴って調査された遺跡と同遺跡で、調査の結果、弥生時代中期後半から後期にかけて営まれた大集落であったことが想定できます。

発掘調査の報告としては満足のいくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する理解、また学術研究における活用の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査に、際しまして数々のご協力、ご指導をいただいた多くの方々に對して、心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 御手洗 康

例　　言

1. 本書は、福岡県総合福祉・女性センター（仮称）建設工事に係る事前の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、県民生部社会課の執行委任を受けて県教育委員会指導第二部文化課が実施した。
3. 遺物の復原・整理作業は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導のもとに行なった。青銅製鋤先の保存処理は同館参事補佐横田義章が行なった。
4. 遺物実測・平田春美、高瀬照美、横田義章、池辺が行い、図面作成・製図は、豊福弥生、原カヨ子、水野美奈、関久江、池辺が行なった。
5. 本書掲載の写真は遺構を池辺が、遺物は岡紀久夫があたった。空中写真は(有)空中写真企画の撮影による。
6. 卷頭図版のうち1は(有)空中写真企画の提供、7・8は九州歴史資料館技術主査石丸洋が撮影した。
7. 本書の題字は芝真由美氏による。
8. 本書の執筆と編集は池辺が担当した。

本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	3
III	遺構と遺物	7
1.	堅穴住居跡	7
2.	掘立柱建物跡	35
3.	堅 穴	42
4.	土 壤	50
5.	その他の遺構と遺物	54
IV	おわりに	60

図版目次

本文対照頁

卷頭図版 1	(1) 駿河遺跡から春日丘陵を望む（東上空から）	3
	(2) 駿河遺跡調査地区全景（北東上空から）	3
卷頭図版 2	(1) 7号住居跡周辺（上空から）	7
	(2) 10・11・12号住居跡（上空から）	7
卷頭図版 3	(1) 調査区全景（南西から）	7
	(2) 調査区と旧米軍施設（南から）	7
卷頭図版 4	(1) 6号住居跡（北東から）	16
	(2) 1・2号住居跡（南から）	9
卷頭図版 5	(1) 2号掘立柱建物（南から）	35
	(2) 5号竪穴（南東から）	45
卷頭図版 6	(1) 10号住居跡 青銅製鋤先出土状態	29
	(2) 3号掘立柱建物 P 3壺形土器出土状態	35
卷頭図版 7	春日市原町3丁目無番地出土銅戈 1	3
卷頭図版 8	春日市原町3丁目無番地出土銅戈 2	3
図版 1	(1) 駿河遺跡全景	3
	(2) 遺跡北半部全景	3
図版 2	(1) 遺跡東南部全景	3
	(2) 遺跡南部全景	3
図版 3	(1) 遺跡南西部全景	3
	(2) 遺跡西部全景	3
図版 4	(1) 7号住居跡周辺全景	20
	(2) 10・11・12号住居跡	26
図版 5	(1) 調査区遠景 1	3
	(2) 調査区遠景 2	3
図版 6	(1) 遺跡南半部遠景	3
	(2) 遺跡南西部近景	3
図版 7	(1) 遺跡東側全景	3
	(2) 遺跡中央谷部	3

図版 8 (1) 遺跡西部全景	3
(2) 遺跡北部全景	3
図版 9 (1) 1・2号住居跡	7
(2) 1号住居跡	7
図版10 (1) 1号住居跡	7
(2) 2号住居跡	10
図版11 (1) 2号住居跡	10
(2) 3号住居跡	12
図版12 (1) 4号住居跡	13
(2) 4号住居跡	13
図版13 (1) 5号住居跡	15
(2) 6号住居跡	16
図版14 (1) 7号住居跡	20
(2) 7号住居跡	20
図版15 (1) 8号住居跡	22
(2) 9号住居跡	23
図版16 (1) 10号住居跡・10号住居跡東側土壤	26
(2) 11号住居跡	31
図版17 (1) 10号住居跡	26
(2) 10号住居跡青銅製鋤先出土状態	29
図版18 (1) 11号住居跡	31
(2) 12号住居跡	32
図版19 (1) 1号掘立柱建物	35
(2) 2号掘立柱建物	35
図版20 (1) 3号掘立柱建物	35
(2) 3号掘立柱建物P3壺形土器出土状態	37
図版21 (1) 6号掘立柱建物	37
(2) 7号掘立柱建物	37
図版22 (1) 1号竪穴	42
(2) 2号竪穴	42
図版23 (1) 3号竪穴	42
(2) 4号竪穴	45
図版24 (1) 5号竪穴	45

(2) 5号竪穴土層断面	45
図版25 (1) 7号竪穴	45
(2) 7号竪穴	45
図版26 (1) 9号竪穴	50
(2) 10号竪穴	50
図版27 (1) 1号土壤	50
(2) 2号土壤	50
図版28 (1) 5号土壤	53
(2) 6号土壤	53
図版29 (1) 8号土壤	53
(2) 9号土壤	53
図版30 住居跡出土土器1	9
図版31 住居跡出土土器2	9
図版32 住居跡出土土器3	7
図版33 住居跡出土土器4・10号住居跡東側土壤出土須恵器	7
図版34 2・3号掘立柱建物出土土器・7号住居跡出土勾玉 10号住居跡出土青銅製鋤先	20・29・35
図版35 住居跡・ピット出土石器	7
図版36 旧石器	59

挿図目次

第1図 遺跡位置図（縮尺1/25,000）	5
第2図 遺跡周辺地形図（縮尺1/5,000）	6
第3図 1号住居跡実測図（縮尺1/60）	8
第4図 1号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	9
第5図 2号住居跡実測図（縮尺1/60）	11
第6図 2号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	12
第7図 3号住居跡実測図（縮尺1/60）	13
第8図 4号住居跡実測図（縮尺1/60）	14
第9図 4号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	14

第10図	4号住居跡出土石器・鉄器実測図（縮尺1/2）	15
第11図	5号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	15
第12図	5号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）	15
第13図	5号住居跡実測図（縮尺1/60）	16
第14図	6号住居跡実測図（縮尺1/60）	17
第15図	6号住居跡出土土器実測図①（縮尺1/4）	18
第16図	6号住居跡出土土器実測図②（縮尺1/4）	19
第17図	6号住居跡出土石鏃実測図（実大）	20
第18図	7号住居跡実測図（縮尺1/60）	21
第19図	7号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	22
第20図	7号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）	22
第21図	7号住居跡出土勾玉実測図（実大）	22
第22図	8号住居跡実測図（縮尺1/60）	23
第23図	9号住居跡実測図（縮尺1/60）	24
第24図	9号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	25
第25図	10号住居跡実測図（縮尺1/60）	27
第26図	10号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	28
第27図	10号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2・1/4）	29
第28図	10号住居跡出土青銅製鋤先実測図（縮尺1/2）	29
第29図	11号住居跡実測図（縮尺1/60）	30
第30図	11号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	31
第31図	11号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）	32
第32図	12号住居跡実測図（縮尺1/60）	33
第33図	12号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	34
第34図	12号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）	34
第35図	2・3号掘立柱建物出土土器実測図（縮尺1/2）	35
第36図	1・2号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）	36
第37図	3・4号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）	38
第38図	5・6号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）	39
第39図	7・8号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）	40
第40図	1・2・3号竪穴実測図（縮尺1/40）	43
第41図	4・5号竪穴実測図（縮尺1/40）	44
第42図	5号竪穴出土投弾実測図（縮尺1/2）	45

第43図	6・9・10・11号竪穴実測図（縮尺1/40）	46
第44図	7号竪穴実測図（縮尺1/40）	47
第45図	8号竪穴実測図（縮尺1/40）	48
第46図	竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）	49
第47図	1～4号土壙実測図（縮尺1/40）	51
第48図	5～8号土壙実測図（縮尺1/40）	52
第49図	9号土壙実測図（縮尺1/40）	53
第50図	ピット出土石器実測図（縮尺1/2）	54
第51図	ピット出土土器実測図（縮尺1/4）	55
第52図	10号住居跡東側長方形土壙実測図（縮尺1/40）	56
第53図	10号住居跡東側土壙出土鉄器実測図（縮尺1/2）	56
第54図	10号住居跡東側長方形土壙出土土器実測図（縮尺1/4）	57
第55図	11号住居跡南側土壙出土土器実測図（縮尺1/3）	57
第56図	古銭拓影（実大）	57
第57図	旧石器実測図（縮尺2/3）	58

表 目 次

表 1	掘立柱建物計測表	41
表 2	竪穴式住居跡一覧表	61

付 図

付 図 遺構配置図（縮尺1/400）

I は じ め に

福岡県総合福祉・女性センターは、航空自衛隊西部航空方面隊春日基地東側の一角に建設することが決定され、平成元年度当初に文化財の有無とその取扱いについて県教育委員会文化課に照会された。

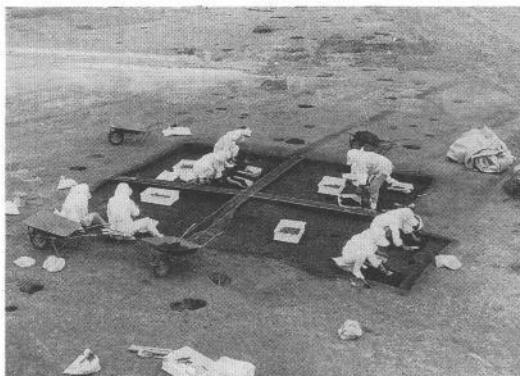
当該地一帯は戦後米軍基地（昭和47年6月返還）として整地され、その後も航空自衛隊西部航空方面隊の基地として利用されたため、敷地内の文化財の有無についてはまったく把握されていない。その上数多くの施設等の建設で地形の変貌が著しく現況での判断も困難な状況であった。

しかしながら北西側にあたる春日丘陵には須玖・岡本遺跡をはじめとする弥生時代の著名遺跡が数多く点在し、銅戈48本を出土した原町遺跡は建設用地の北西側隅に近接した位置にある。当該地は春日丘陵の東部に隣接する低丘陵上であることから遺跡立地の条件としては申し分なく何らかの遺跡地の遺存が予想された。

建設担当課の県民生部社会課と協議の結果、削平が比較的少ないと判断される南半部について詳細な試掘調査を実施し、今後の協議を進めるということで一致した。しかし試掘調査実施前の平成元年6月から当該地南側の隣接地で春日市の新庁舎建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代中期末から後期にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物が多数検出され、大規模な集落であることが判明した。このことから試掘調査はこの集落地の規模・範囲と密集度の確認を目的とした。

試掘調査は平成元年10月に実施した。その結果、数々の施設のために攪乱を受けてはいるが、地表下30～40cmの深さで竪穴住居跡をはじめ弥生時後期の遺構・遺物が遺存することが確認された。試掘調査の成果をもとに、民生部社会課と協議を実施し、建設用地の南側については遺跡が遺存し、全面発掘の必要性がある旨協議し、調査期間等の調査や予算の打合せに入り、発掘調査を平成2年度、整理・報告書作整を平成3年度の2ヶ年の事業として合意した。

実際の発掘調査は、植木・雑木等の伐採、用地内の施設の解体を待って着手することになり、平成2年6月20日より調査を開始し、同年11月8日に現地の調査を終了した。この年の夏は、干害が出るほどの記録的な猛暑と



1号住居跡発掘作業

I は じ め に

少雨で、夏の作業は困難をきわめた。

引き続き、九州歴史資料館で遺物・図面等の整理作業に入った。報告書作製は平成3年度に実施した。

遺跡名は、南側隣接地で春日市教員委員会が実施した遺跡と同名で『駿河遺跡』とした。

平成2年度（調査）、平成3年度（整理）の関係者は次のとおりである。

		2 年度	3 年度
福岡県民生部	部長	二子石哲夫	二子石哲夫
	社会課長	陶山 嶽	陶山 嶽
	係長	津留 雅幸	吉田 壽一
	主任主事	鬼丸 健二	鬼丸 健二
	主任主事	古賀 信夫	古賀 信夫
福岡県教育委員会	教育長	御手洗 康	御手洗 康
	文化課課長	六本木聖久	森山 良一
	課長補佐	安野 義勝	国武 康友
総 括	技術課長補佐	石松 好雄	
	参事（兼）文化財保護室長		石松 好雄
	参事補佐	柳田 康雄	柳田 康雄
	管理係長	池原 修二	岸本 実
	事務主査	東 勇二	東 勇二
庶 務	主任主事	沢田 俊夫	安丸 重喜
	記念物係長	浜田 信也	
	調査班総括補佐		井上 裕弘
	技術主査	池辺 元明	池辺 元明
筑豊教育事務所			
		技術主査	新原 正典
		文化財専門員	日高 正幸

なお、調査、整理にあたって次の方々の御指導、御協力があった。記して感謝いたします。

福岡県文化財保護指導員 平ノ内幸治・和田利徳、文化課 高橋章・小田和利、大野城市教育委員会 舟山良一・向直也・徳本洋一・浦山敏弘、春日市教育委員会 鬼倉芳丸・丸山康晴・平田定幸・吉田佳広、航空自衛隊 小野忠彦・笠野勝秀、九州歴史資料館 横田義章・岩瀬正信、中塩屋リツコ・西奇子・小島佐枝子・石井紀美子・尾花道子・藤井カオル・中垣親・高木冴子・田中フミ子・原田敬子・中村淳子・宮崎美智子・赤星年子・湯川礼子・片多江和子・片山ミサヲ・島崎真知子・大海雅子・高木幸子・日浦亮子・岡由美子・土山真弓美

II 位置と環境

駿河遺跡は福岡県春日市原町3丁目1番1号に所在する。

春日市は福岡市の南に接した県西部に位置する。東部を牛頸川、西部を諸岡川が流れ、いずれも福岡平野の東部を北流する御笠川にそそぎ、中央部を北流する那珂川とともに沖積平野を形成している。この福岡平野の南部に突出した春日丘陵上を中心とした周辺では弥生時代の主要な遺跡が密集し、その質量とともに他を絶している。また近年急激な勢いで開発が進み、これに伴う発掘調査で次々と重要な遺跡が発見され、とくに青銅器生産に関する遺物も多く出土しており、中国の史書にみる奴国を中心地としての実態が次第に明らかにされつつある。

弥生時代前期の遺跡としては、伯玄社遺跡があり、甕棺墓・土壙墓（木棺墓）・石蓋土壙墓などが検出されている。中期になると遺跡数が増大する。墓地群としては、奴国の王墓とその有力集団の墓地である須玖・岡本遺跡、その南側に小銅鐸の鋳型が発見された岡本遺跡（四丁目遺跡、平若遺跡、1986年国指定史跡）、西平塚遺跡、一の谷遺跡などの墳墓群がある。集落遺跡としては、中期後半の鉄器工房跡、青銅器鋳型、ガラス勾玉の鋳型が出土した赤井手遺跡、大谷遺跡からは、破片ではあるが銅鐸、矛・剣、戈の青銅器鋳型類が出土している。さらに近年の調査で須玖・岡本遺跡の北側の低地の須玖永田遺跡において小形仿製鏡の鋳型や銅矛袋部の中子、銅滓、銅塊、取瓶、鞴羽口などの鋳造関係のものがあり、弥生後期の青銅器工房跡であることが明らかとなった。また、須玖唐梨遺跡でも鋳型片や銅滓が発見されている。これらの遺跡から出土した多数の鋳型は、青銅器が集中的に生産されたことを語り、そのほかにも、紅葉ヶ丘遺跡で銅戈27本、西方遺跡で銅矛10本、原町遺跡からは水道管理工事中に路面下約80cmの黒色土層中から、茎と鋒を交互に並べ身を縦にした状態で48本の銅戈（巻頭図版7・8）出土する等、一括埋納の青銅器も須玖・岡本遺跡を中心とする大きな権力の存在を想定しうる十分な資料である。

また、春日丘陵の東部に隣接する低丘陵上に立地する本書の駿河遺跡では後期の堅穴式住居跡住居跡や掘立柱建物が検出され、春日市新庁舎の調査分では、小形仿製鏡、銅矛鋳型、鐸形土製品、鉄器、ガラス小玉などの遺物が出土している。この周辺は、古くから住宅地帯で、さらに米軍関係基地として整地され、旧地形は著しく破壊されており、駿河遺跡とその周辺に拡がると考えられる大集落も推定の域をでないのが残念である。駿河遺跡のさらに南東側の牛頸川下流域になると古墳時代から歴史時代にかけての遺跡が多く、惣利遺跡、円入遺跡、向谷南遺跡、春日平田遺跡などの集落跡、大野城市を中心として春日市と太宰府市にまたがる牛頸窯跡群の北西部にあたるこの地域では、惣利窯跡群、春日平田窯跡群、浦ノ原窯跡群などがある。春日公園内では太宰府へ通ずる古代官道が検出されている。

II 位置と環境

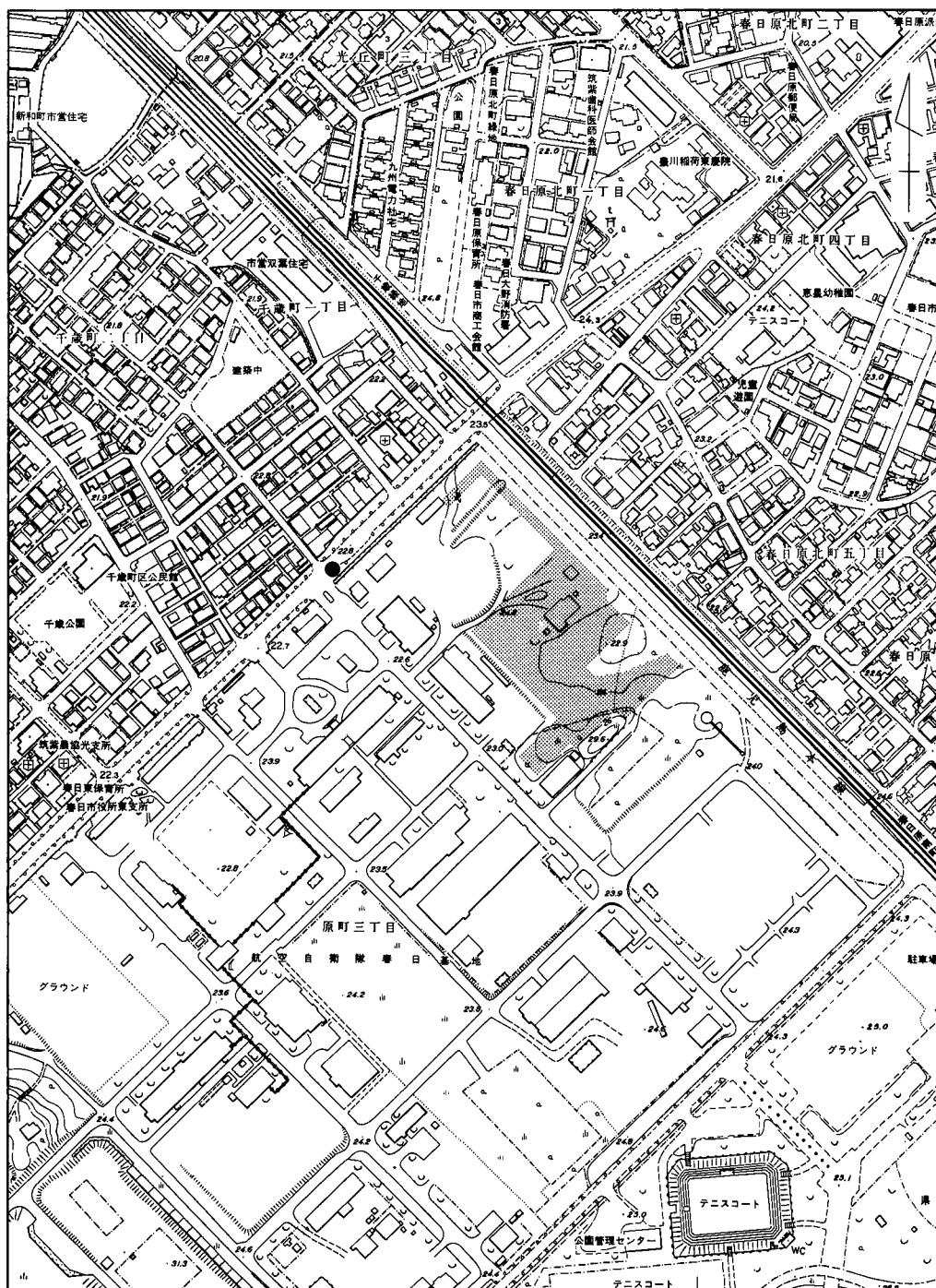
- 註 1 春日町教育委員会『福岡県伯玄社遺跡概報』春日町文化財報告書 1968
- 2 島田貞彦『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究室報告11 1930
福岡県教育委員会『福岡県須玖・岡本遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書第29集 1963
福岡県教育委員会『福岡県須玖・岡本遺跡』福岡県文化財調査報告書第55集 1980
- 3 春日市教育委員会『須玖・岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第7集 1980
- 4 春日市教育委員会『西平塚遺跡－C地区－』春日市文化財調査報告書第9集 1981
春日市教育委員会『西平塚・ナライ遺跡』春日市文化財調査報告書第10集 1981
- 5 春日市教育委員会『一の谷遺跡』春日市文化財調査報告書第2集 1969
- 6 春日市教育委員会『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第6集 1980
- 7 春日市教育委員会『大谷遺跡』春日市文化財調査報告書第5集 1979
- 8 春日市教育委員会『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第18集 1987
- 9 春日市教育委員会『須玖唐梨遺跡』春日市文化財調査報告書第19集 1988
- 10 渡辺・小田・松岡「福岡県春日町新発見の銅戈」『九州考古学』13 1961
- 11 西谷 正「九州の銅戈」『月刊文化財』1969-9
- 12 春日市教育委員会 平田定幸氏教示。
- 13 春日市教育委員会『春日地区遺跡群』II春日市文化財調査報告書第14集 1983
- 14 春日市教育委員会『春日地区遺跡群』IV春日市文化財調査報告書第16集 1986
- 15 春日市教育委員会『春日地区遺跡群』I春日市文化財調査報告書第12集 1982
- 16 春日市教育委員会『春日地区遺跡群』VI春日市文化財調査報告書第21集 1991
- 17 春日市教育委員会『浦ノ原窯跡群』春日市文化財調査報告書第11集 1981



第1図 遺跡位置図 (縮尺1/25,000)

- 1.駿河遺跡 2.原町遺跡 3.須玖唐梨遺跡 4.須玖永田遺跡 5.須玖岡本遺跡 6.岡本遺跡 7.岡本パンジャク遺跡 8.平若遺跡 9.赤井手遺跡 10.竹ヶ本遺跡・古墳 11.西方遺跡 12.伯玄社遺跡 13.ナライ遺跡 14.立石遺跡 15.春日公園内遺跡 16.御供田遺跡 17.九州大学キャンパス内遺跡 18.宮ノ下遺跡 19.大南遺跡 20.大谷遺跡 22.一の谷遺跡 23.大土居小水城 24.紅葉ヶ丘遺跡 25.惣利窯跡群 26.惣利遺跡 27.惣利西遺跡 28.惣利北遺跡 29.惣利東遺跡 30.円入遺跡 31.向谷遺跡 32.向谷古墳群 33.向谷北遺跡 34.春日平田窯跡群 35.春日平田遺跡 36.春日平田西遺跡 37.塚原古墳群 38.浦の原窯跡群 39.西浦古墳群 40.野添窯跡群 41.大浦窯跡群

II 位置と環境



第 2 図 遺跡周辺地図 (縮尺1/5,000)

●原町遺跡銅戈出土地

III 遺構と遺物

駿河遺跡は、牛頸川の北西岸、標高23～25mの低丘陵上に立地する。当地は戦後旧米軍基地、航空自衛隊春日基地と利用され、さらに東側はJR鹿児島本線、市道、春日北町の住宅地、北側は都市計画道路中・白水線、千歳町の住宅地等によって旧地形を見ることはできない。建設用地内も、自衛隊の各施設、とくに北側の大半は駐車場の造成により1m数10cmも削平されている。しかし南側は、整地や戦前の開墾で削平されてはいるものの谷部の形状や低丘陵が南西から北東に向かって延びる地形であったことは推測できた。

建設用地約33,000m²のうち試掘調査の結果に基づいて約16,000m²の調査対象地区として設定した。本調査開始後、重機による表土剥ぎ作業と並行して谷部の確認調査も実施したが包含層や遺物は認められず、建物のコンクリート基礎とともに調査区から除外した。実際の発掘調査面積は約11,500m²となった。調査は平成2年6月15日から平成2年11月8日まで実施した。この年の夏は干害がでるほどの猛暑と少雨で発掘作業は困難を極めた。特に遺構検出作業は大変で、確認調査で深く掘り下げた谷の水を汲み、撒きながらの作業となった。また、現場作業員も少なく、決して満足のいく調査ではなかった。

遺跡は、施設、設備等の攪乱、開墾による削平で、自然堆積土はほとんど観察できず、20～30cmの深さで地山となり、この面で遺構を確認した。

調査の結果、弥生時代中期末から後期にかけての竪穴式住居跡12、掘立柱建物跡8、竪穴8、ピット群と、土壙9、古墳時代の土壙2を検出した。また調査区南側で旧石器を採集し部分的に掘り下げたが遺物は出土しなかった。

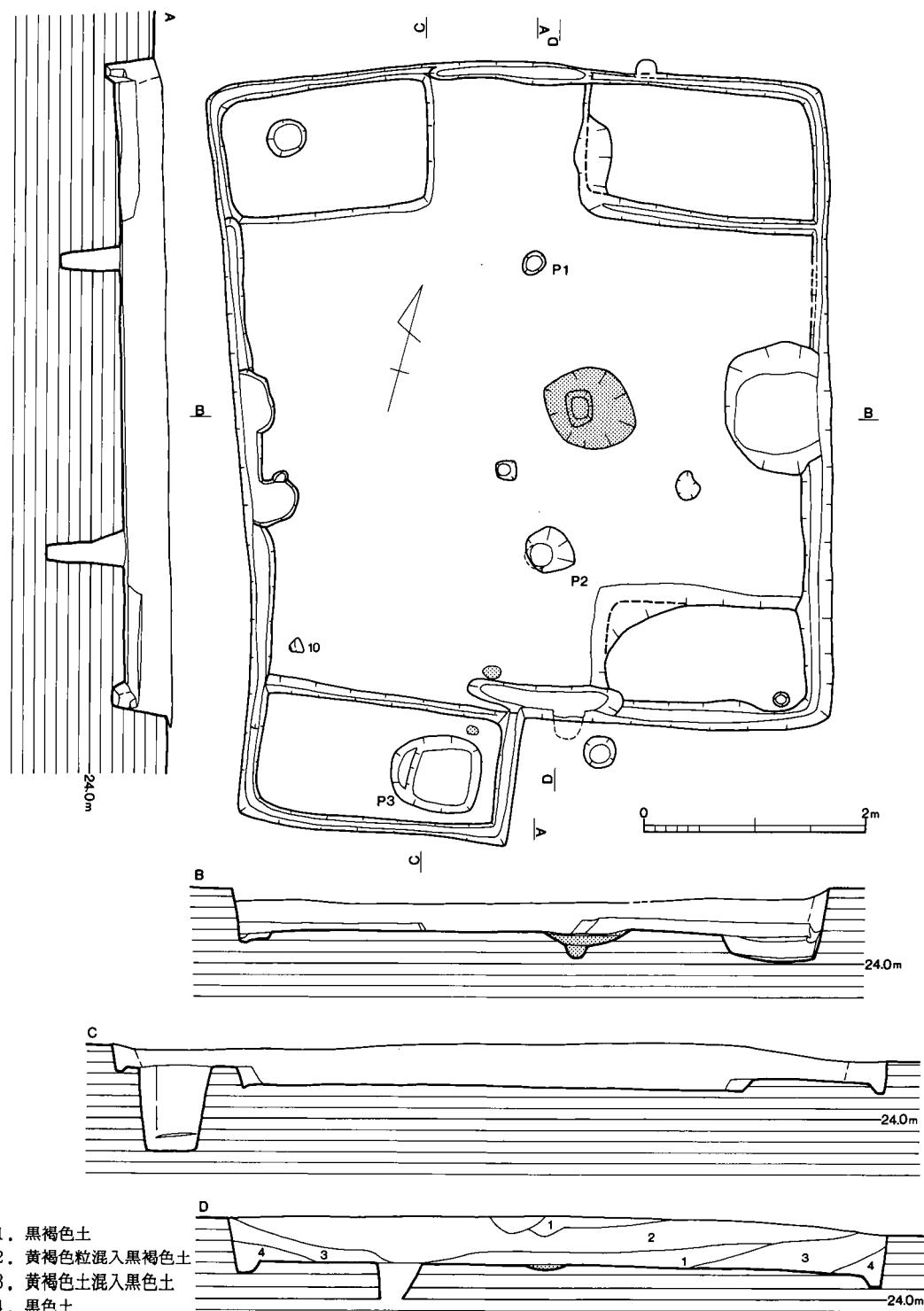
これらの遺構は調査区全体に間断なく拡がりをみせるが、密集度は少なく遺構間の重複もほとんどなかった。

1. 竪穴式住居跡

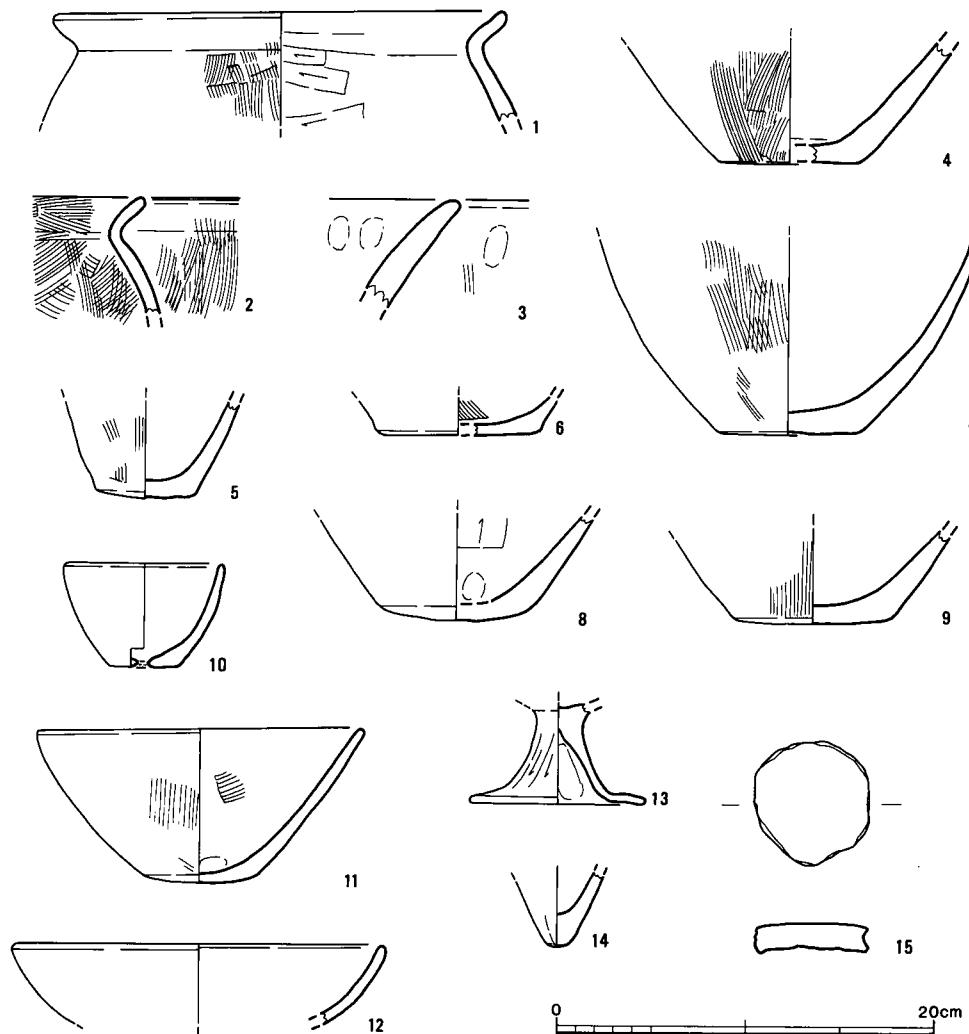
方形の竪穴式住居跡は、南側の1号～4号住居跡の張出し部をもつ住居跡群と、谷を狭んで北側の7号・大形住居跡の10号～12号住居跡の一群が見られ、後者の一群には掘立柱建物跡も6棟のまとまりをみせ、ピット群も多く検出した。円形住居跡は一軒確認しただけであるが西側に同住居跡の一群が続いていた可能性がある。

出土遺物は、比較的少ないが、6号住居跡出土の一括土器や10号住居跡出土の青銅製鋤先は好資料である。

III 遺構と遺物



第3図 1号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第4図 1号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

1号住居跡 (図版9・10-1、第3図)

調査区の南東側の端で検出した大形の竪穴住居跡で、西側約3mに隣接して2号住居跡がある。平面形態は南北が長い長方形プランを呈し、南短壁の西側の一角に張出し部を付設する住居である。規模は東側長壁で5.80m、西側で6.65m、短壁5.60m、壁高40cmを測る。張出し部の規模は2.45m×1.2m、床面からの高さは23cmである。床面積は32.45m²である。主柱穴2本である。P₁は径20cm、深さ55cm、P₂は上端で42cm、中位で20cm、深さ70cmを測る。柱間の距離は2.60mを測る。P₁—P₂を通る中軸線の方向N15°Wである。炉跡は主柱穴間中央のやや東側にあり、75cm×87cmの楕円形を呈する。壁は赤変し硬い。ベッド状遺構は短壁に平行に3箇所設けられている。長さ1.8m～2m、幅0.9m～1.1mの規模である。高さは床面から15cm～20cmで、

III 遺構と遺物

壁際には他の部分と高低差をつけた浅い周溝が巡る。東側の長壁中央床面には、 $1.2m \times 0.8m$ 規模で深さ25cmの隅丸長方形の屋内土壙がある。また、南側の張出し部には一辺70cm、深さ約80cmのP₃がある。床は水平を保ち、硬く叩き締められる。南側床面と張出し部で朱のかたまりを検出している。

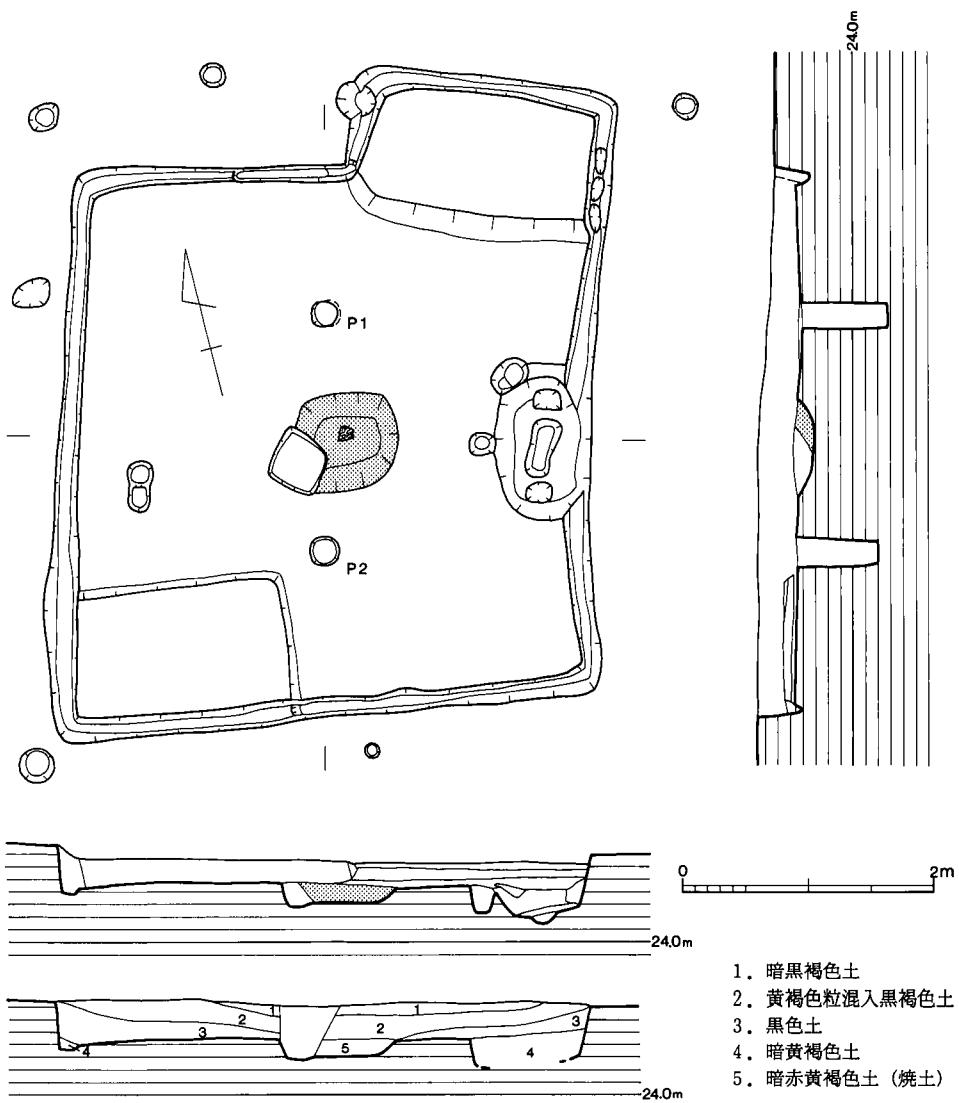
出土遺物は、南西隅床面から鉢、埋土中から甕・壺・鉢が出土している。

出土土器（図版30、第4図1～15）

1～2は、「く」字状の口縁をもつ甕形土器の口縁片である。1は、口縁部は外反し、端部は丸味をもつ。口縁部はヨコナデ、頸部以下はハケ目調整。内面は粗いヘラ削りされる。砂粒を多く含み、黒褐色を呈し、焼成は良。復原口径24.3cmを測る。2の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味をもつ。内面ハケ目調整、外面口縁部はハケ目の後ナデ、頸部以下はハケ目調整。3は口縁部片だが器形は不明。口縁部中位に指頭痕が残る。4～9は底部のみの資料である。4・5・7・9は、内面ナデ調整、外面ハケ目調整である。6の内面にはハケ目が残る。8は、丸底気味の平底で底径8.15cmを測る。内面にヘラ削りが認められる。10～12は鉢形土器である。10は南側床面出土、小形の内湾気味に立ち上る単口縁の鉢で、口径8.3cm、器高5.5cm、底径3.65cm。平底の底部で中央に穿孔がある。器壁は荒れて調整不明。11は外上方に直に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられる。胴部中位の内外面にハケ目が残る。胴下半から底部にかけて黒斑が認められる。口径17.3cm、器高8.25cmを測る。底部は丸味をもつ。13は内湾して立ち上がる。復原口径19.7cm。磨滅のため調整不明。13は高杯脚部片。脚柱部外面はヘラ削り、内面は指押え、裾部はヨコナデ調整。暗褐色～茶褐色を呈し、焼成は良好。底径9.2cm。14は器形、用途不明土器。15は、円盤状土器片で径6.15cm、厚さ1.6cm、重さ76gを測る。淡褐色を呈し、焼成は良好である。

2号住居跡（図版10-2・11-1、第5図）

調査区の南東側の端で、1号住居跡の西側に検出した竪穴住居跡である。平面形態は、南北がやや長い長方形プランを呈し、北側の短壁東側に張出し部を付設する住居である。規模は長壁西側で4.55m、東側で4.75m、短壁4.40m、壁高30cmを測る。張出し部は、長さ2.1m、幅1.3mで、床面からは約10cm高くなる。南側は短壁の延長線より内側に入る。床面積は19.21m²である。主柱穴は2本で、P₁は径20cm、深さ70cm、P₂は径22cm、深さ66cmを測る。柱間の距離は1.90mを測る。この中央に80cm×75cmの炉があり壁は赤変して硬い。一部は上面からの攪乱穴で破壊されていた。ベッド状遺構は南側の短壁西側に1箇所設けられている。規模は1.77m×1.10mで、床面からの高さは8cm前後である。周溝の深さ5cm前後で壁下に巡る。西側の長壁中央に、 $1.23m \times 0.75m$ 、深さ約20cmの屋内土壙がある。周囲にはピット、底には溝状掘込とピット状の堀込がある。床面はこの周囲が他より若干高い。床面は硬く検出は容易であった。



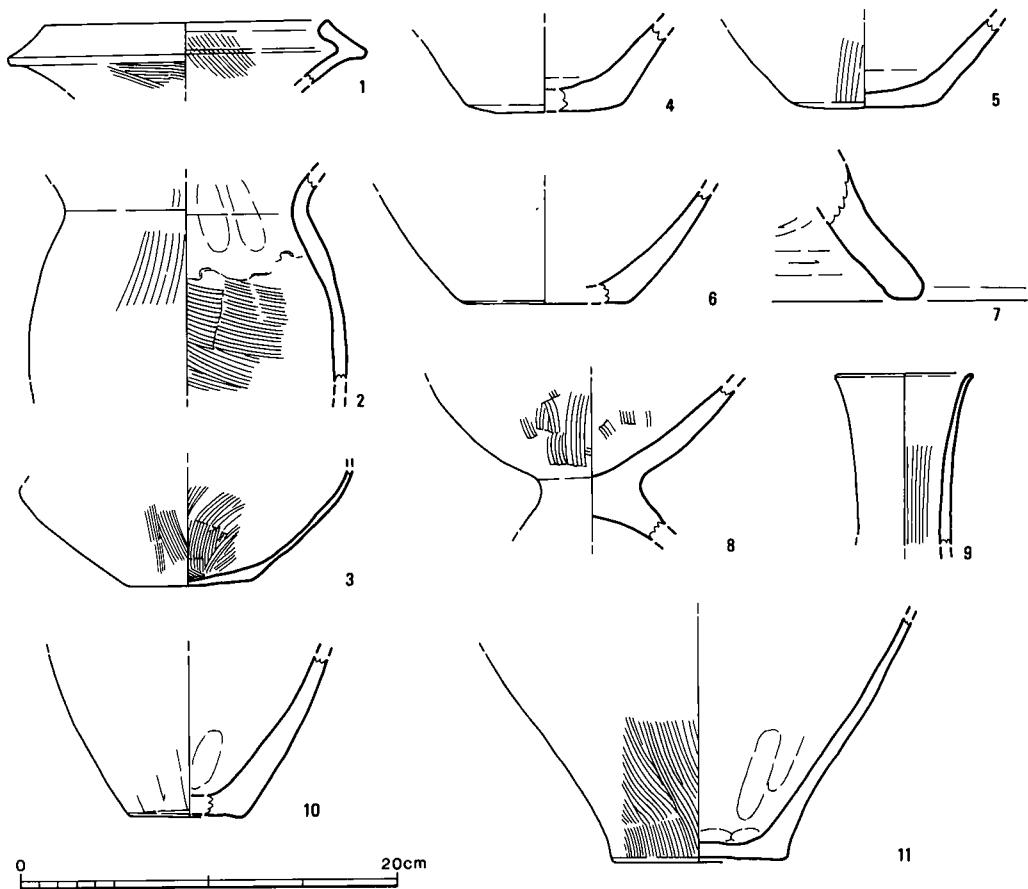
第 5 図 2 号住居跡実測図（縮尺1/60）

出土遺物は、埋土中から甕・壺、屋内土壙からは甕・壺が出土している。

出土土器（図版31、第 6 図）

1 は複合口縁片である。やや外反気味に内傾する口縁で端部をわずかにつまみ上げる。口縁部外面はヨコナデ、以下はハケ目調整。内面はハケ目調整される。復原口径15.1cmを測る。色調は淡黄褐色を呈する。2 は頸部から胴部にかけての破片である。外面はハケ目調整。内面頸部は指押えの後ナデ、胴部はハケ目調整。胎土には砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。3～6・10・11は底部のみの資料である。3～5 は、やや丸底気味。3 は内外面と

III 遺構と遺物

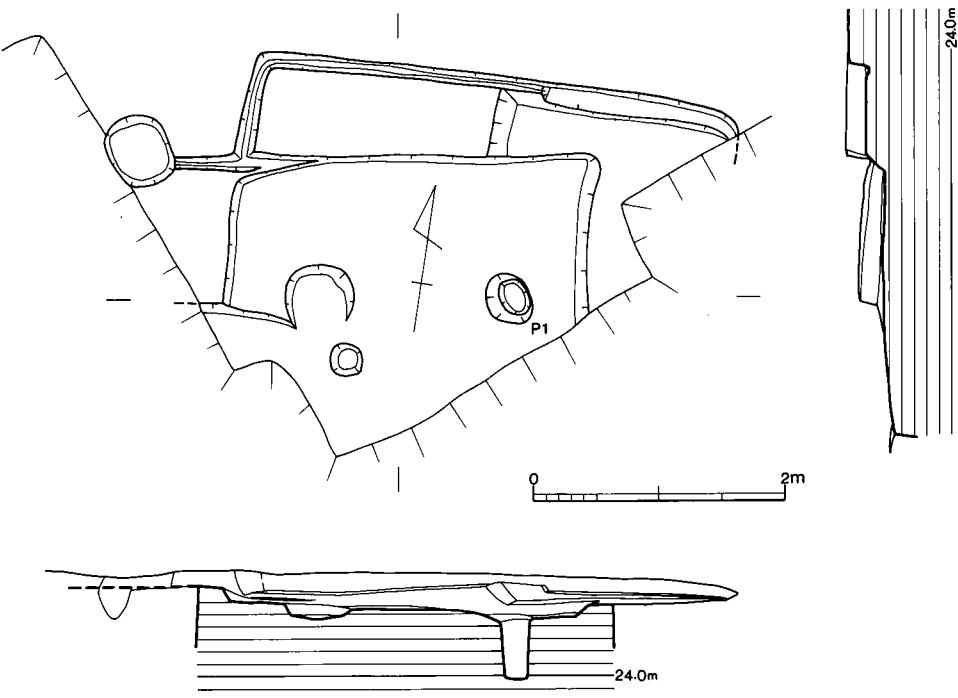


第6図 2号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

もにハケ目調整。10・11は平底でわずかに上底気味。11は内面ナデ調整。外面はハケ目、底はナデられる。7は脚部片、内面に削り痕が認められる。8は脚台付土器であるが器形は不明。底部外面はハケ目調整。内面にもハケ目が残る内底部はナデられる。脚外面はヨコナデ、内面はナデ調整。淡褐色を呈し、焼成は良好。9は長頸壺の口頸部片である。口縁部から頸部中位まではヨコナデ、以下は内面ハケ目調整。暗褐色を呈し、焼成は良好。

3号住居跡（図版11-2、第7図）

調査の南東側の端で、2号住居跡南側に位置する堅穴式住居で、基地の弾薬庫の盛土下から検出したが、この建設時の基礎工事のため大半が破壊されており全容は不明である。北壁は3.9mを測る。北壁と東西壁にベッド状遺構が付設される。北壁西側は、2.05m×0.75m、床面から約20cm高い。他のベッド状遺構の詳細は不明。西側のベッド状遺構は張出し部の可能性もある。床面には主柱穴の1本と考えられるP₁がある。径30cm×22cm、深さ50cmを測る。炉跡、屋



第 7 図 3号住居跡実測図（縮尺1/60）

内土壤等は確認できなかった。残存する床面積は8.78m²である。

出土遺物は埋土中から弥生式土器の小破片が出土しているが図示できない。

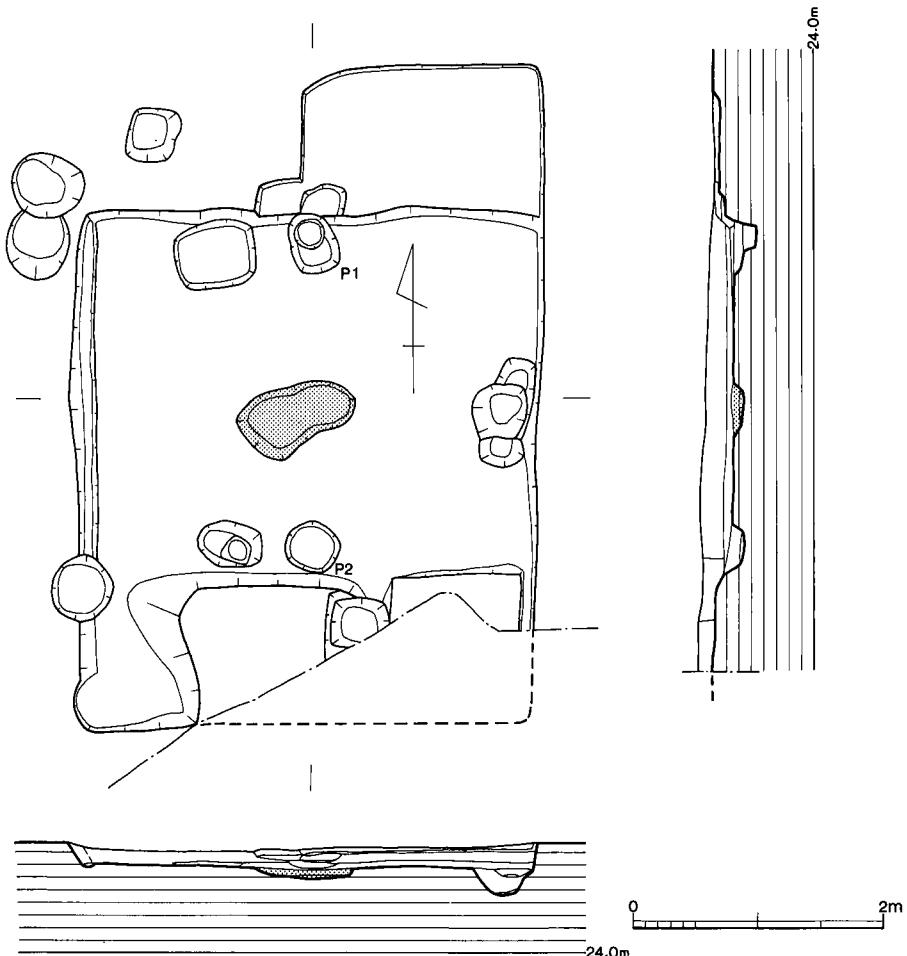
4号住居跡（図版12、第8図）

調査南側端で検出した竪穴住居跡で、周囲では住居跡は確認されていないが、10m南側の春日市の調査区では数軒の住居跡が確認されている。

平面形態は、南北に長い長方形プランを呈するが南壁側は基地の建物の基礎工事で破壊されているため明らかではない。北短壁の東側に張出し部を付設する。西側長壁4.15m、東側は復原すると5.25m、短壁は3.70mを測る。張出し部は1.95m×1.20mの規模で壁高15cm前後の残存状態である。残存床面積は16.48m²である。主柱穴は2本である。P₁は径40cm、深さ15cm、P₂は二段掘で柱根は径23cm、深さ20cmを測る。柱間距離は2.50mを測る。この中央に不整形の炉跡がある。P₁—P₂を通る中軸線の方位はほぼ南北を示す。ベッド状遺構は攪乱が著しく全容は明確ではないが、残存状態から南壁に沿って設けられたことがわかる。幅1.1mで壁際には浅い周溝が巡っていたと考えられる。床面との高低差は5cm程であり削平されているようだ。東側長壁の中央には両側に浅いピットをもつ径45cmの円形土壤がある。

出土遺物は、弥生式土器の小破片がかなり出土したが復原できるものはほとんどない。他に

III 遺構と遺物



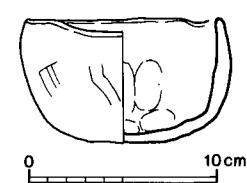
第8図 4号住居跡実測図（縮尺1/60）

砥石と鉄鎌片が出土している。

土器（図版30、第9図）

椀形の土器である。内湾して立上り、単口縁で、端部は丸い。器肉は全体に厚いが、場所によって厚さが異なる。口縁部も波をうつ。底部は丸底である。底部内面には指頭痕が残る。胴部・口縁部内面はハケ目の後ナデ。外面は工具使用によるナデ調整される。口径10.6cm、器高6.6cmを測る。暗茶褐色を呈し、焼成は良である。

石器（第10図1） 頁岩製の砥石で、3面を砥面として用いるが、部分的に自然面を残している。現存長12.5cm、最大幅4.8cm、厚



第9図 4号住居跡出土
土器実測図（縮尺1/4）

さ2.5cm、重さ266gを測る。

鉄器 (図版10図2)

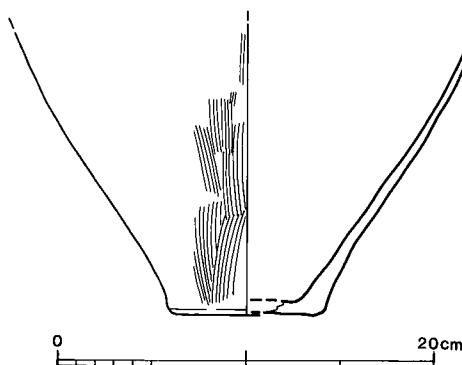
鉄鎌で現存長3.5cm、最大幅8.5mmを測る。身部断面は長方形を呈する。

5号住居跡 (図版13-1、第13図)

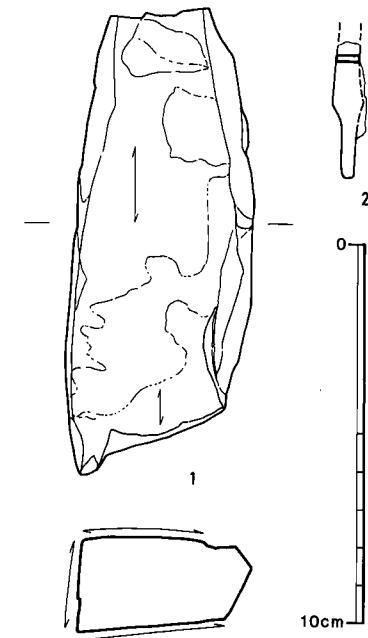
調査区の南東側から検出した竪穴式住居跡で、1号住居跡から北へ約15mの位置にある。北側の谷に向う緩斜面上にある。周囲は開墾により削平を受けて、周壁は南壁と西壁の一部を残すのみである。南壁の長さ4.40m、壁高20cmを測る。床面も中央より北側は若干削平されるが図示した範囲で床面を検出できた。残存する床面積は13.52m²である。主柱穴は2本である。P₁は径15cm、深さ23cm、P₂は径15cm、深さ30cmを測る。柱間の距離は1.45mである。炉跡は中央からややP₂側にあり、58cm×45cmの楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。南壁の中央に屋内土壙がある。65cm×85cmの長方形で深さ29cmを測る。その南側の土壙は住居跡より新しい出土遺物もなく時期は不明である。P₁-P₂の方位はN18.5°Wである。周溝は壁下に巡る。

出土遺物は床面から甕の底部と挟入石斧が出土している。

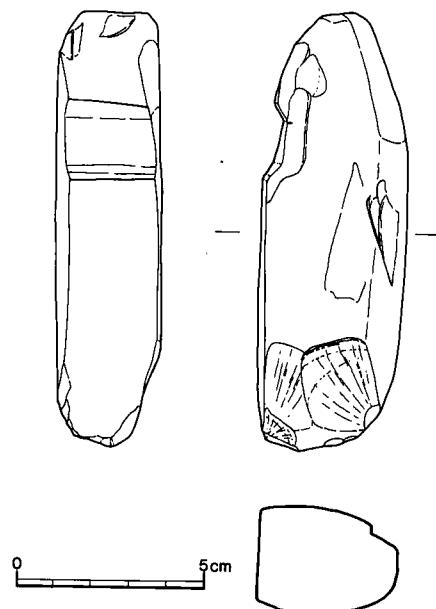
土器 (図版30、第12図)



第11図 5号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

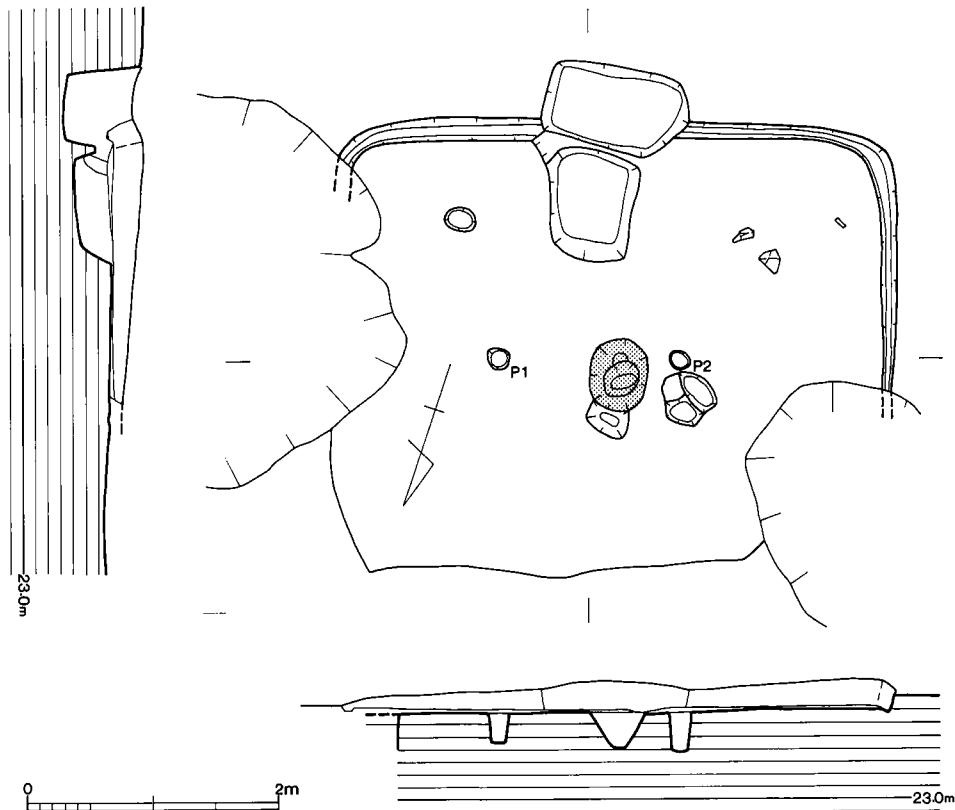


第10図 4号住居跡出土
石器・鉄器実測図 (縮尺1/2)



第12図 5号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2)

III 遺構と遺物



第13図 5号住居跡実測図（縮尺1/60）

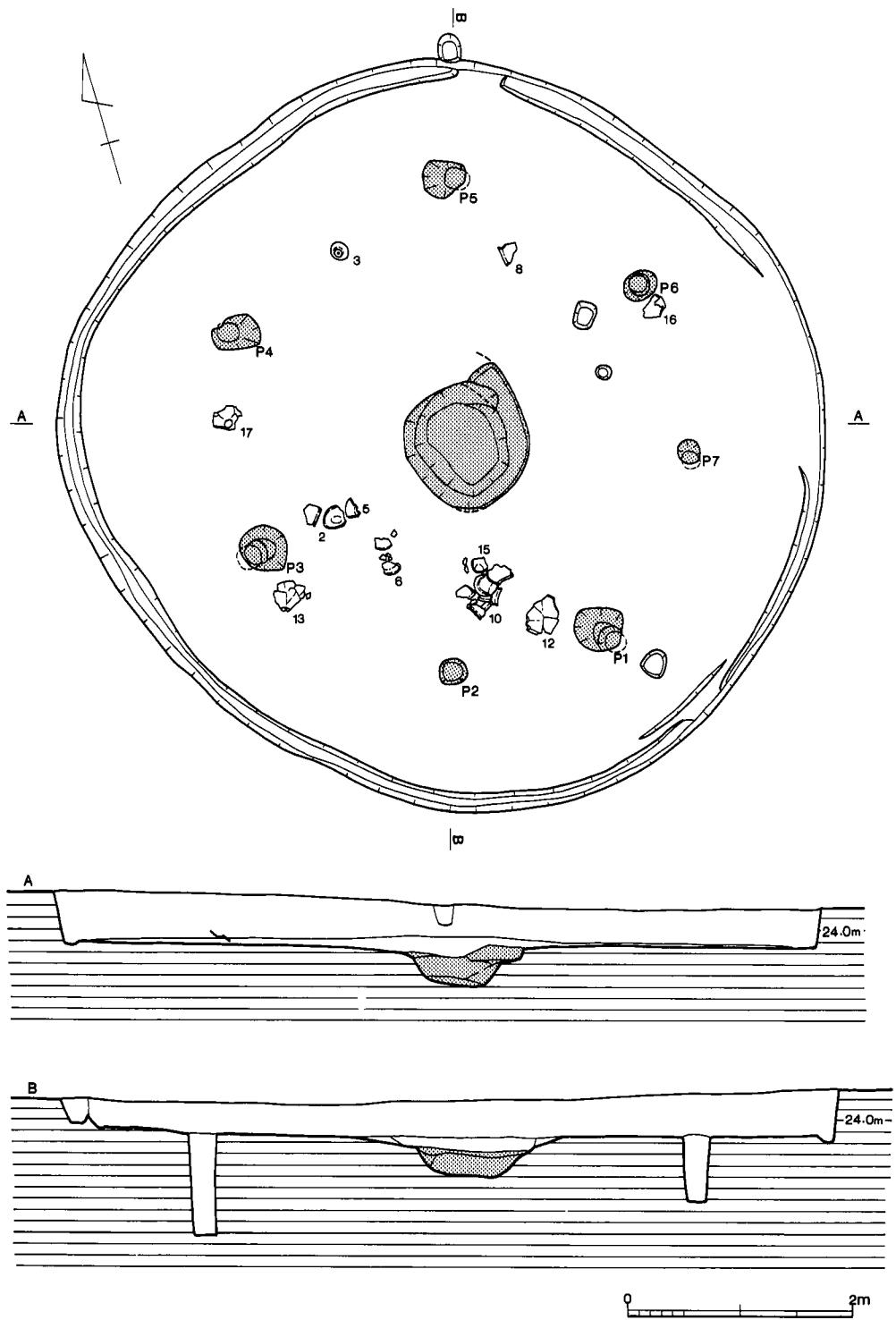
薄手の甕底部片である。器壁外面はハケ目調整、他はナデ調整される。復原底径8.3cm。黄茶色を呈し、焼成は良好である。

石 器（第13図）

頁岩質の柱状片刃石斧で、刃部を欠損する。基部から2.4cmほど下方に幅2cmの抉部をもつ。断面はかまぼこ状を呈す。現存長11.5cm、最大幅3.8cm、厚さ2.8cm、重さ250gを測る。

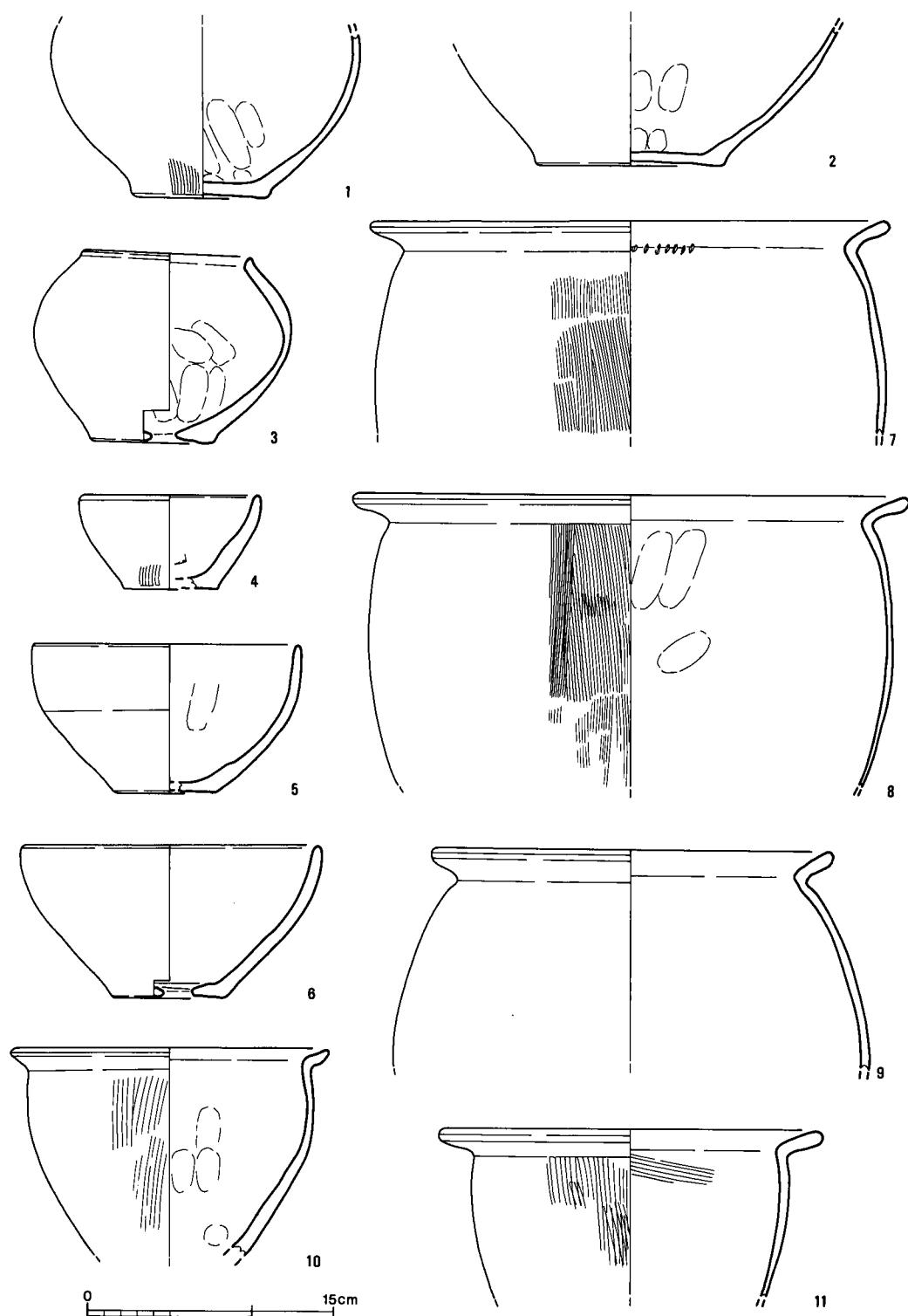
6号住居跡（図版13-2、第14図）

調査区西側中央から検出した住居跡である。南北6.64m、東西6.76mを測る楕円形の平面プランを呈する。壁は北側で約30cm、南側で約50cmを測り遺存状態は良好である。主柱穴は7本柱で構成され、4.4mの円周上に並ぶ。柱穴間はP₁-P₂が内角37°で、柱間距離は1.5m、P₂-P₃は56°で2.05m、P₃-P₄は55°で2.03m、P₄-P₅は68°で2.45m、P₅-P₆は54°で1.9m、P₆-P₇は46°で1.63m、P₇-P₁は44°で1.85mである。柱穴の深さは、P₁-76cm、P₂-60cm、P₃-94cm、P₄-

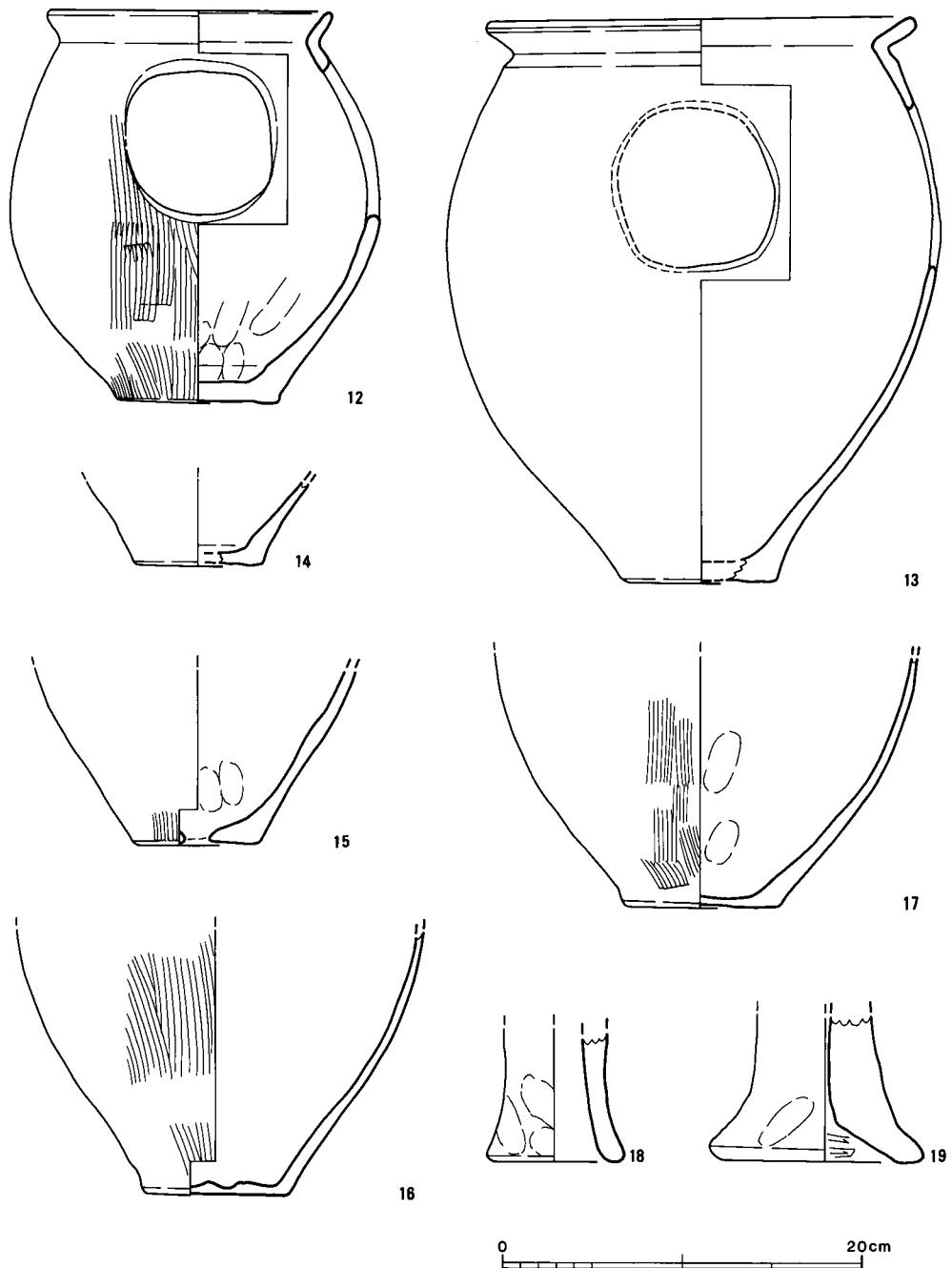


第 14 図 6 号住居跡実測図 (縮尺1/60)

III 遺構と遺物



第15図 6号住居跡出土土器実測図① (縮尺1/4)



第 16 図 6 号住居跡出土土器実測図② (縮尺1/4)

III 遺構と遺物

100cm、P₅—91cm、P₆—78cm、P₇—65cmである。周溝幅約15cm、深さ3~6cmで壁下を巡るが、P₃の外周で40cm、P₄—P₅間の外周で約1.7mとされる。またP₆の外周では周堤状に一部変化する。床面のほぼ中央に木の根で若干攪乱されているが、一辺1.1mを測る二段掘の隅丸方形の土壙がある。周壁は赤変し、埋土中に焼土を確認した。

出土土器はP₁—P₇—P₈と中央土壙間の床面から8個体分の土器片が集中して出土した。壺・壺・鉢がある。埋土中から石鏃が一点出土している。

土 器 (図版30~32、第15・16図1~19)

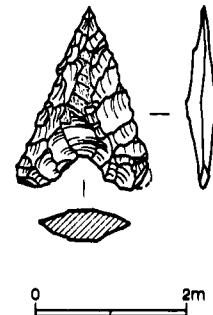
1~2は壺形土器の底部である。調整は外面胴部ハケ目、内面はナデで仕上げられる。1は底径7.7cm、2は11.0cmを測る。3は広口無頸壺で、口縁部は端部をつまみ上げ丸く仕上げる。底部は平底で焼成後に外側から穿孔し、甑として利用される。外面は磨滅のため調整不明。内面はナデ調整。胴部下半から底部にかけて黒斑が認められる。4~6は鉢形土器で内湾気味に立上る单口縁で端部は丸く仕上げる。外面は磨滅のため調整不明。4は一部ハケ目が見られる。内面はナデ調整。6の底部は焼成後に外側から穿孔され、甑として利用される。胴下半に黒斑が認められる。7~9は、内傾気味でいわゆる「く」字状をなす口縁をもち、胴も張る。外面ハケ目、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整。7の内面頸部稜線に刻目を施す。10~11は逆「L」字状の口縁部をもつ。調整は7~9と同様である。10は胴部内面に指頭圧痕が残る。12~13は「く」字状の口縁部をもつ壺で、焼成前の胴部上位にヘラによってあけられた隅丸方形の窓状の透しがはいる。12の透し窓は、幅8.5cm、高さ9cmを測る。13もほぼ同大に復原できる。12の調整は外面ハケ目、内面ナデ、底部に指頭圧痕が認められる。口縁部内外面ヨコナデされる。口径15.7cm、胴部最大径21.3cm、底径8.75cm、器高21.9cmを測る。暗褐色~淡茶褐色を呈し焼成は良好である。13は、頸部下に突堤状のにぶい稜線が入る。調整は、内外面ともにナデで仕上げられる。復原口径23.5cm、器高31.5cmを測る。14~17は、壺の底部の資料である。15の底部に穿孔がある。18~19は器台形土器である。18はいわゆる手捏ねの器肉の厚いもので指頭圧痕を顕著に残す。19はさらに肉厚で、内面下部にケズリが認められる。

石 器 (第17図)

良質の黒曜石製の石鏃である。抉りが入る三角形型である。長さ2.45cm、最大幅1.8cm、厚さ4.5mm、重さ1.1gを測る。

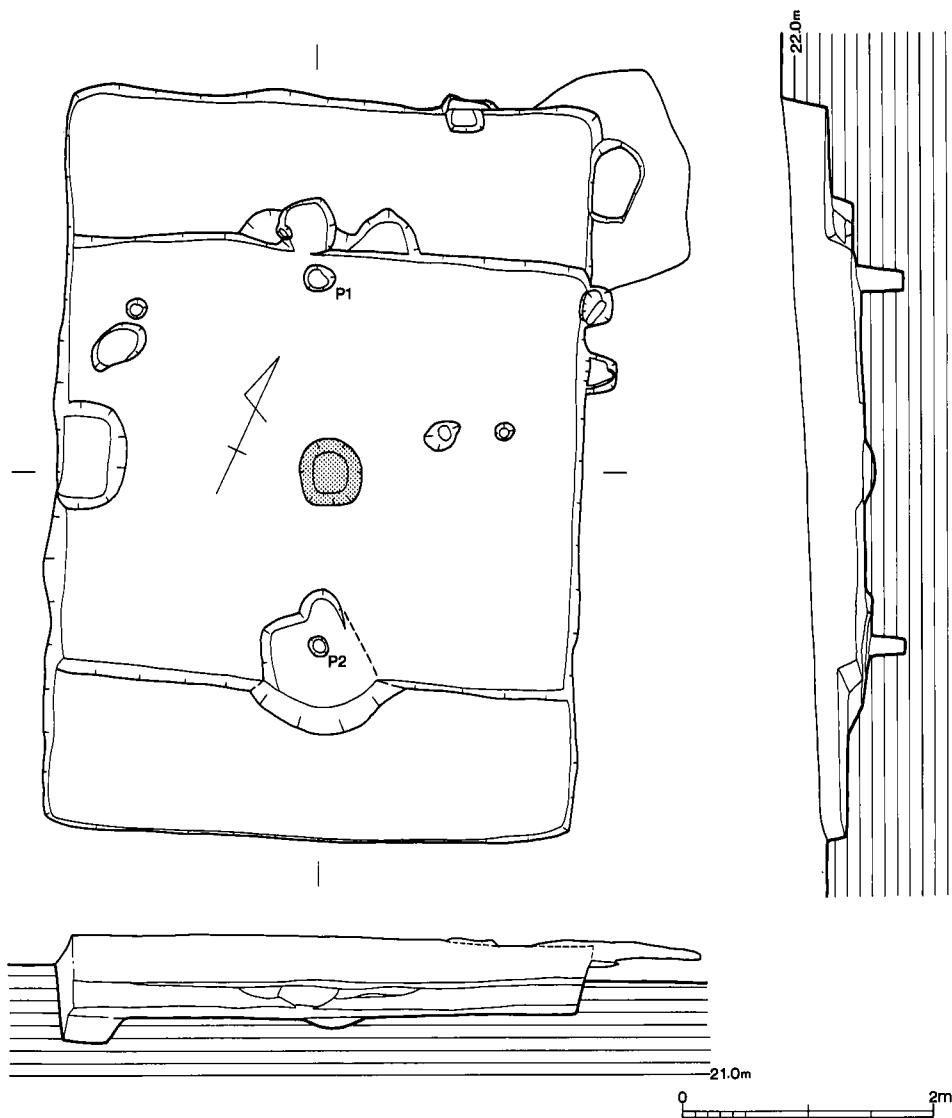
7号住居跡 (図版14、第18図)

調査区の中央東側で検出した竪穴式住居跡である。南側の谷に向う緩斜面上に立地する。平



第17図 6号住居跡出土
石鏃実測図 (実大)

面形態は南北方向が長い長方形プランを呈する。住居跡の北東隅はゴミ穴によって破壊されている。規模は、長壁5.90m、短壁4.2m、壁高は北側で40cm前後残存する。床面積は23.63m²である。主柱穴は2本である。P₁は径20cm、深さ25cm、P₂は径16cm、深さ18cmを測る。P₂の周囲は明確な二段掘ではないが、床面より7～8cm下がる。柱間の距離は2.92mを測る。炉跡は柱間の中央よりややP₂よりにあり、55cm×50cmの隅丸長方形で壁は暗赤色を呈する。ベッド状遺構は南北両短壁に沿って設けられている。南側は幅1.25m、床面からの高さは約10cm、北側は幅1.15m、高さ17cmを測る。両側とも主柱穴のある中央部付近は抉り取る。両側長壁中央床面に、85cm×50cmの長方形を呈する屋内土壙がある。深さは25cmを測る。周溝は認められない。



第18図 7号住居跡実測図（縮尺1/60）

III 遺構と遺物

出土遺物は埋土中から、甕・壺・鉢が出土した。他には石包丁、南側の床面直上から勾玉が一点出土している。

土 器 (第19図)

1 は、底部片で器形は不明。復原底径2.6cmと小さい。調整不明。2 は壺の胴部片である。

扁球形の胴部で、細頸の口頸部のつく壺であろう。外面上位、横方向のヘラ研磨、下位はナデ調整。内面は下位にハケ目が残る、他はナデられる。最大胴径は16.75cmに復原できる。暗茶褐色を呈し、焼成は良好。3 は鉢形土器で内湾気味に立上り、口縁端部は丸く仕上げられる。外面ハケ目、内面ナデ調整。復原口径12.65cm、器高6.15cmを測る。4 は甕の口縁部片で復原口径23.8cmを測る。

石 器 (図版35、第20図)

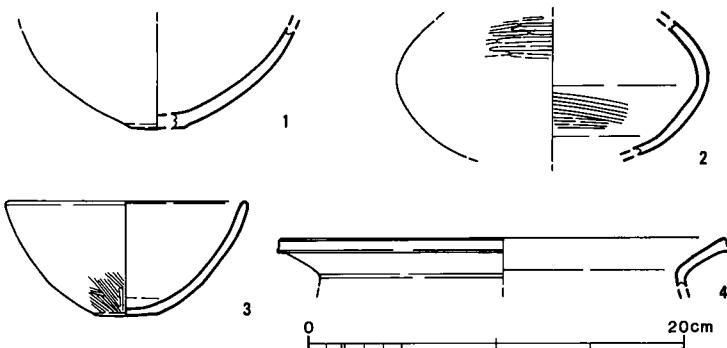
輝緑凝灰岩製の石包丁で、背縁は丸味をもち、背縁と刃部の接点がやや丸味を帯びる。穿孔は両側から行われる。全長11.4cm、幅4.02cm、厚さ5.67mm、左側穿孔径5.62mm、右側穿孔径4.78mm、重さ39.1gを測る。

勾 玉 (第21図)

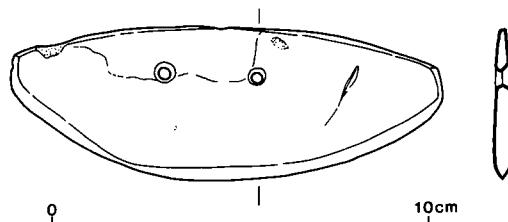
蛇紋岩製の勾玉で、灰褐色を呈する。C字形で、背部に丸味をもつ。穿孔は両側から行われるがほとんど段差はない。長さは2.7cm、胴部幅8.03mm、厚さ7.4mm、孔径1.8mm、重さ3.6gを測る。

8号住居跡 (図版15-1、第22図)

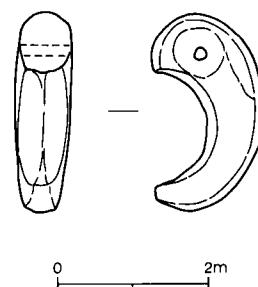
調査区の北西側端から検出した小形の竪穴式住居跡である。周囲は、調査区中央にある建物に通じる道や配管関係の溝等によって攪乱が著しい。当住居も東側が破壊されているが、残存する壁の一部からほぼ全容を把握することができた。平面形態は東西がやや長い長方形プラン



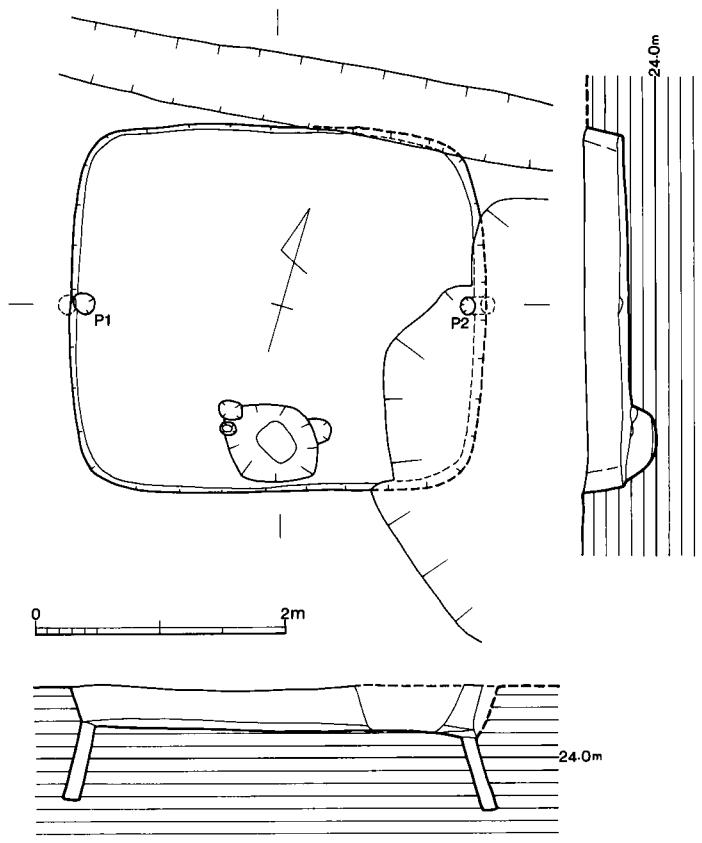
第19図 7号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)



第20図 7号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2)



第21図 7号住居跡出土
勾玉実測図 (実大)



第22図 8号住居跡実測図（縮尺1/60）

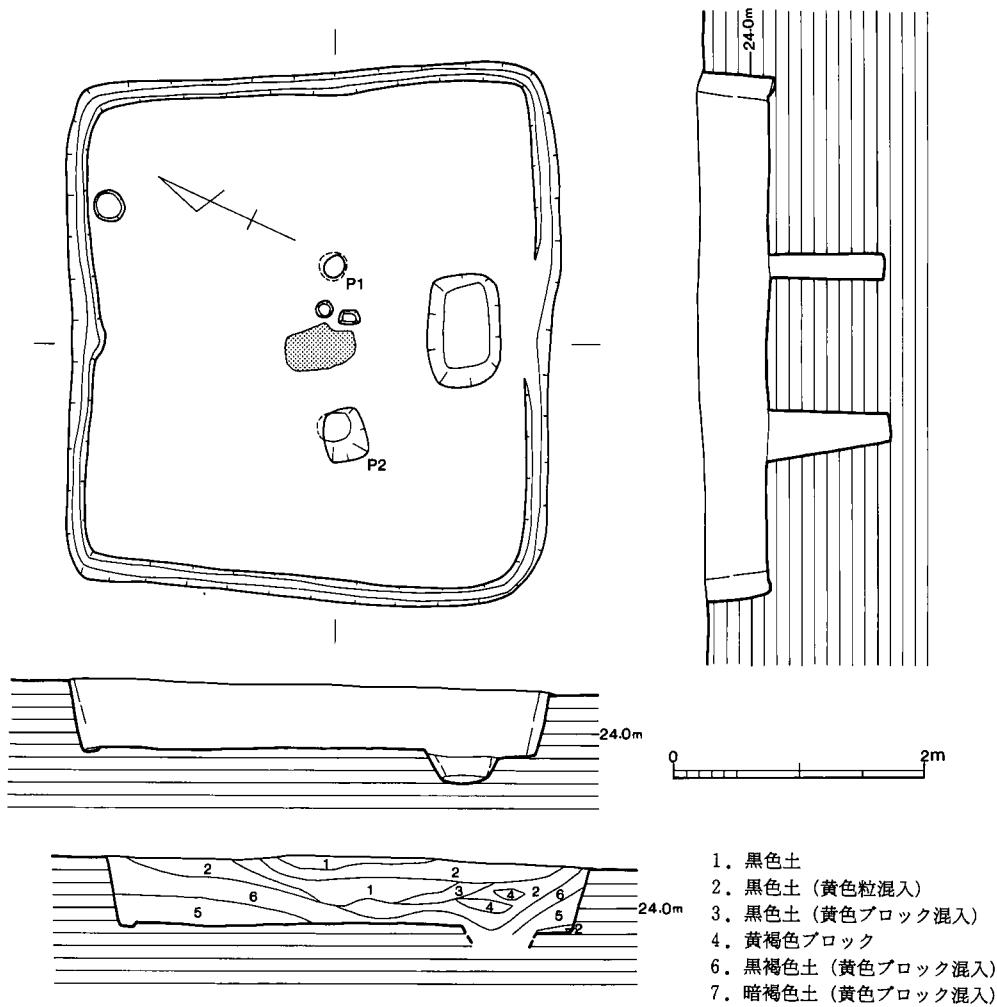
を呈する住居である。規模は長壁3.30m、短壁2.90m、壁高35cmを測る。床面積は、8.44m²である。主柱穴は2本である。P₁は径16cm、深さ60cm、P₂は径14cm、深さ58cmを測る。柱穴の掘込みは住居の外側に向かって斜めに掘られている。柱穴の中軸線の傾斜角はP₁が76°、P₂が72°である。上部構造がいかなるものか興味深い。P₁—P₂の柱間の距離は、上端の中心で3.05m。中軸線の方向はN16.5°Wである。南壁側中央の床面に75cm×60cm、深さ25cmを測る隅丸長方形の屋内土壙がある。両端にピット状の落込みがある。炉跡の確認はできなかった。

埋土中から弥生式土器の小破片が出土したが図示できない。

9号住居跡（図版15-2、第23図）

調査区中央部の建物西側から検出した竪穴式住居跡である。平面形態は方形を呈する。各壁長は、北壁3.95m、南壁4.30m、東壁3.80m、西壁3.75mを測る。壁高約50cmを残す。床面積は、15.04m²である。主柱穴は2本であるが住居の中央からやや南寄りに掘り込まれている。P₁は径17cm、底径がやや大きく22cm、深さ92cm、P₂は上端は40cm×34cmの長方形で底径23cm、深さ97cmを測る。柱間の距離は1.30mを測る。P₁—P₂の方向はN25°Wである。炉跡の掘込みはないが主柱穴間中央に55cm×30cmの範囲で焼土を確認した。屋内土壙は、南壁に沿った中央部分

III 遺構と遺物



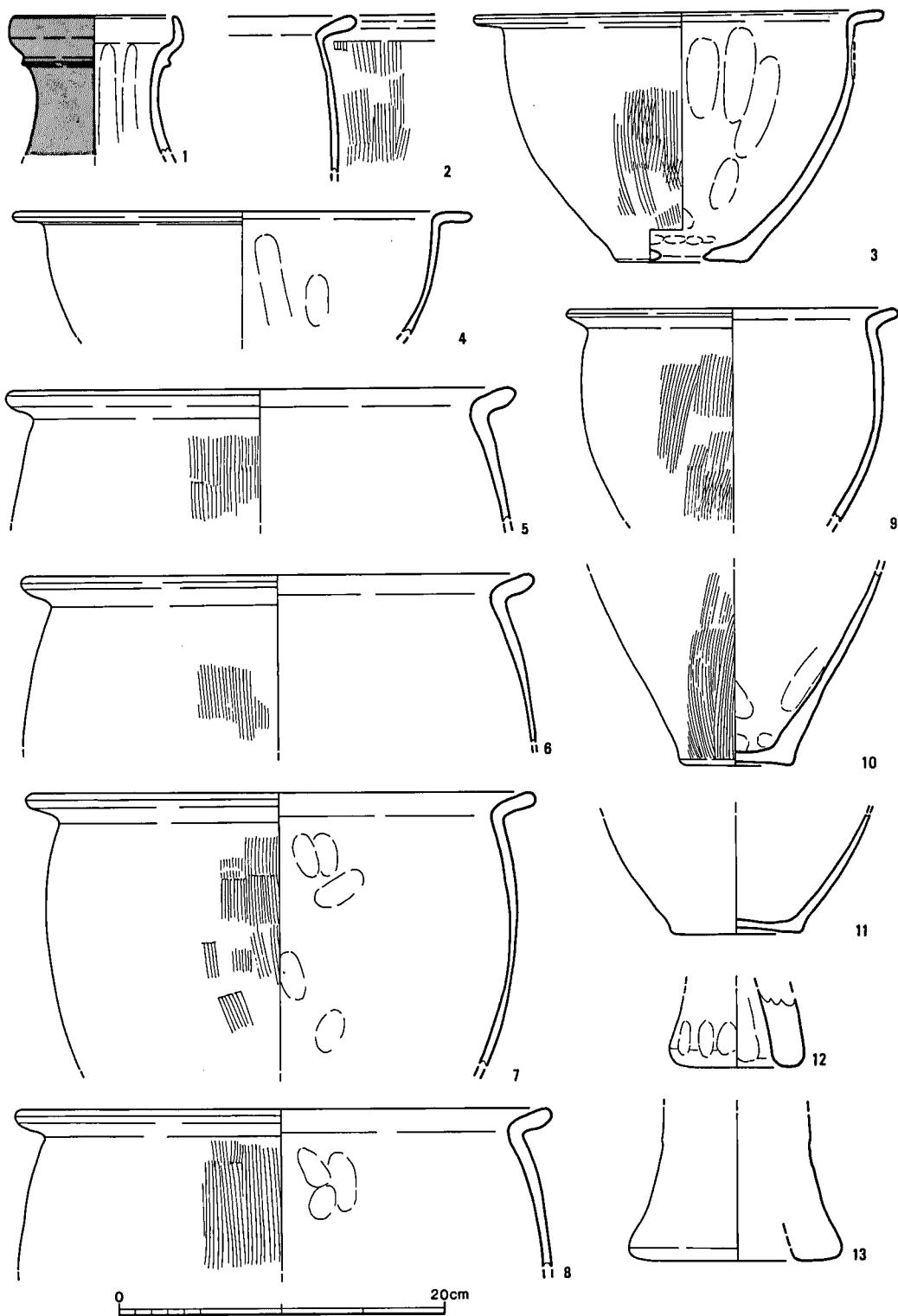
第 23 図 9号住居跡実測図 (縮尺1/60)

にある。他の住居跡の様に壁際でなく約30cm内側にある。規模は90cm×60cmの隅丸長方形を呈する。周溝は壁下を巡るが南壁中央で約90cmとされる。ベッド状遺構はない。

出土遺物は埋土中から、壺・鉢・甕・器台の破片が出土した。

土 器 (図版32、第24図)

1は、口縁部が袋状をなすもので、口縁下に三角形状の突帯を施す。頸部内面はナデ調整、外面は丹塗り磨研が施される。精良な胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。3・4は、鉢形土器で、逆「L」字状を呈する口縁部をもつ、3は平底で焼成後の穿孔がある。外面はハケ目、内面に指頭圧痕が残る。2・5～9は、弱い「く」字状の口縁部をもつ甕形土器である。胴部は



第 24 図 9 号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

III 遺構と遺物

膨みをもつ。口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部内面はナデ、外面はハケ目調整。10・11は底部のみの資料である。10は平底で胴部にかけて膨みをもたない。外面ハケ目調整。内面には指頭圧痕が残る。12・13は器台形土器の破片。12は指頭圧痕を顕著に残している。13の外面は工具使用によるナデ調整。内面は不明。

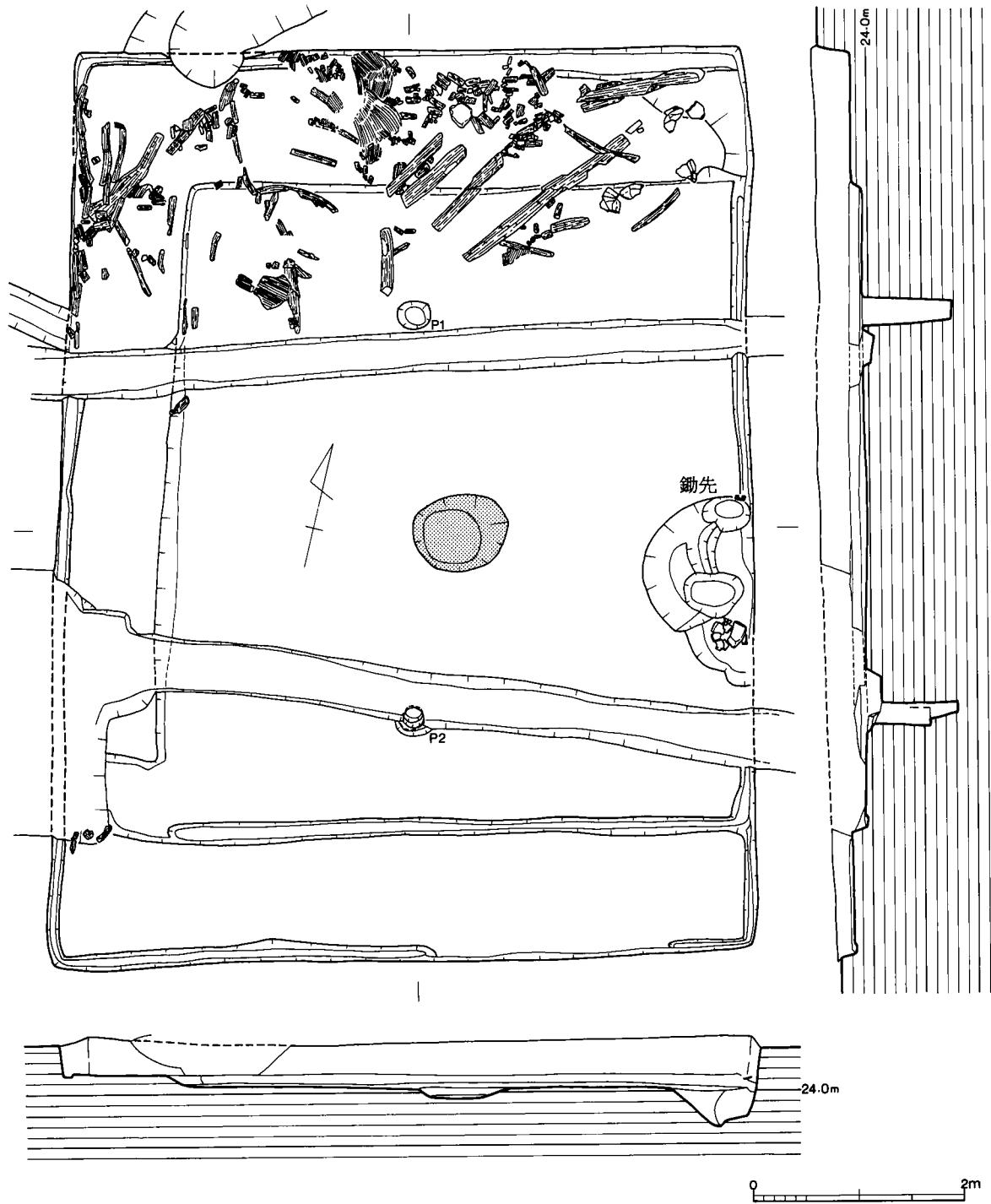
10号住居跡（巻頭図版6-1、図版17、第25図）

調査区東側端から検出した大形の竪穴式住居跡である。谷の北側の平坦部に位置し、北側に11号・12号住居跡が連なる。西側の建築物に伴う排水管を設置した溝やゴミ穴によって床面や西側壁の一部、北側壁の一部を破壊される。平面形態は長方形プランを呈し、南北壁が長い。長壁8.65m、短壁6.70m、壁高約40cmを測る。床面積は54.41m²である。主柱穴は2本で、P₁は径30cm、深さ83cm、P₂は上端は溝で破壊されるが径20cm、深さ86cmを測る。柱間の距離は3.80mを測る。P₁・P₂の中軸方向は、N14°Wである。炉跡は柱穴間の中央やや東側に設けられる。90cm×72cmの楕円形を呈し、深さは約9cmである。壁は赤変している。ベッド状遺構は、南壁・西壁・北壁で3辺に設けられる。南壁と西壁南側の部分は、幅が狭くなつて続くか、あるいは切れるか、攪乱のため不明である。幅は南壁側が1.2m、西壁側1m、北壁側が1.3mで床面からの高さは10cm～14cmである。周溝は壁際を巡るが南で一部切れる。また南壁ベッド状遺構の内側にも溝が認められた。屋内土壌は東壁中央に設けられている。1.8m×1mの半円形を呈する。壌内にピット状の掘込がある。本住居跡は火災にあっており北壁側に集中して炭化した木材を検出した。幅12cm～15cmの板状の部材と幅5cm前後の棒状の部材とがあるが加工痕までは確認できない。一部カヤと思われるものもある。出土状態から北東側に倒壊したものと考えられる。

出土遺物は、壺・鉢・甕・高杯の破片が北側の床面、ベッド状遺構上面から出土した。石器は石包丁、砥石、屋内土壌北側の床面から7cm程浮いた状態で青銅製鋤先が出土している。

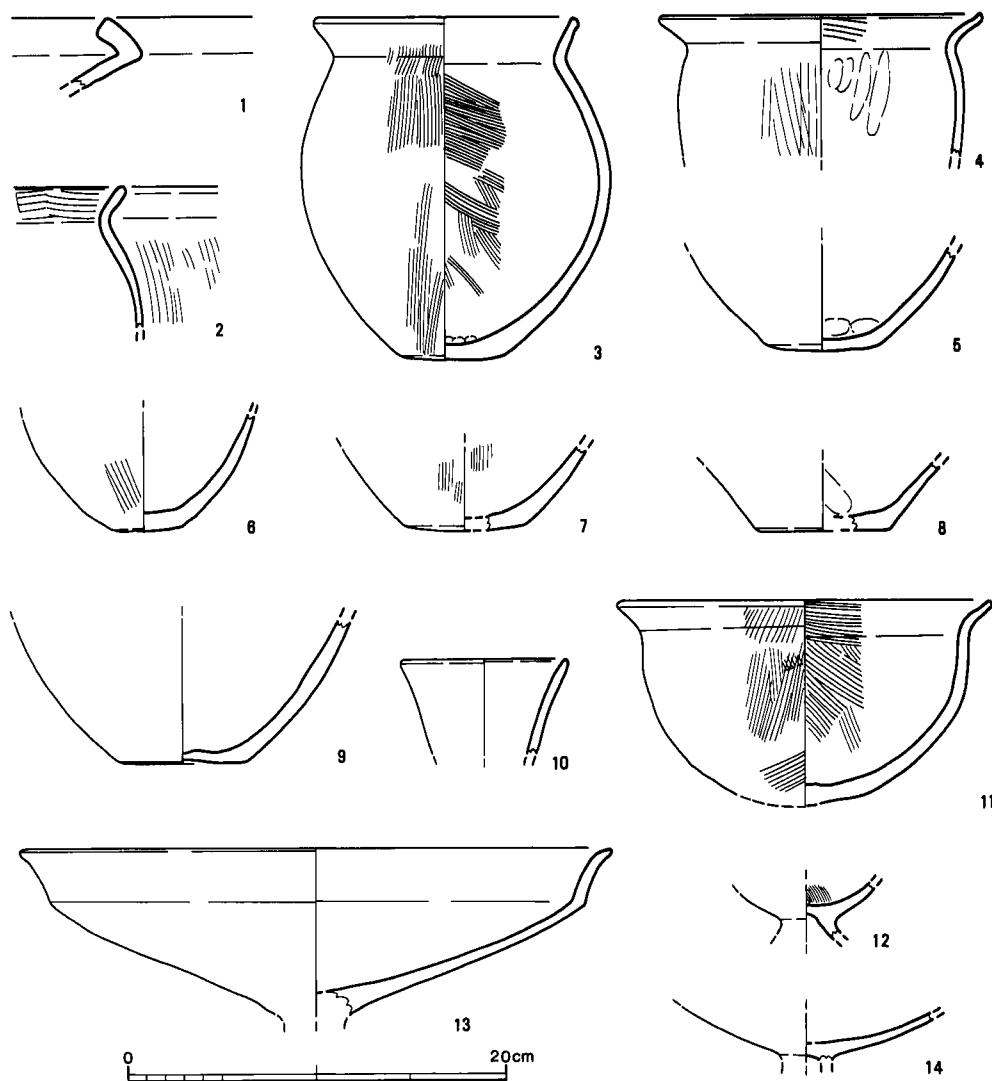
土器（図版33、第26図）

1は壺形土器の複合口縁片。ヨコナデ調整。2は甕形土器の口縁部片。口縁部内面と、外面頸部以下はハケ目調整。他はナデて仕上げる。3は「く」字状口縁をもつ甕で、胴部は膨らみ底部は丸底気味の平底を呈する。口縁端部は上方にわずかにつまみ出す。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外部はハケ目調整される。内面底部に指頭圧痕が残る。口径13.6cm、底径5.6cm、器高18.25cmを測る。暗茶褐色を呈し、焼成は良好、胴部下半に黒斑が認められる。4は口縁部片で、端部は上方につまみ上げる。口縁部内面と胴部外面に粗いハケ目が残る。復原口径17.1cm。5～9は底部のみの資料で、5・7は丸底気味。6は丸底に近い。8・9は平底である。10は、細頸の長頸壺の口縁部片である。磨滅のため調整不明。11は、「く」字状の口縁部がつく鉢で、胴部は丸味を帯び、底部は丸底である。調整は胴部内外面ともにハケ目、底部内外面は



第 25 図 10号住居跡実測図 (縮尺1/60)

III 遺構と遺物

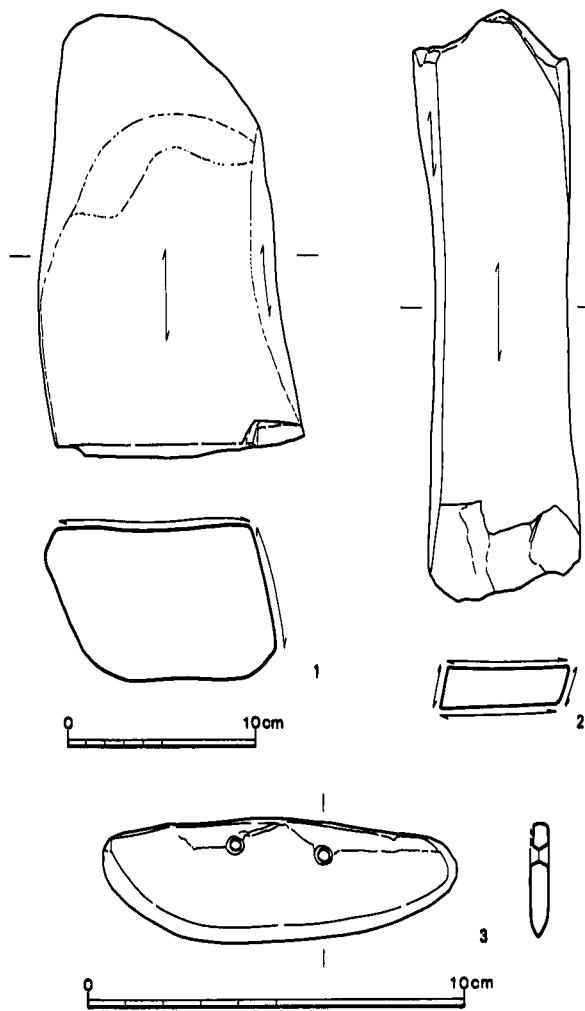


第26図 10号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

ナデて仕上げられる。口径19.6cm、器高11.0cmを測る。胴部下半から底部にかけて黒斑が認められる。12は、器形は不明。小形の鉢形の杯部に脚がつくものだろうか。13は復原口径31.4cmを測る高杯形土器杯部である。杯底部の屈折が明瞭で、外反する杯部をもつもので、杯部外面はヨコナデ、他は調整不明。14は杯底部片である。調整不明。

砥石 (図版35、第27図1・2)

1は砂岩製の砥石。上、横の2面を砥面として用い自然面を多く残す。砥面の中央部は窪む。長さ23.3cm、最大幅12cm、厚さ8cm、重さ3680gを測る。2は粘板岩製の砥石で、木口以外の4面を砥面として用いており、よく使いこまれ中央部は薄い。長さ15.6cm、中央部幅3.4cm、厚



第 27 図 10号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2・1/4)

さ 1 cm、重さ 183 g を測る。

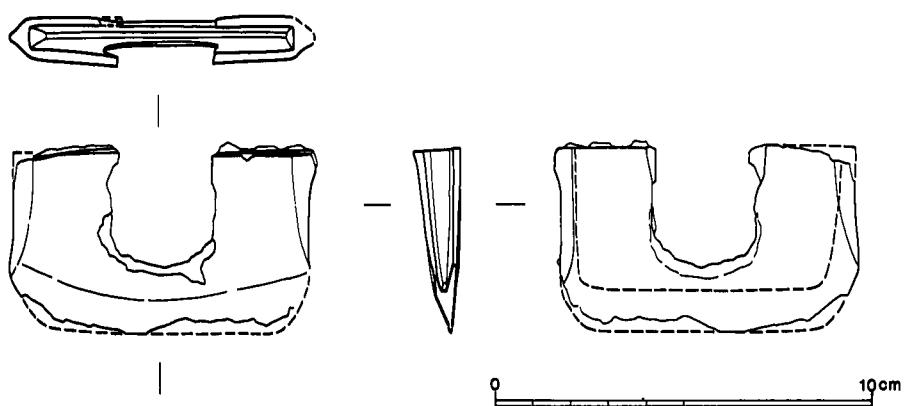
石包丁 (図版35、第27図 3)

砂岩製の石包丁で、背縁は丸みをもち、背縁と刃部の接点も丸味を帶びる。穿孔は両側から行われる。全長9.34cm、幅3.26cm、厚さ5.41mm、左側穿孔径4.76mm、右側穿孔径4.92mm、重さ 23.9 g を測る。

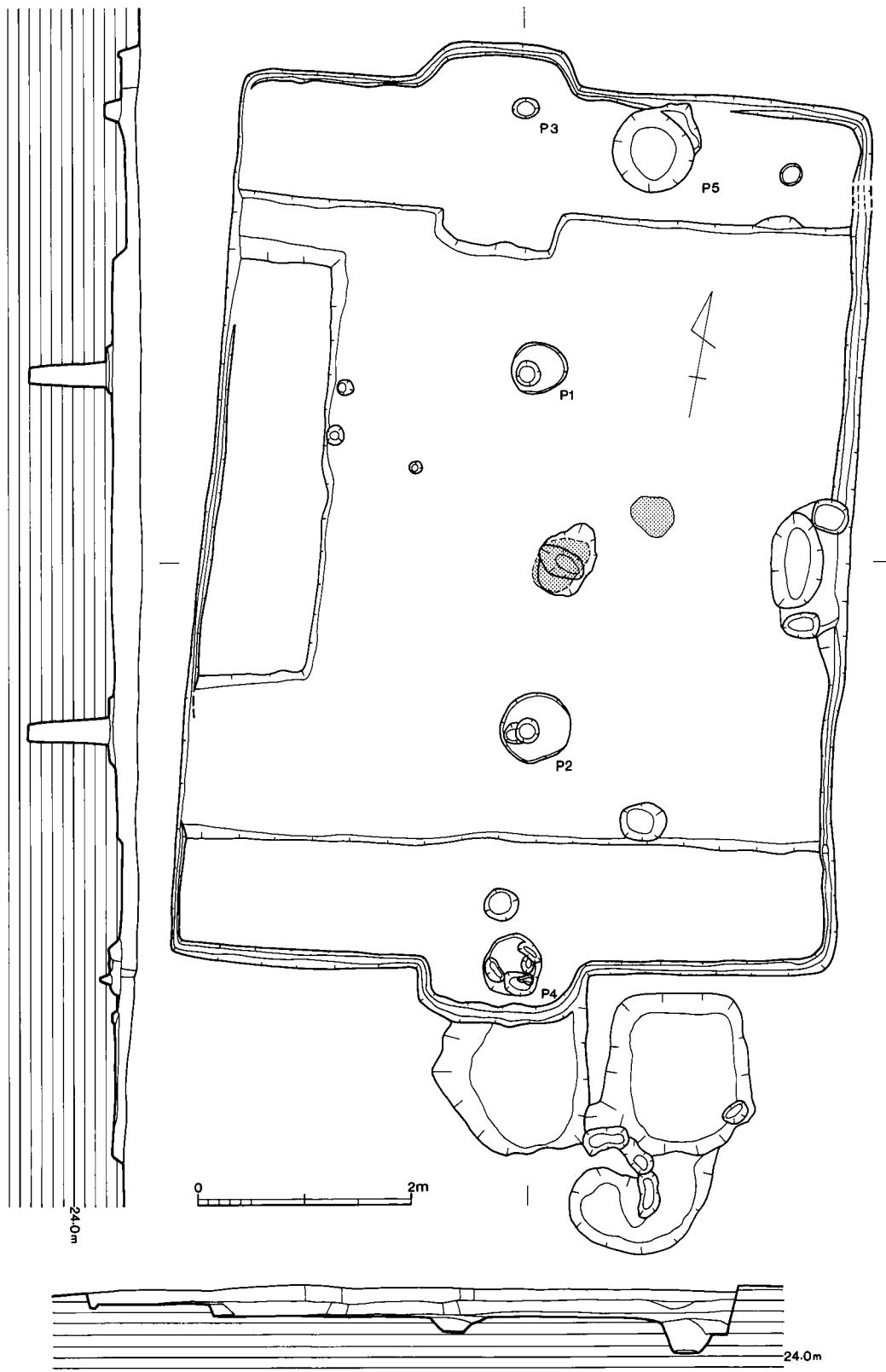
青銅製鋤先 (図版34、第28図)

10号住居跡東側壁中央の屋内土壌北側から出土した青銅製鋤先である。

袋部と刃部の一部を欠損するが、原形を復原できる。全長4.9cm、袋基部幅8.2cm、袋基部厚1.25cmを測る。無突蒂形式のものである。袋部内法長3.8cm、袋部内法幅7.0cm、袋部内法厚0.8cmを測る。刃部幅は8 cm、刃部長0.9cmを測り、片刃である。全体に脆く表面が剝げた状態で斑状になる。研磨痕や使用痕等は不明である。色調は淡緑色を呈する。



第 28 図 10号住居跡出土青銅製鋤先実測図 (縮尺1/2)



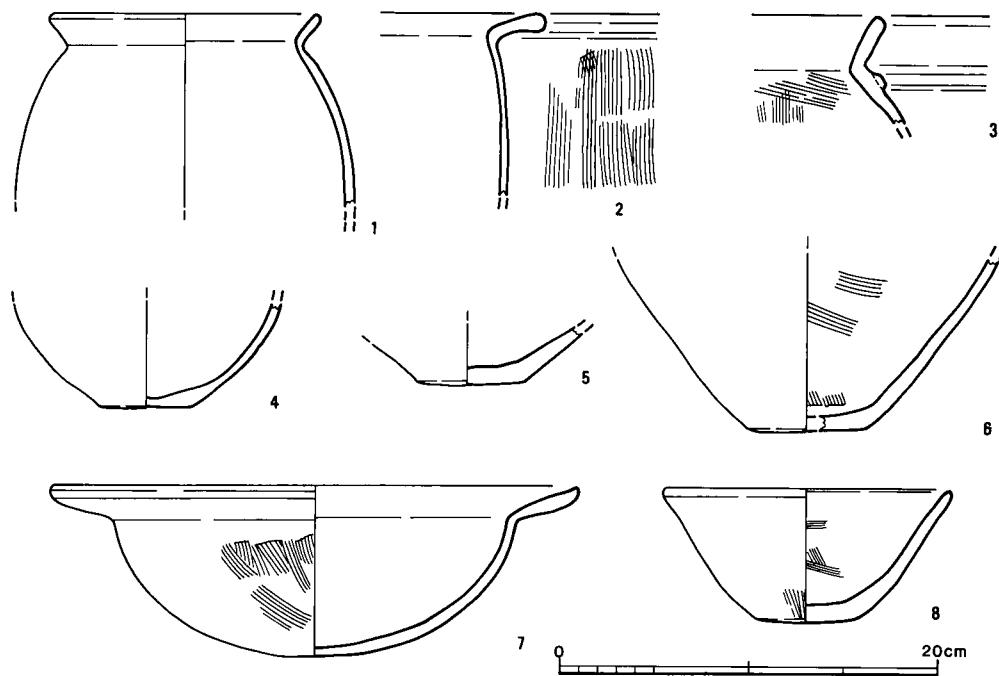
第 29 図 11号住居跡実測図 (縮尺1/60)

11号住居跡（図版16-2、18-1、第29図）

調査区東側端、10号住居跡北側5mから検出した大形の竪穴式住居跡である。10号、12号とともに谷の北側平坦部を占地している。上部は削平を受けている。平面形態は10号住居跡同様南北に長い長方形プランを呈するが、両短壁中央に短い張出し部を設ける。北壁では台形状を呈し35cm、南壁では50cm張出す。平面は歪で、西壁長8.30m、東壁8.00m、南壁6.14m、北壁5.85m張出し部を含めて中軸の長さは9.14mを測る。床面積は49.53m²である。主柱穴は2本とともに二段堀である。P₁の径23cm、深さ74cm、P₂は径22cmで深さ75cmを測る。P₁-P₂の中軸方位はN10°Wである。柱間の距離は3.35m。この中央や東側に70cm×50cmの規模の炉跡がある。埋土には炭化物と焼土がつまる。この北東側で径約40cmの範囲で炭化物が認められた。ベッド状遺構は南・西・北壁に沿って設けられるがそれぞれ独立する。南壁側は幅1.2m、高さ16cm、西壁側は幅1.1m、高さ11cm、北壁側が1.2m、高さ10cmである。この北壁側のベッド状遺構内側中央には外側の張出し部と合せる様に内側へ張出し部を設けている。さらにこのベッド状遺構には径70cm、深さ86cmの円形土壙P₅がある。周溝は壁下を巡る。東壁中央床面に90cm×50cm規模の屋内土壙があり両端にピットが付く。なお、ベッド状遺構上の中軸線上にP₃・P₄があるがこの住居跡の主要な柱かも知れない。

出土遺物は、埋土中から壺・甕・鉢の破片、石包丁・砥石等が出土した。

土 器（図版33、第30図）



第30図 11号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

III 遺構と遺物

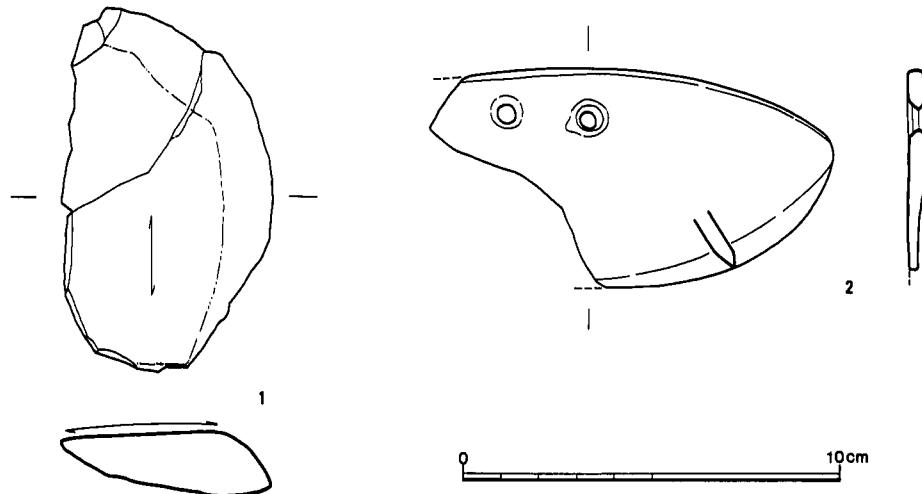
1は「く」字状口縁をもつ甕、口縁部内外面ヨコナデ調整。他は不明。2はやや内傾気味の逆「L」字状口縁をもつ甕の口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ目、内面はナデで仕上げる。3は、「く」字状口縁を呈し、頸部に台形突帯を施す。4～6は底部片。7は、浅い球形の胴部に、内傾し端部をつまみ上げる口縁部をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ナデ、外面ハケ目、底部ナデ調整される。復原口径28.1cm、器高9.15cmを測る。8はやや外反気味に立ち上がる単口縁の鉢で、口径15.25cmを測る。丸味をもつ底部はナデ調整。胴部内外面にハケ目が残る。

砥石 (図版35、第31図-1)

砂岩製の砥石で、砥面は1面だけである。長さ9.6cm、幅5.6cm、厚さ1.65cm、重さ110g。

石包丁 (図版35、第31図-2)

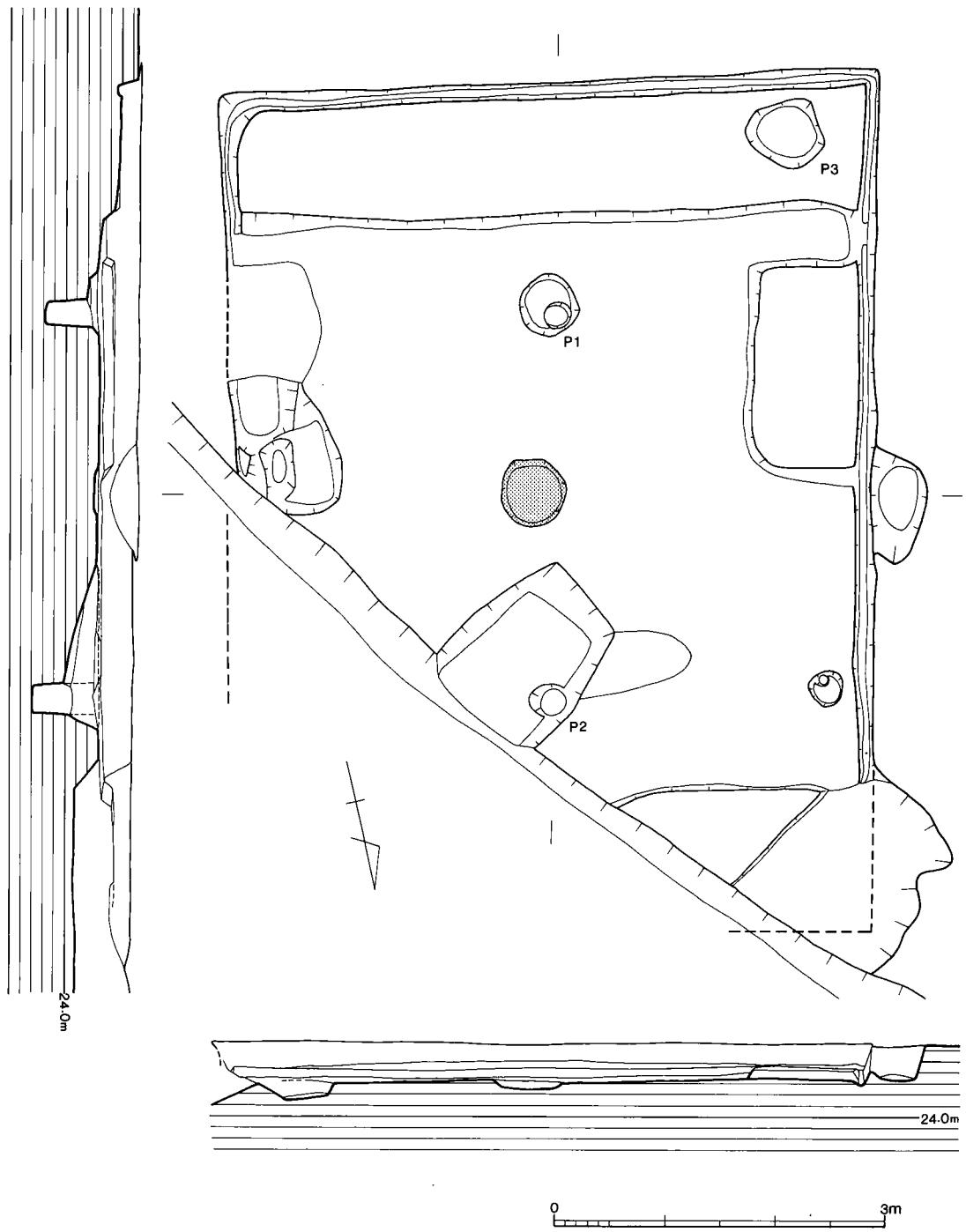
砂岩製の石包丁で約1/3を欠損。背縁から刃部にかけて丸味をもつ。残存長10.73cm、幅5.85cm、厚さ5.08mm、残存重量39.5g。両側から穿孔され、穿孔径は左4.80mm、右6.75mmを測る。



第31図 11号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2)

12号住居跡 (図版18-2、第33図)

12号住居跡は調査区の北東側端で検出した大形の堅穴式住居跡で、11号住居跡の北側5m離れた位置にある。上部の削平北東側の約1/4強を基地の外柵工事、植樹等で破壊されている。平面形態は北壁側の破壊のため明確ではないが残存状況から長方形プランであると考えられる。規模は長壁は復原すると7.85m程になる。短壁は5.97m、壁高は33cmを測る。現存する床面積は32.15m²で復原すると48m²程になろう。主柱穴は2本で、P₁は径24cm、深さ46cm、P₂は上部をユンボによって削られている。径25cm、床面からの深さは54cmを測る。柱間の距離は3.50m、



第 32 図 12号住居跡実測図 (縮尺1/60)

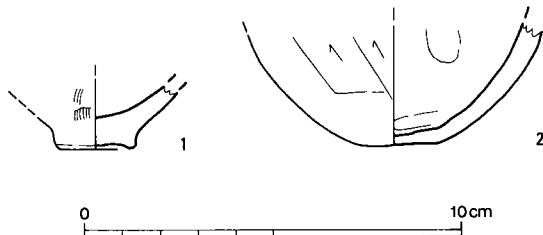
III 遺構と遺物

P_1-P_2 の中軸線の方向は、N13°Eである。炉跡は柱穴間中央にあり径60cmの円形を呈し、深さ4cm～5cmである。ベッド状遺構は、南・西・北側の壁に認められる、南壁側は幅1.16m、高さ約8cm、西隅に70cm×60cmの深さ12cm程の土壙 P_3 がある。西壁側は10号・11号住居跡に比して短かく、長さ2m、幅1.05m、高さ10cmである。東側壁には屋内土壙が設けられるが攪乱のため詳細は不明である。周溝は壁下を全周するものであろう。

出土遺物は、弥生式土器の小破片、砥石・石包丁が出土している。

土器 (図版32)

1はミニニア土器の底部片。底部1.7cm～1.9cmを測る。外面にハケ目が残る。内底部はナデ調整。2は小形の土器底部である。外面はヘラ削調整される。内面はナデ、指頭圧痕が残る。



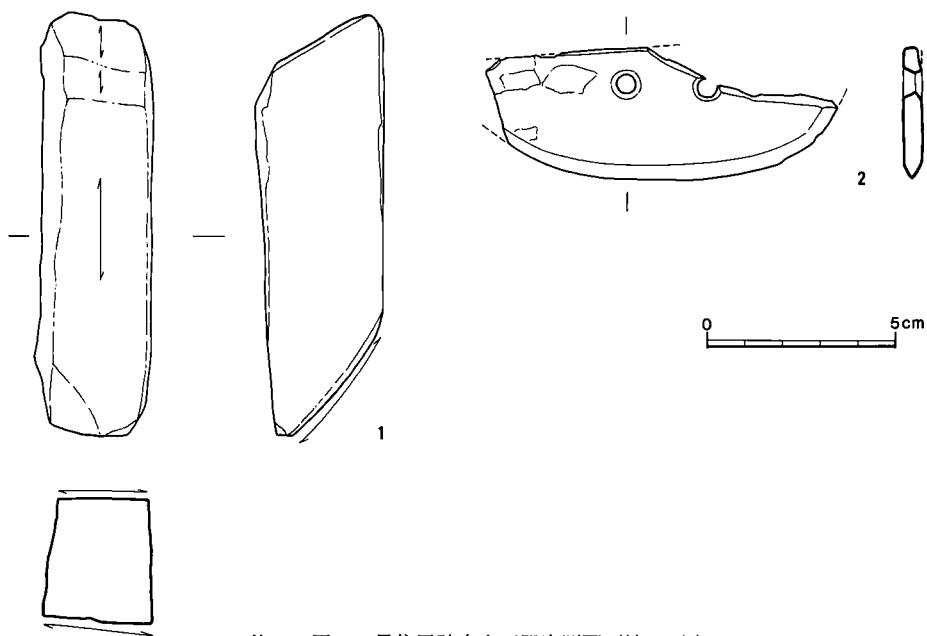
第33図 12号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

砥石 (図版35、第34図1)

砂岩製の砥石で、4面を砥面として使用している。長さ11cm、幅3.9cm、厚さ3.25cm、重さ180gを測る。

石包丁 (図版35、第34図2)

砂岩製の石包丁で、背側2/3と両端を欠損する。現存長9.34cm、幅3.5cm、厚さ5.2mm。穿孔は両側からで、左側穿孔径7.64mm、右側穿孔径6.99mmを測る。



第34図 12号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2)

2. 堀立柱建物跡

1号堀立柱建物（図版19-1、第35図）

調査区南側端から検出した。2間×1間の建物である。P₂～P₅間の中央に柱穴が1個存在するが、この建物と関連あるものかどうか不明。梁行間2.51m、桁行間3.02mを測る。桁行方向はN11.5°Wである。掘方の径は50cmをこえる。

出土遺物は図示しうるものはない。

2号掘立柱建物（巻頭図版5-1、図版19-2、第35図）

調査区南西側で検出した。西側に7号竪穴がある。2間×1間の6本柱の建物で、梁行間2.25m、桁行間4.36mを測る。柱穴の掘方はP₁、P₅は二段掘りである。桁行方向はN80.5°Wである。

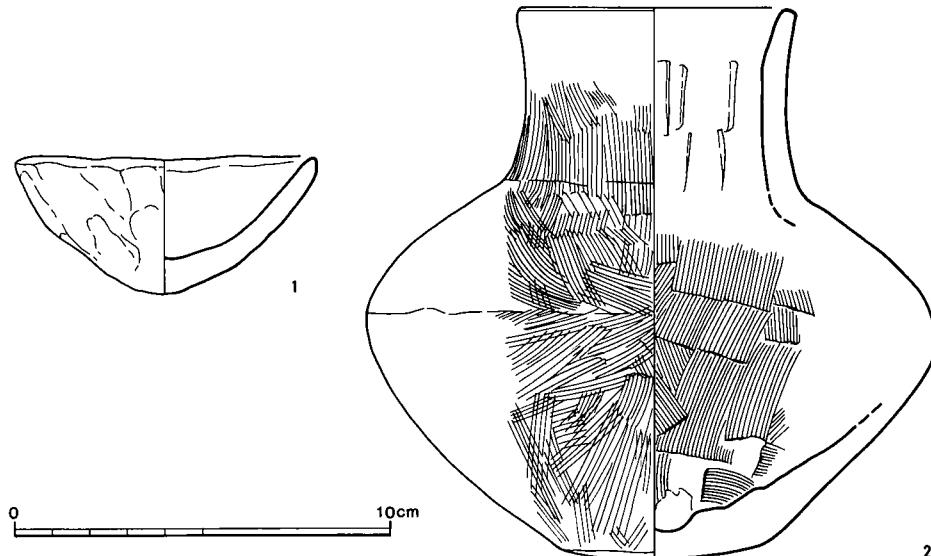
出土遺物はP₁の埋土中から手捏ね土器の完形品が1点出土した。

土器（第36図1）

1は口縁径7.8cm、器高3.75cmを測る手捏ね土器である。外面には指頭痕がよく残る。胎土には砂粒を多量に含む。色調は淡橙褐色を呈す。焼成は良好である。

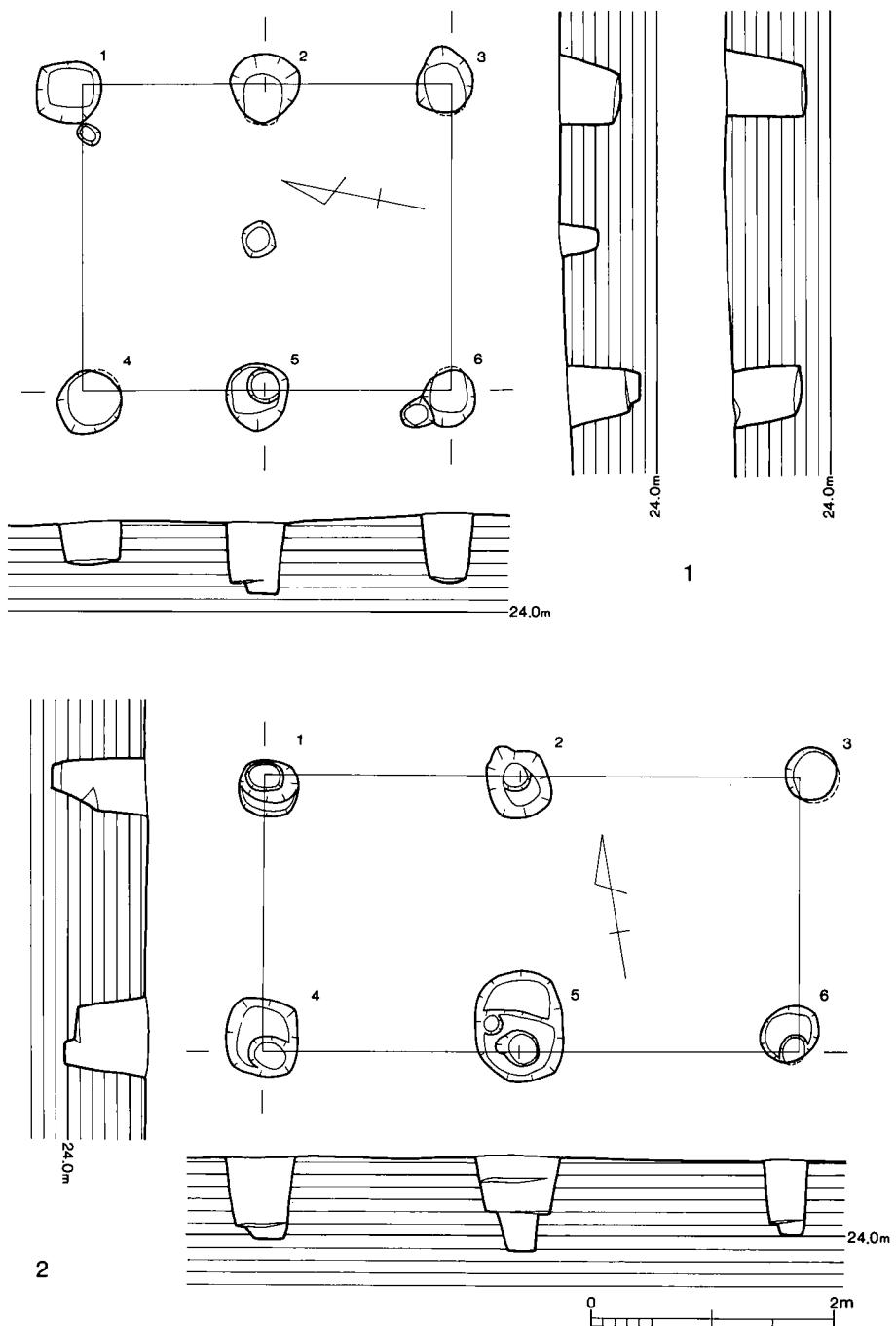
3号掘立柱建物（巻頭図版6-2、図版20、第37図）

調査区中央東側、7号住居跡北側4mに位置する。2間×1間の6本柱建物である。梁行間



第35図 2・3号堀立柱建物出土土器実測図（縮尺1/2）

III 遺構と遺物



第36図 1・2号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）

3.07m～3.20m、桁行間4.08mを測る。桁行方向はN23°Wである。P₅の埋土中、掘方上端から20cmで完形品の長頸壺が出土した。柱を据えるには障害になる位置である。祭祀関連の土器であろうか。2号掘立柱建物出土の手捏ね土器とともに今後注目していきたい。

土 器 (第36図-2)

扁球形の胴部に立ち気味の頸部がつき、口縁部わずかに外反する長頸壺である。口縁端部は丸味をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、さらに部分的にナデ。外面頸部、胴部はハケ目調整。底部はナデ、一部ハケ目。内面は頸部が工具の使用による横方向のナデ、部分的にナデ調整、胴部はハケ目調整、底部はナデ調整。細小砂粒を多く含む。色調は内面黄褐色。外面は明橙色を呈し、口縁から底部にかけて広範囲に黒斑が認められる。口径7cm、最大胴径15.1cm、底径5.6cm、器高14.75cmを測る。焼成は良好である。

4号掘立柱建物 (第36図)

7号住居跡西側から検出した1間×1間の建物である。P₁～P₂が2.76m、P₃～P₄が2.92m、P₁～P₃・P₃～P₄が3.15mの間隔に配置されている。P₂～P₄の方向はN33.5°Eを示す。掘方の径は41cm～50cmで、深さは50cm～67cmを測る。P₄から土器の小破片が出土したが図示できる資料ではない。

5号掘立柱建物 (第38図)

7号住居跡の東側、谷の北側緩斜面上から検出した1間×2間の建物である。梁行間P₁～P₄が2.69m、P₂～P₅が2.70m、P₃～P₆は2.90m、桁行間P₁～P₃が4.28m、P₄～P₆は3.98mを測る。桁行方向はN11°Wを示す。掘方は深くしっかりしている。P₄は深さ84cmを測る。出土遺物はない。

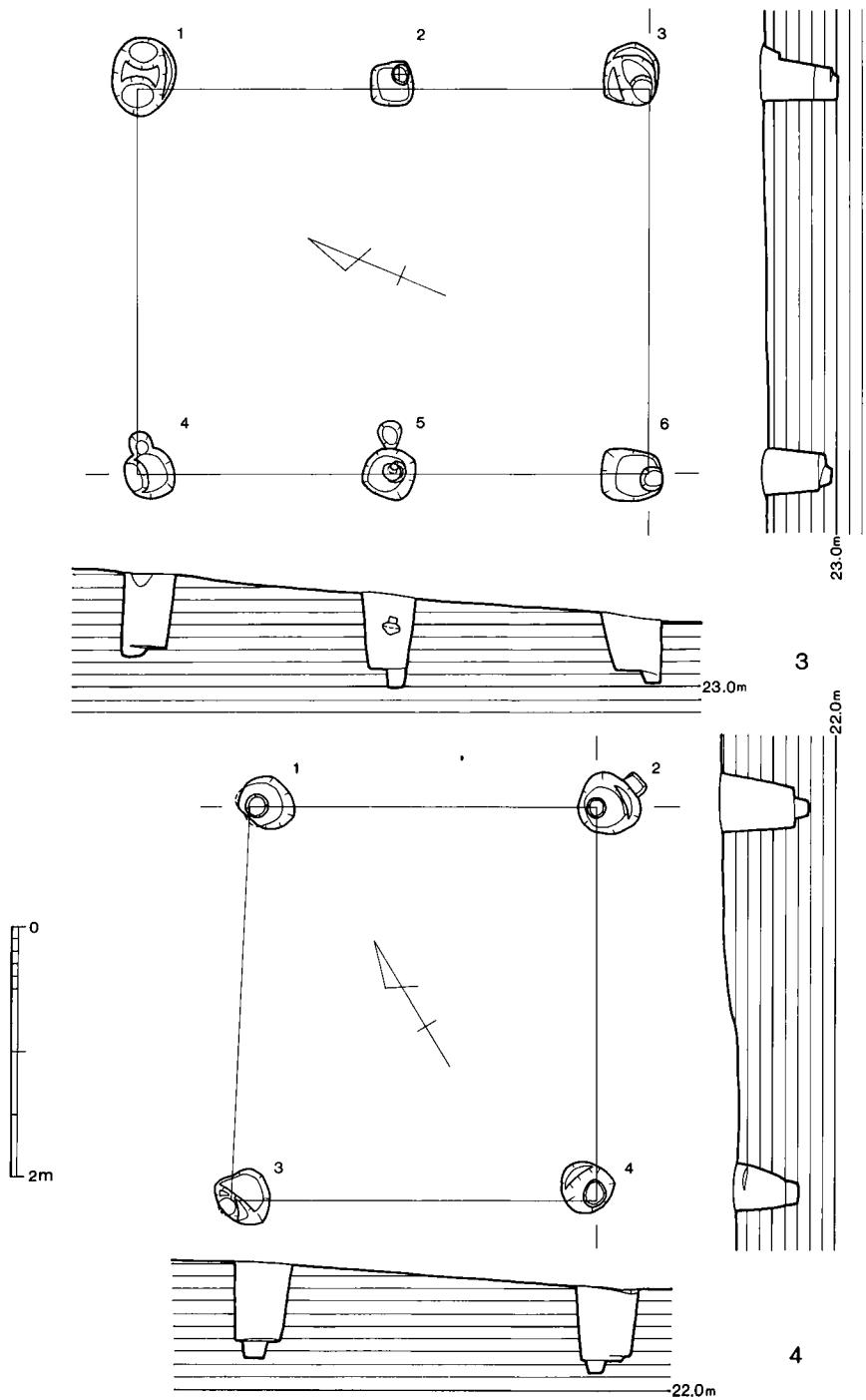
6号掘立柱建物 (図版21-1、第38図)

5号掘立柱建物の南側から検出した1間×1間の建物である。4号掘立柱建物の正方形に近いプランではなく、長方形のプランに柱を配置している。梁行間P₁～P₃・P₂～P₄が2.42m、桁行間P₁～P₂・P₃～P₄が3.16mを測る。桁行方向はN16.5°Wを示す。P₁の掘方は二段掘込である。出土遺物はない。

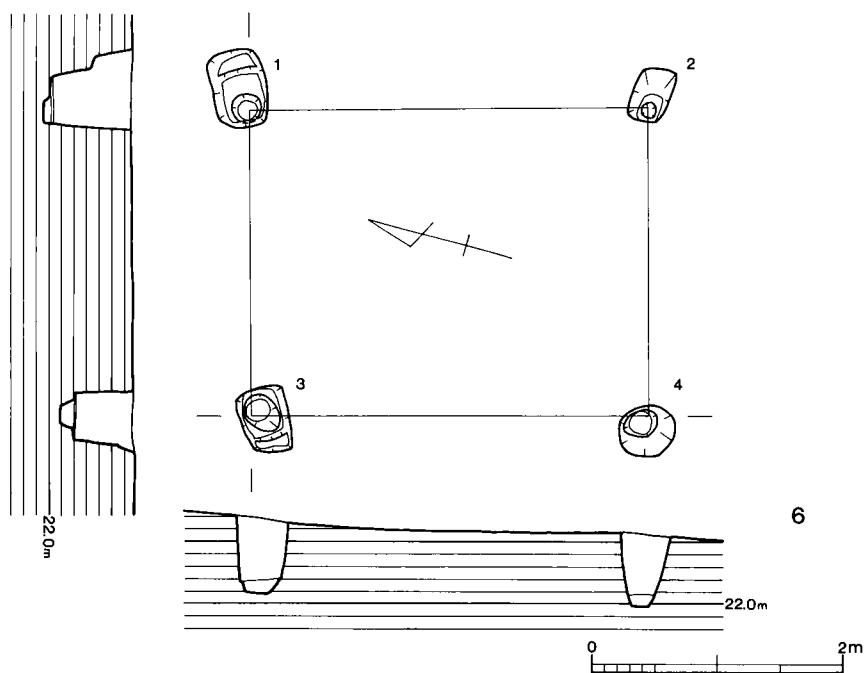
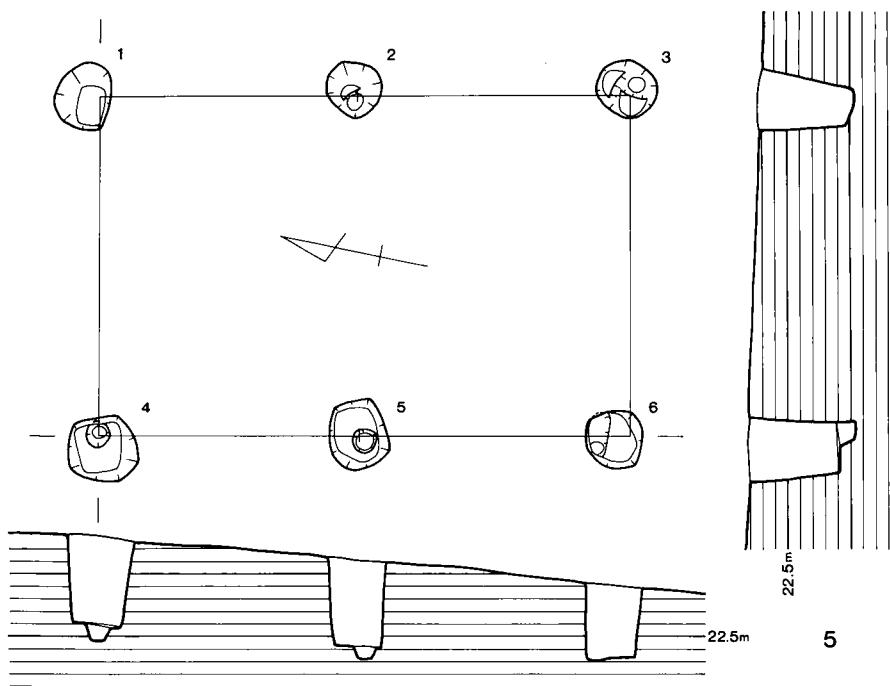
7号掘立柱建物 (図版21-2、第39図)

調査区中央部北側から検出した2間×2間の建物である。梁行間P₁～P₆3.31m、P₃～P₈3.32m、桁行間P₁～P₃3.84m、P₆～P₈4.07mを測る。桁行方向はN61°Eを示す。柱穴掘方は小さく浅めである。他の建物とは構造を異にする。出土遺物はない。

III 遺構と遺物

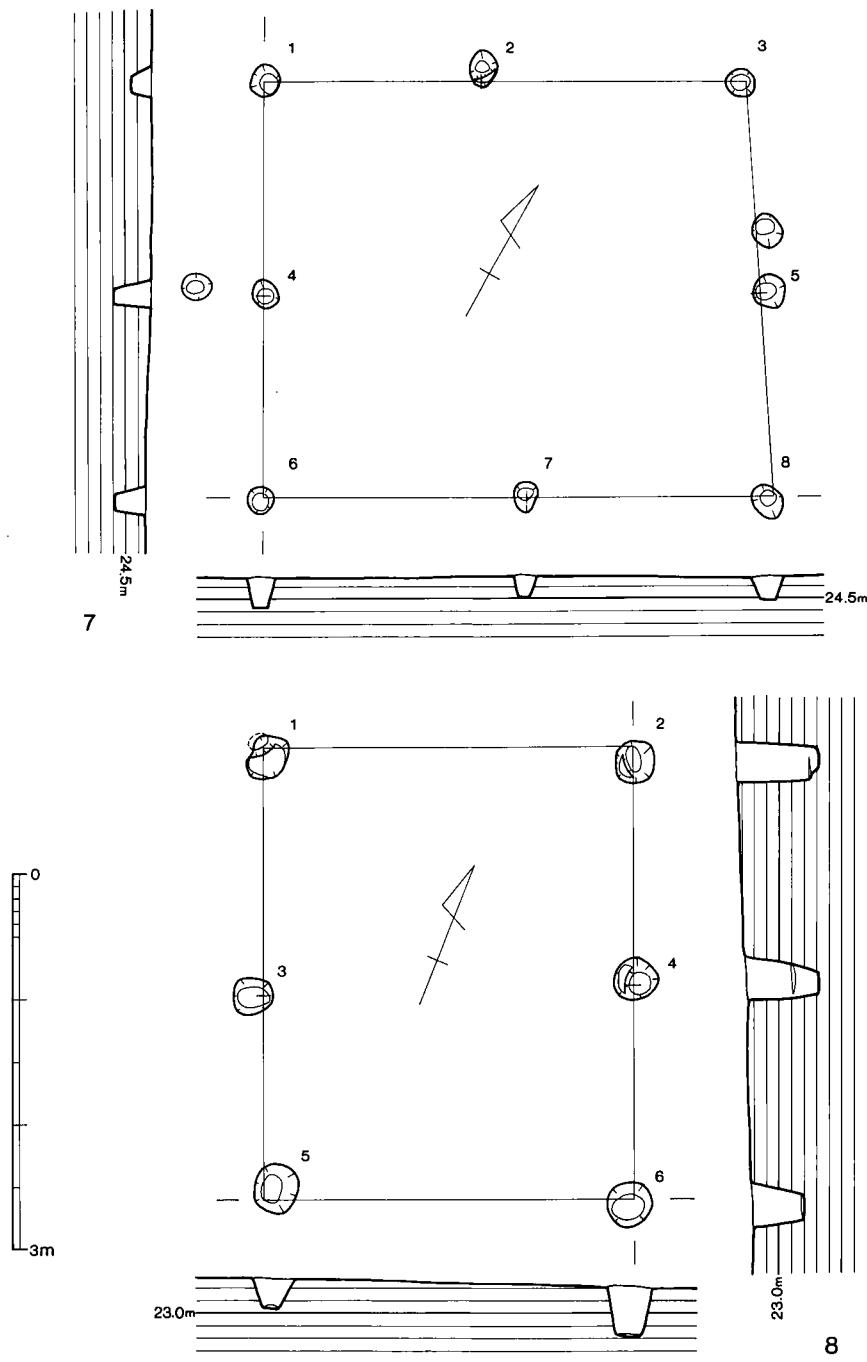


第37図 3・4号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）



第38図 5・6号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）

III 遺構と遺物



第39図 7・8号掘立柱建物実測図（縮尺1/60）

表1 掘立柱建物計測表

(単位cm)

1号掘立柱建物											
P	深行間	P	桁行柱間	桁行間	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径	
1 4	251	1 2	150		1	45	52×50	4	36	53×51	
2 5	251	2 3	152	302	2	51	56×58	5	59	51×55	
3 6	251	4 5	150		3	67	46×54	6	57	45×45	
		5 6	152	302							
2号掘立柱建物											
1 4	225	1 2	209		1	78	50×45	4	61	47×45	
2 5	225	2 3	227	436	2	81	51×55	5	77	72×91	
3 6	225	4 5	209		3	50	42×43	6	68	58×64	
		5 6	227	436							
3号掘立柱建物											
1 4	307	1 2	208		1	69	63×52	4	65	40×40	
2 5	320	2 3	200	408	2	67	34×36	5	76	42×41	
3 6	307	4 5	208		3	61	49×43	6	57	49×42	
		5 6	200	408							
4号掘立柱建物											
1 2	276	1 3	—	315	1	78	44×42	3	65	47×44	
3 4	292	3 4	—	315	2	69	50×50	4	51	41×42	
5号掘立柱建物											
1 4	269	1 2	205		1	76	44×53	4	84	57×50	
2 5	270	2 3	223	428	2	78	44×45	5	80	47×57	
3 6	290	4 5	212		3	56	49×47	6	63	45×46	
		5 6	186	398							
6号掘立柱建物											
1 3	242	1 2	—	316	1	70	48×63	3	62	40×55	
2 4	242	3 4	—	316	2	59	31×45	4	57	45×40	
8号掘立柱建物											
1 2	297	1 3	202		1	71	32×35	4	60	41×33	
3 4	290	3 5	163	365	2	67	31×37	5	26	35×40	
5 6	290	2 4	188		3	46	32×30	6	41	40×40	
		4 6	171	359							
7号掘立柱建物											
P	梁行柱間	梁行間	P	桁行柱間	桁行間	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
1 4	171		1 2	173		1	16	23×25	5	38	25×26
4 6	160	331	2 3	211	384	2	29	23×30	6	24	22×22
2 7	341		4 5	394		3	34	23×32	7	47	18×23
3 5	170		6 7	209		4	30	21×33	8	19	24×26
5 8	162	332	7 8	198	407						

III 遺構と遺物

8号掘立柱建物（第39図）

4号掘立柱建物の西側8mから検出した1間×2間の長方形プランをもつ建物である。P₃の位置がずれ、P₁—P₃の間隔が広い。桁行方向はN21.5°Wを示す。

出土遺物はない。

3. 壁 穴

1号竪穴（図版22-1、第40図）

1号掘立柱建物の北西側から検出した竪穴で、平面形態は、2.75m×2.40mの楕円形プランを呈する。上端から65cm下に段を有す。底面は、2.55m×2.05mの楕円形である。深さは中央で1.3mを測る。

出土遺物は、弥生式土器、高杯・甕口縁・底部等がある。

土 器（第46図1～4）

1はいわゆる「鋤先」口縁を有す杯部の破片で、復原口径27.1cmを測る。器壁にわずかにハケ目を残す。口縁部は内外面ヨコナデ調整。2は逆「L」字状の口縁をもつ甕で、口縁部はヨコナデ、器壁内外面はハケ目調整。復原口径28.3cmを測る。3・4は底部のみの資料。3は底径8.2cm、黒褐色を呈し、焼成は良。4は、復原底径7.6cm、器壁内外面ハケ目調整。残存する底部外面にもハケ目が認められる。暗褐色を呈し、焼成は良好。

2号竪穴（図版22-2、第40図）

調整区南東部から検出した。上面のプランは1.85m×1.70mの楕円形を呈する。北から東にかけての内壁は胴張りである。底面は径1.80mほどの円形である。深さ1.25mを測る。

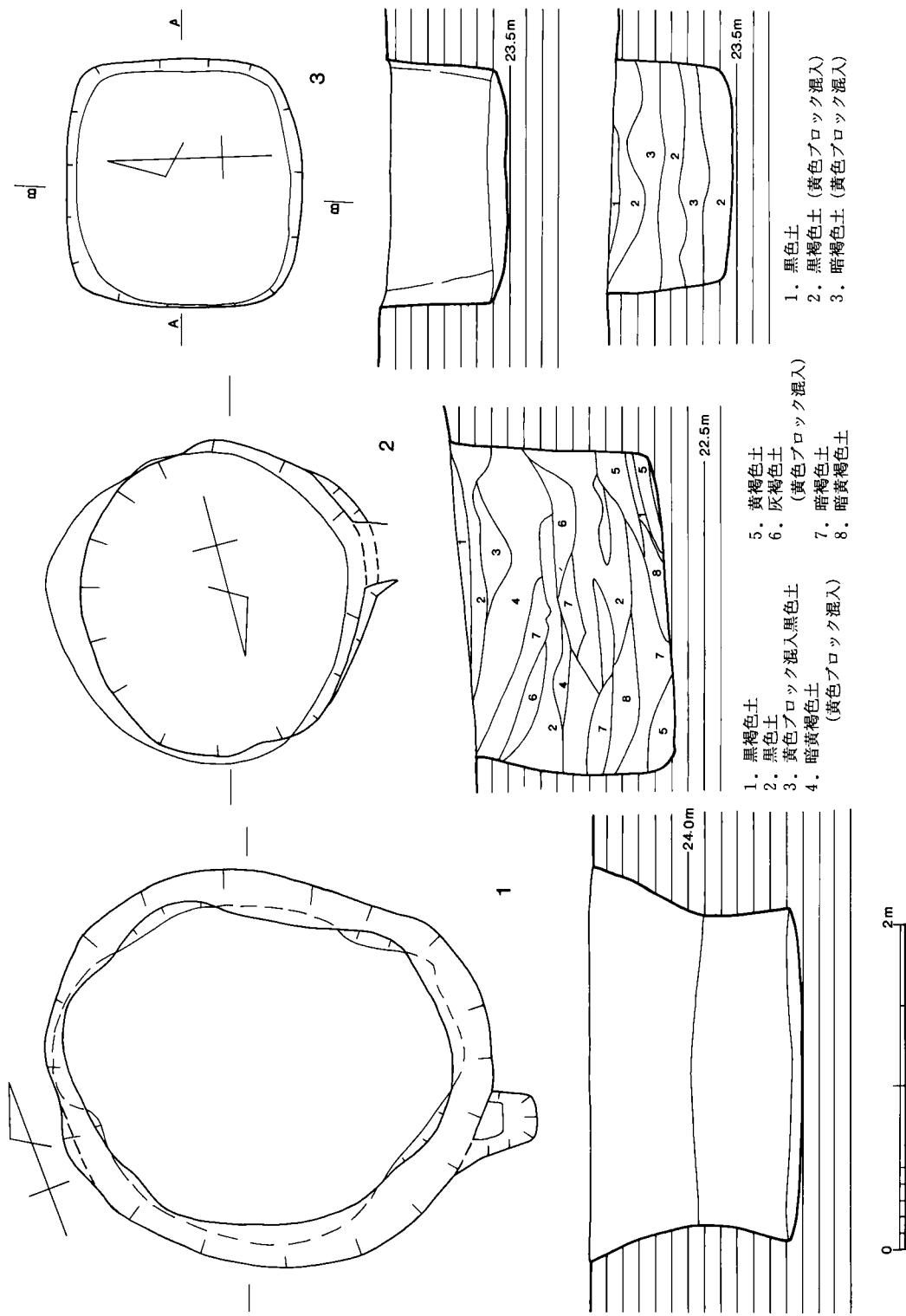
出土遺物は弥生式土器の小破片があるが、図示できるのは甕の底部だけである。

土 器（第46図-5）

底部片で、底径9.45cmを測る。内面はナデ調整、外面はハケ目、底部はナデ調整。胎土には砂粒を多く含む。茶褐色を呈し、焼成は良好。

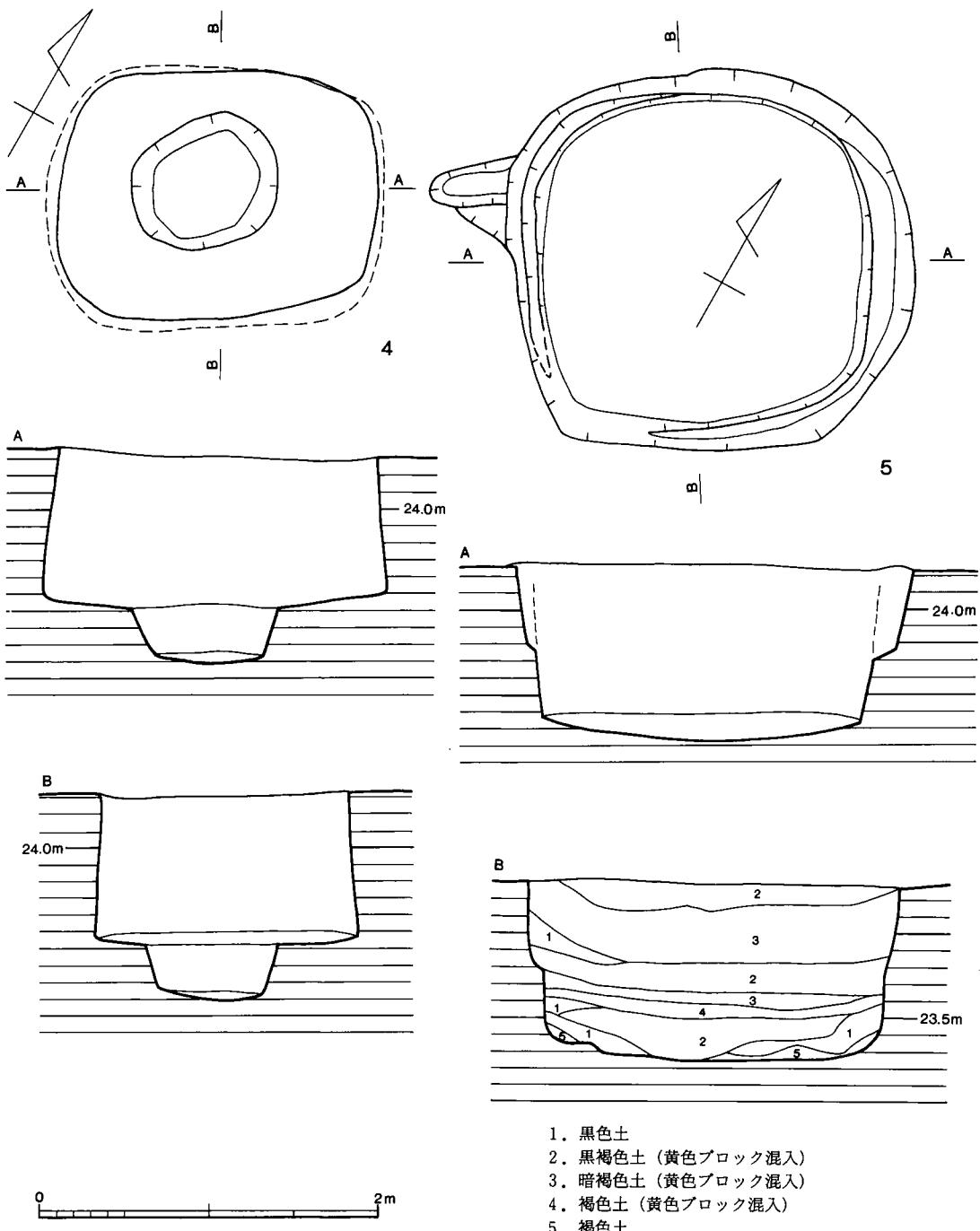
3号竪穴（図版23-1、第40図）

調査区南側の中央部から検出した。1・2号竪穴の中間の位置にある。2号住居跡とは約15m、1号掘立柱建物とは約11m離れた位置にある。一辺約1.4mの方形のプランを呈する。内壁はほぼ垂直である。深さ75cmを測る。出土遺物はない。



第40図 1・2・3号竪穴実測図 (縮尺1/40)

III 遺構と遺物



第41図 4・5号竪穴実測図 (縮尺1/40)

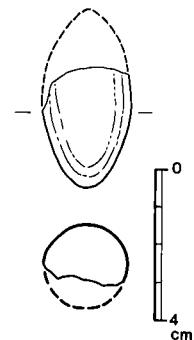
4号竪穴（図版23-2、第41図）

調査区南西側端から検出した、底面隅丸長方形の竪穴である。壁は斜めに掘り込まれる。底面の規模は2.0m×1.55mで、深さ90cm。底面中央に径85cm、深さ33cmのピットが設けられる。

出土遺物は、弥生式土器、甕の口縁片・底部片・器台片等がある。

土 器（第46図6～8）

6は逆「L」字状の甕口縁部片。端部は丸く仕上げられる。復原口径26.5cm。ヨコナデ調整される。淡黄褐色を呈し、焼成は良。7は、底部片で復原底径8.4cm。器壁は磨滅のため調整不明。8は器台でいわゆる手捏ねで器肉が厚い。復原底径11.0cmを測る。内面一部削りが残る。



第42図 5号竪穴出土
投弾実測図（縮尺1/2）

5号竪穴（巻頭図版5-2、図版24、第41図）

調査区西側端から検出した竪穴で、6号住居跡の南側約3mの位置にある。底面は一辺約1.8mの隅丸方形を呈する。内壁はほぼ垂直に掘り込まれるが上端から約50cmの位置でフラットな面をもつ。底面は中央がやや窪む。深さは1.05mを測る。遺物は、土器の小破片と投弾が出土している。

投 弾（第42図）

約1/2を欠損する。復原すると長さ4.8cm程になる。径2.2cm、灰褐色を呈し、生焼けである。胎土には若干砂粒を含む。

6号竪穴（第43図）

調査区中央の谷頭部から検出した竪穴である。上面2.4m×1.9mの楕円形を呈し、壁の中央で段をなし、1.8m×1.05mの長方形の底面へとつづく。深さは中央で1.35mを測る。

出土遺物は、弥生式土器の甕口縁部片と底部片が出土した。

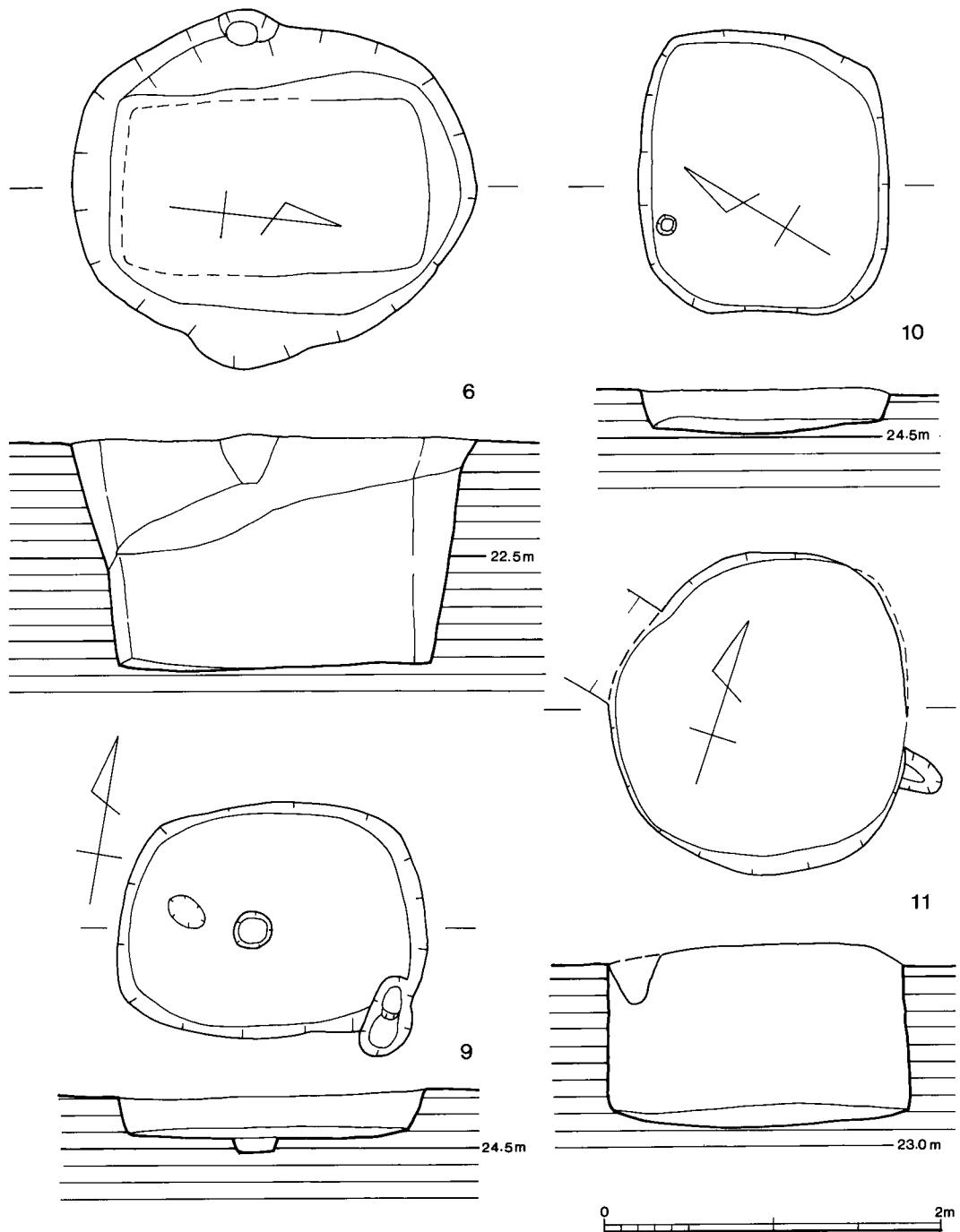
土 器（第46図9・10）

9は複合口縁の甕形土器の口頸部片である。袋状気味に内傾する口縁で、端部は平坦に仕上げる。頸部内面はヨコ方向のハケ目、外面はタテ方向のハケ目調整。復原口径26.5cmを測る。10は底部で、底径8.0cm、底部内外面ナデ調整。器壁外面はハケ目調整される。

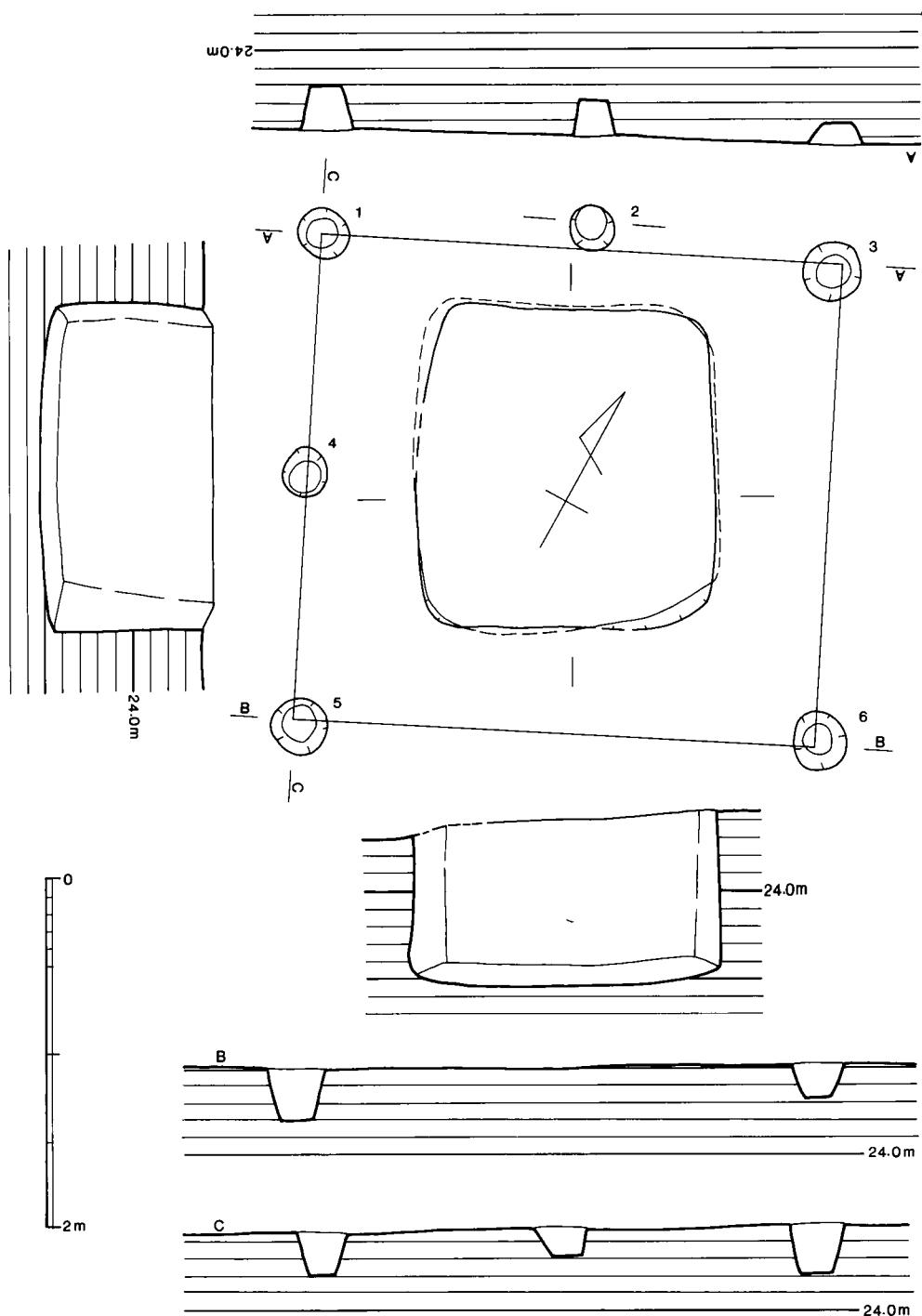
7号竪穴（図版25、第44図）

調査区南西端で検出した竪穴で、2号掘立柱建物の西側4mの位置にある。底面は、1.85m×1.68mの隅丸長方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。深さ95cmを測る。竪穴の周囲には、ほぼ方形に配置された柱穴が認められる。遺跡で検出した掘立柱建物の掘方とは大き

III 遺構と遺物

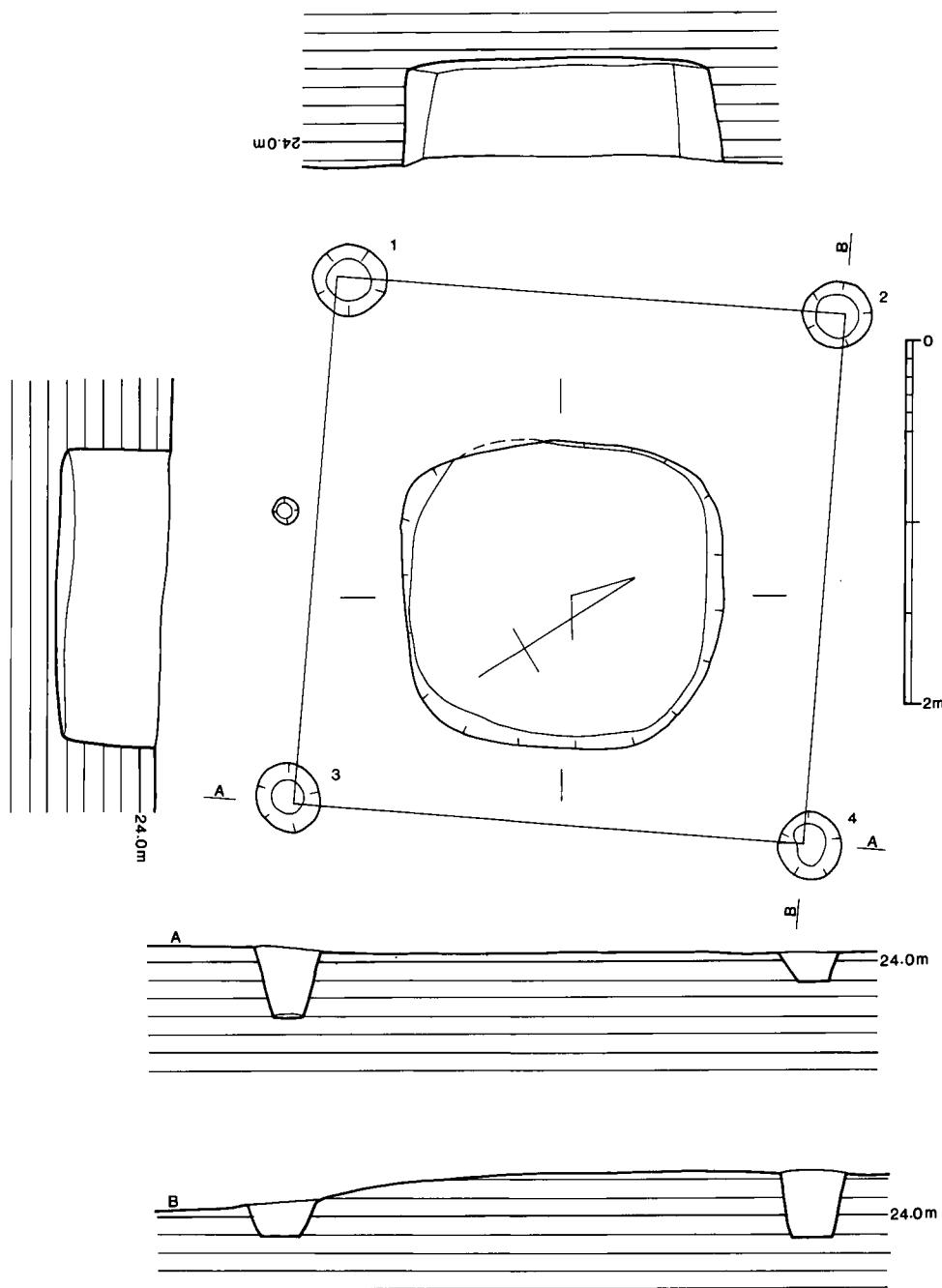


第43図 6・9・10・11号竪穴実測図 (縮尺1/40)



第44図 7号竖穴実測図 (縮尺1/40)

III 遺構と遺物

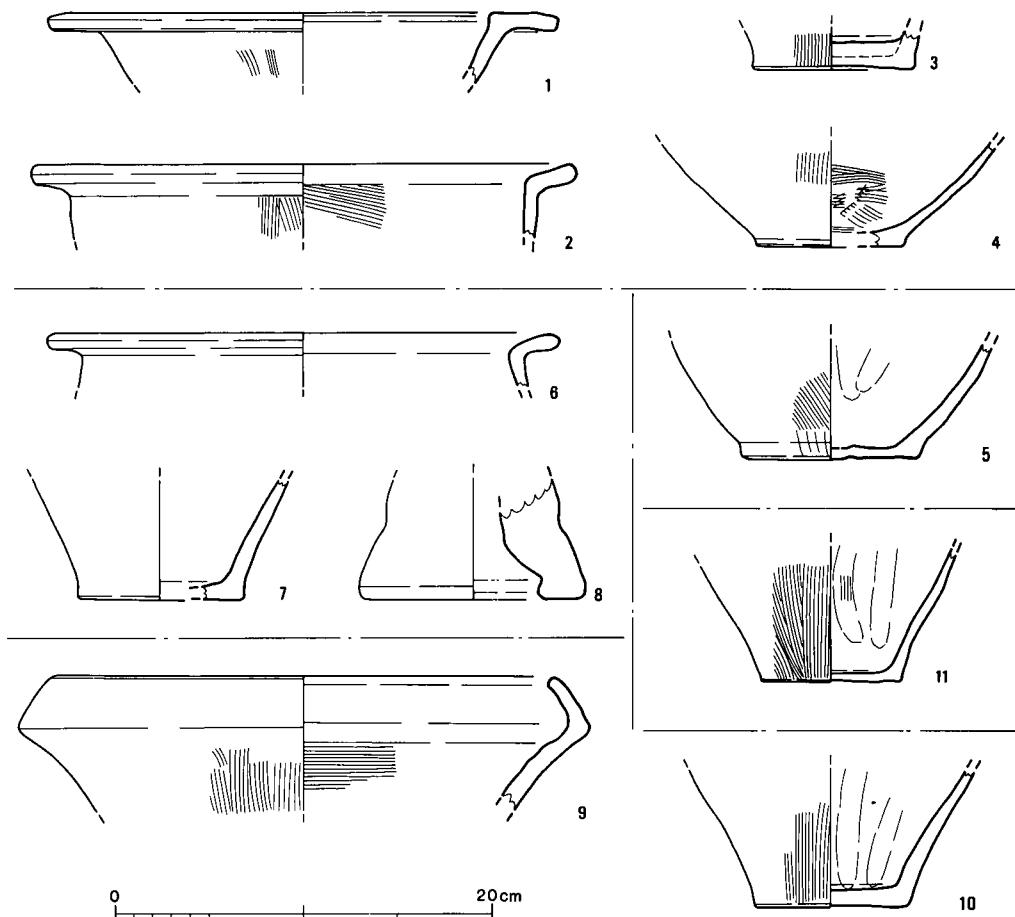


第45図 8号竪穴実測図 (縮尺1/40)

さも深さも異にし、小さく浅めで、柱間も狭く当竪穴と関連する遺構と考える。 P_5-P_6 と P_3-P_6 では柱穴は確認できなかったが竪穴の周囲は擾乱が著しく破壊された可能性もある。 P_1-P_3 ・ P_5-P_6 2.98m、 P_1-P_5 ・ P_3-P_6 2.78mを測る。柱穴の大きさは径30cm前後、深さ10cm～30cmである。 P_1-P_5 の方向はN25°Wを示す。出土遺物で図示できるものはない。

8号竪穴（第45図）

調査区中央西側から検出した竪穴で、7号竪穴と類似する。竪穴は、床面が1.6mの方形を呈し、壁は垂直に掘り込まれ、深さは60cmを測る。柱穴の配置は、1間×1間でほぼ正方形である。 P_1-P_2 ・ P_3-P_4 は2.80m、 P_1-P_3 ・ P_2-P_4 は2.90mである。掘方の径は30cm～40cm、深さは、 P_4 は削平されて浅いが、他に35cm～40cmを測る。 P_1-P_3 の方向はN53°Wを示す。遺物は出土していない。



第46図 竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）

III 遺構と遺物

9号竪穴（図版26-1、第43図）

調査区北西部端から検出した竪穴で、底面1.65m×1.37mの隅丸長方形プランを呈する。深さは約25cmで、底面に径20cmのピットがある。出土遺物はない。

10号竪穴（図版26-2、第43図）

調査区北側中央部で検出した竪穴である。底面、1.55m×1.45mの隅丸長方形を呈する。壁は斜めに掘り込まれる。深さは中央で25cmを測る。図示できる資料は出土していない。

11号竪穴（第43図）

調査中央の建物の西側から検出した竪穴である。上部は造成のため削平され、配管等の溝で攪乱を受けている。底面は径1.7mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。深さは中央で1.1mを測る。埋土中が甕底部が出土した。

土器（第46図11）

底部片で、底径7.3cmを測る。器壁は薄く仕上られる。外面はハケ目、内面はナデ調整。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

4. 土 壤

1号土壙（図版27-1、第47図）

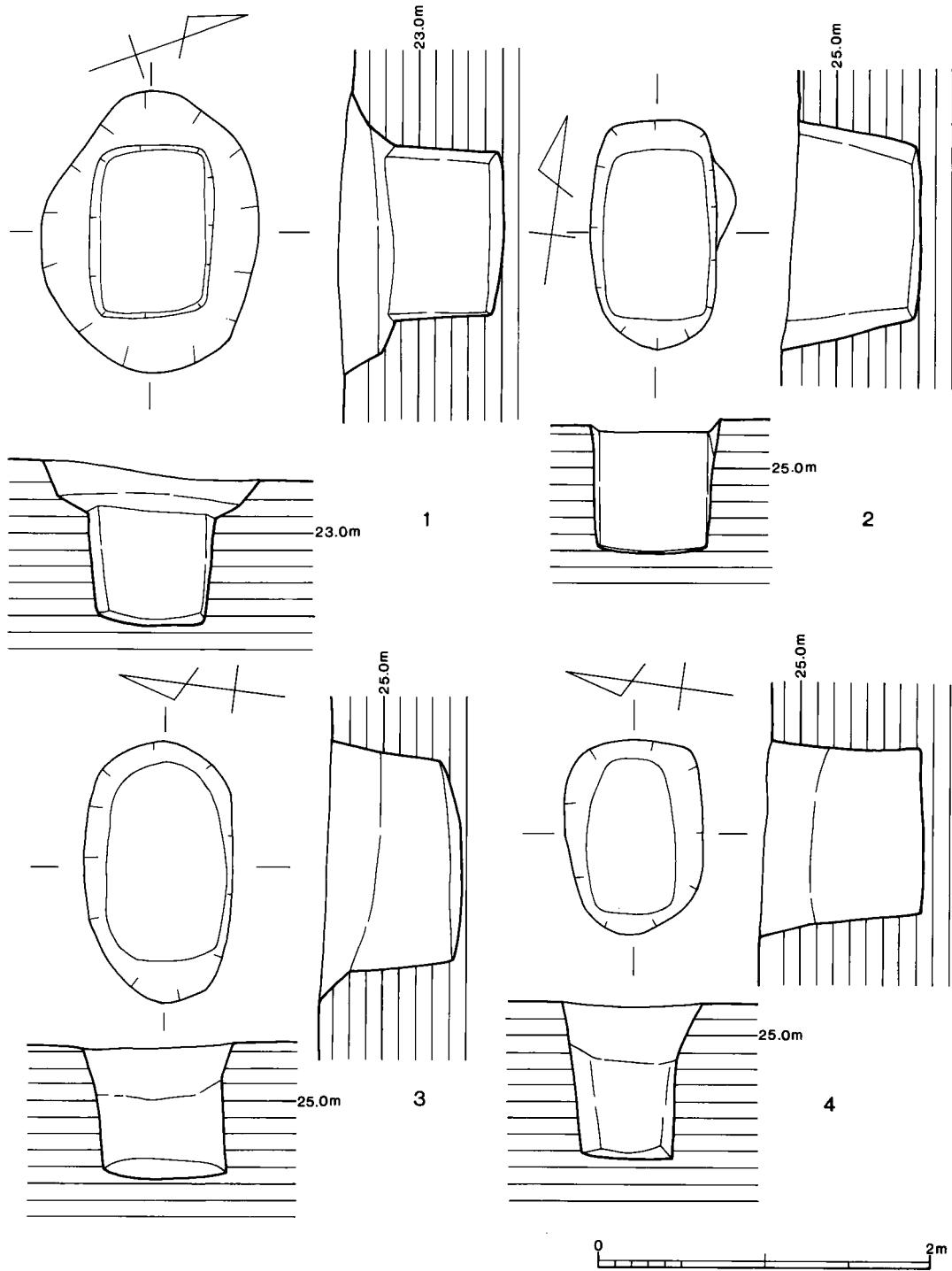
2号竪穴の北側約8mから2号土壙と並んで検出した。楕円形の土廣に長方形の二段目を掘り込む。両壁は垂直に近い。一段目は1.7m×1.3m、二段目は長さ1.02m、幅75cm、深さ70cmを測る。主軸方位はN71°Wである。

2号土壙（図版27-2、第47図）

1号土壙の東側に1m離れて検出した。隅丸長方形のプランの土壙で、長さ1.2m、幅75cm、深さ75cm、を測る。木口側はやや斜めに、両側はほぼ垂直に掘り込まれる。主軸方位はN7.5°Wである。

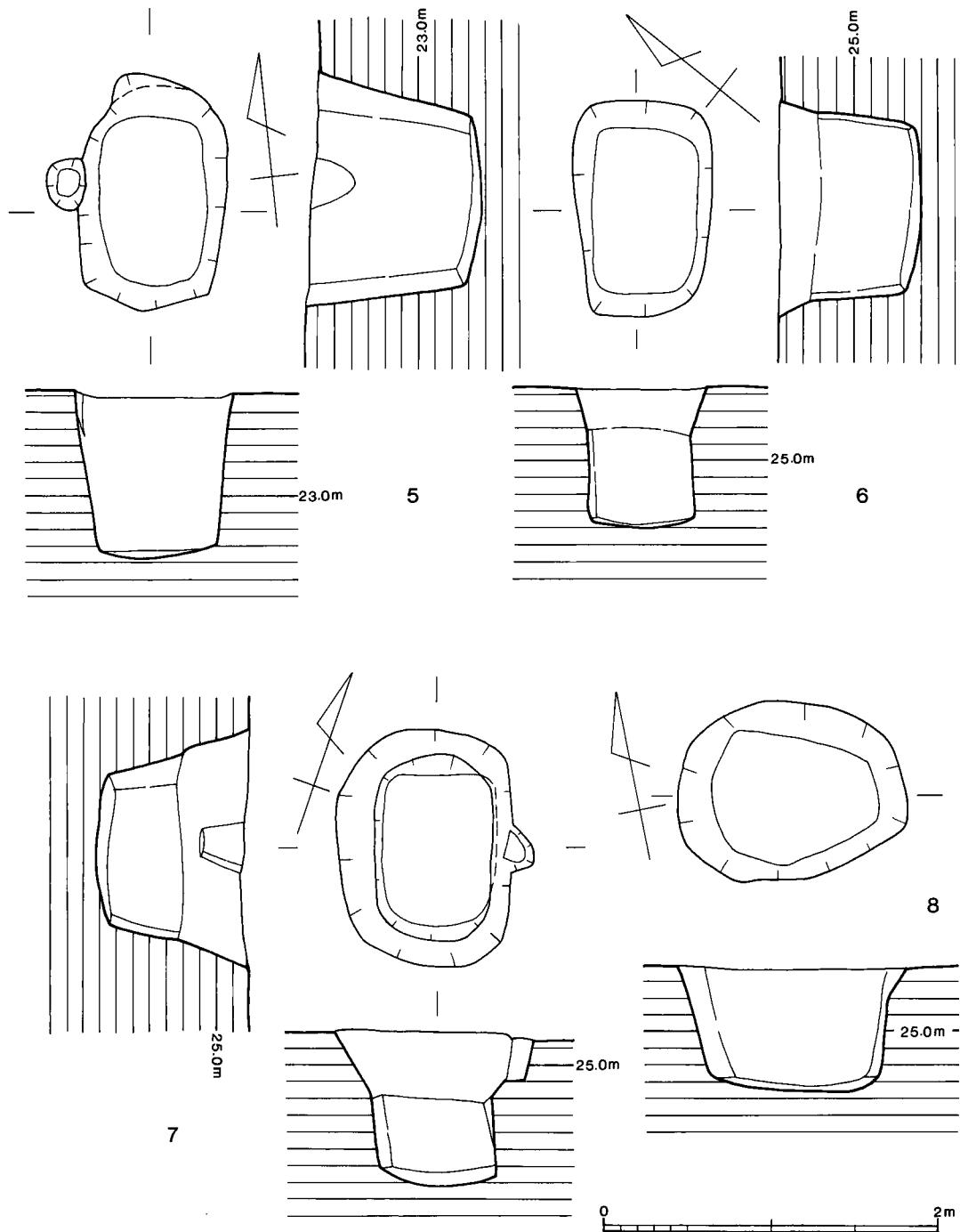
3号土壙（第47図）

調査区の中央、谷頭に位置する。隅丸長方形のプランの土壙である。掘方の規模は、長さ1.55m、幅90cm、深さ80cmを測る。底面はやや舟底状を呈する。主軸方位はN83°Eである。



第 47 図 1 ~ 4 号土壤実測図 (縮尺1/40)

III 遺構と遺物



第48図 5～8号土壤実測図（縮尺1/40）

4号土壌 (第47図)

3号土壌の西側3mから検出した。隅丸長方形のプランの土壌である。長さ1.15m、幅82cm、深さ92cmを測る。壁面は垂直に近く、底面は平坦である。主軸方位はN82°Eである。

5号土壌 (図版28-1、第48図)

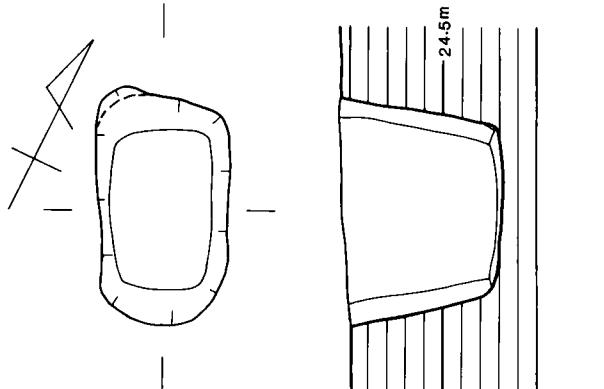
調査区中央西側から検出した。隅丸長方形プランの土壌で、主軸方位はN5.5°Eである。壁は斜めに掘り込まれる。底面は舟底状を呈する。規模は、長さ1.4m、幅88cm、深さは中央で1mを測る。

6号土壌 (図版28-2、第48図)

6号豊穴の西側約5mに位置する。隅丸長方形のプランの土壌である。主軸方位はN52°Eを示す。規模は長さ1.3m、幅80cm、深さ83cmを測る。両壁は上端から、25cmまではやや斜めに、以下はほぼ垂直に掘り込まれる。

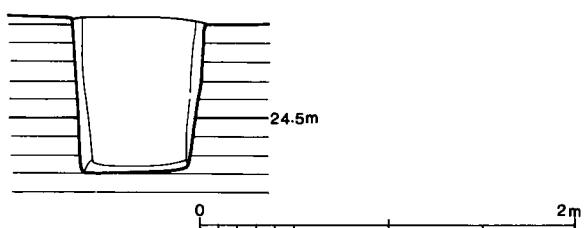
7号土壌 (第48図)

8号掘立柱建物の南側で検出した土壌である。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN20°Wである。掘方の上端から深さ40cm程度を段を有する。以下はやや斜めに掘り込まれる。長さ1.4m、幅1m、深さ90cmを測る。



8号土壌 (図版29-1、第48図)

調査区の中央部、8号掘立柱建物西側から検出した。不整楕円形を呈し、主軸方位はN79°Wである。壁は斜めに掘り込まれる。長さ1.35m、幅1.05m、深さ73cmを測る。



第49図 9号土壌実測図 (縮尺1/40)

III 遺構と遺物

9号土壙（図版29-2、第49図）

調査区の中央部、4号掘立柱建物の南西側約4mから検出した。隅丸長方形を呈し、主軸方位はN27°Wを示す。規模は、長さ1.2m、幅70cm、深さ85cmを測る。壁は斜めに掘り込まれる。

5. その他の遺構と遺物

ピット群（付図1）

ピットは数多く検出したが、掘立柱建物のようにまとまりあるピットは少ない。掘方の径が小さく、浅いものがほとんどで、出土遺物もほとんどない。掘方が40cm～50cm前後、深さ50cm前後のしっかりしたピット群は、1号住居跡、2号住居跡、4号住居跡、1号掘立柱建物、2号掘立柱建物の周辺と、調査区の南側の、3号～6号掘立柱建物、7号住居跡の周辺で、調査区中央部東側に集中する。この2地域は、施設の基礎や、配管のための溝等のため攪乱が著しく、前述の掘立柱建物を検出するに留まった。

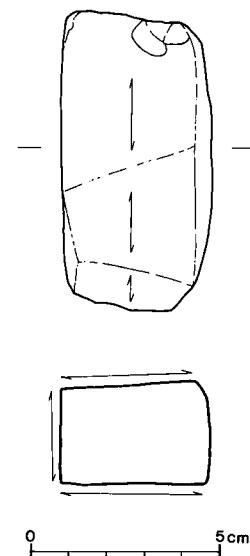
ピットの数では、12号住居跡の西側、6号住居跡の南東側で多く検出したが、上部を削平のためか径が小さく、浅いものが大半である。

ピット群出土遺物

土器（第51図1～14） 1、2は複合口縁の壺形土器の口縁部片で、1は口縁下外面にハケ目の後指頭痕が残る。2はヨコナデ調整。3～6は甕で、3・5・6は逆「L」字状、4は「く」字状をなす口縁部をもつ。1は口縁部ヨコナデ、他内外面ハケ目。2は口縁部をわずかに外反させ端部は平坦である。口縁部か胴部の内外面ともにハケ目調整。5は短く直線的に外反させ、端は丸い。6は、口縁端部は上方にわずかにつまみ出す。7～10・12・14は壺・甕の底部片である。8の底部内面は指頭痕が残る。11は高杯形土器の口縁部片で杯底部の屈折が明瞭で杯部が大きく外反する。杯部外面には暗文風のヘラ磨きで仕上げる。13は、鉢形土器で口径と胴部径の差が小さい深目のものである。復原口径12.9cm。

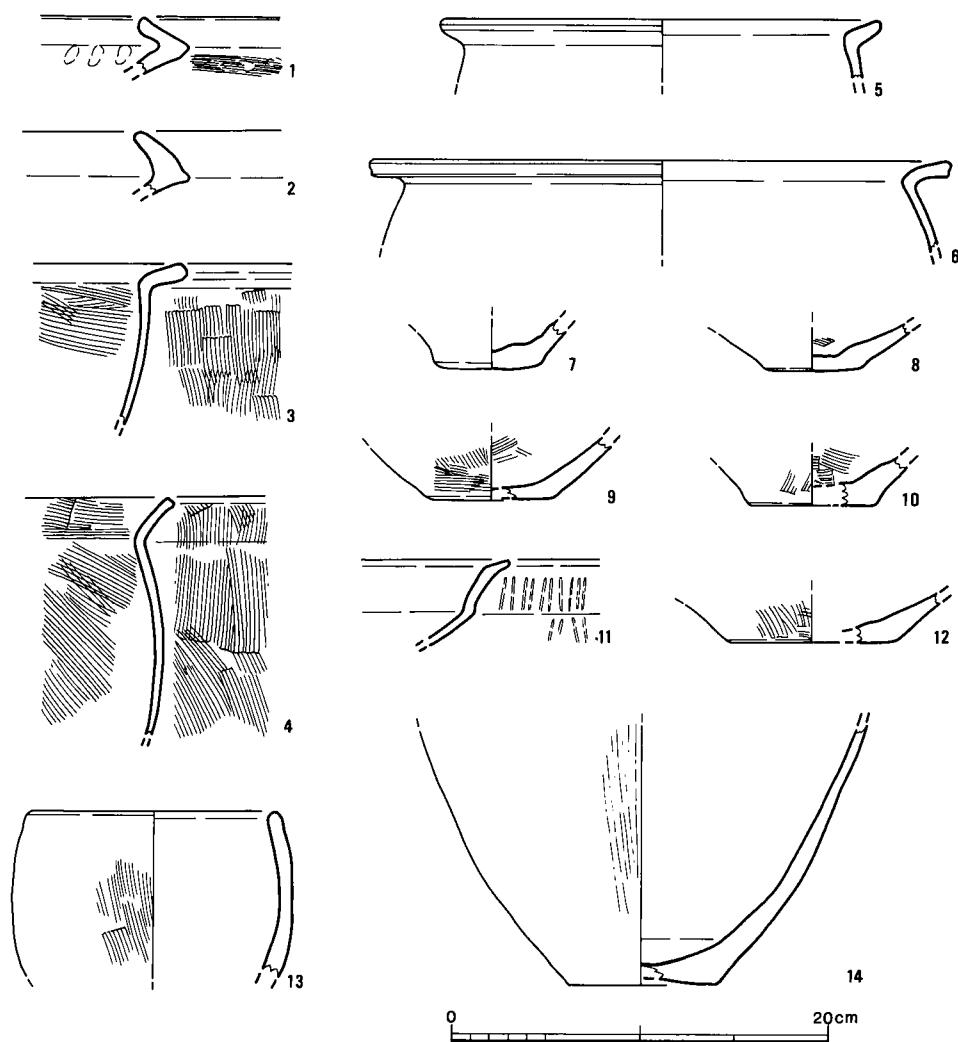
砥石（図版35、第50図）

砂岩製で、1面に自然面を残した未使用面があるが他の5面は砥面として用いられ、現存長7.7cm、最大幅4.0cm、厚さ2.7cm、重さ65gである。



第50図 ピット出土
石器実測図（縮尺1/2）

第50図 ピット出土
石器実測図（縮尺1/2）

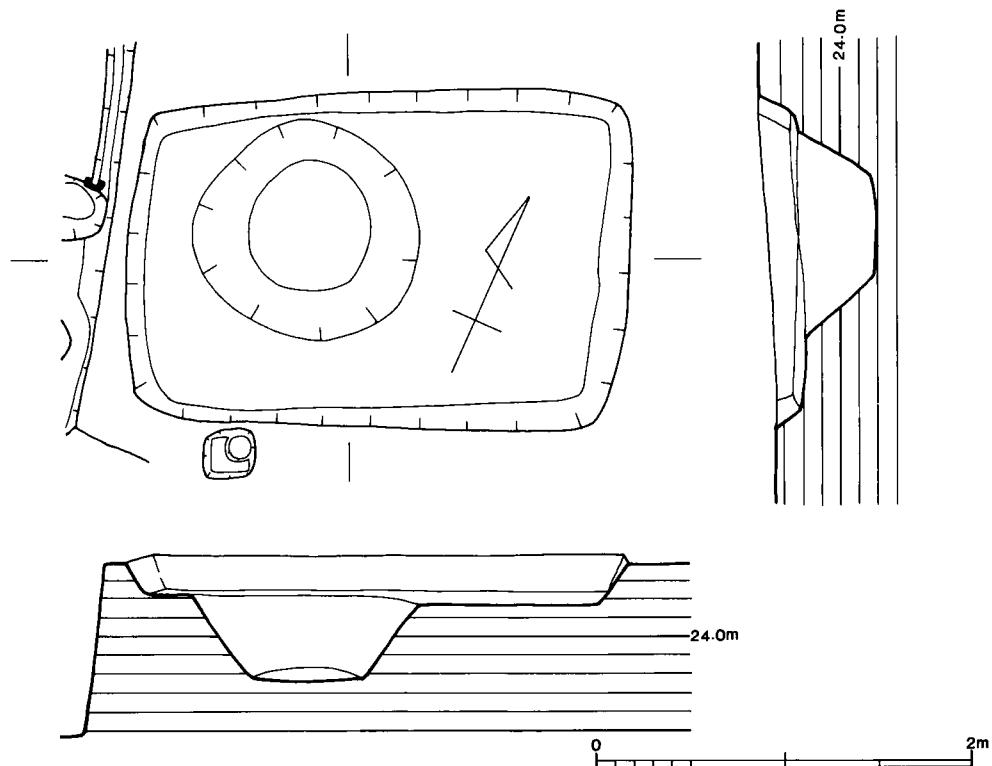


第 51 図 ピット出土土器実測図 (縮尺1/4)

10号住居跡東側土壙 (図版16-1、第52図)

10号住居跡東側長壁に接する位置で検出した土壙で両遺構の間はわずか10cmである。土壙は長方形プランを呈し、長さ2.65m、幅1.8m、深さ15cm～20cmを測る。底面の西側の床面には上面径1.2m、底径65cm、深さ45cmの穴が掘り込まれている。遺構の性格等は不明である。主軸方位はN65°Eである。埋土中から須恵器甕の破片と鉄鎌が出土した。

III 遺構と遺物



第52図 10号住居跡東側長方形土壙実測図（縮尺1/40）

出土遺物

須恵器（図版33、第53図）

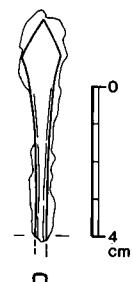
須恵器甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口頸部の高さ4.5cmを測り、口縁部は外反する。口唇部の外側に粘土を貼付し、一条の三角突帯を配している。口縁端部上面は平坦面をなしている。胴部外面は格子目のタタキ痕、内面は同心円文が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整される。口径20.9cmを測る。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

鉄器（第54図）

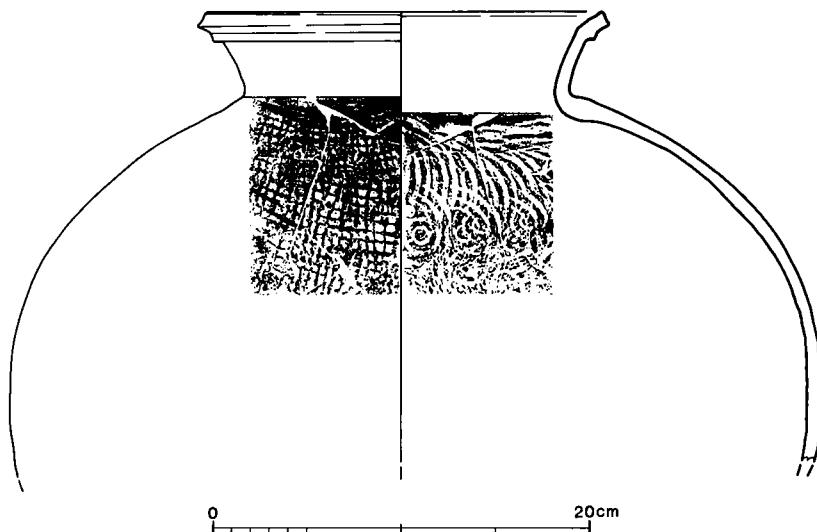
圭頭式の鉄鎌で茎部の一部を欠く。残存長5.9cm、茎部は断面方形を呈する。鎌身部幅1.05cmを測る。

11号住居跡南側土壙（図版18-1、第29図）

11号住居跡の南側から検出した、不整土壙である。発掘当初は、住居跡の



第53図
10号住居跡東側土壙出土
鉄器実測図（縮尺1/2）



第 54 図 10号住居跡東側長方形土壙出土土器実測図（縮尺1/4）

張出し部に付設する落込みと考えたが、東側からも長方形を呈する土壙を検出し、両方の埋土中から須恵器杯の破片が出土し、住居跡とは関連しないことがわかったが、遺構の性格は不明。土壙の深さは10cm～15cmを測る。

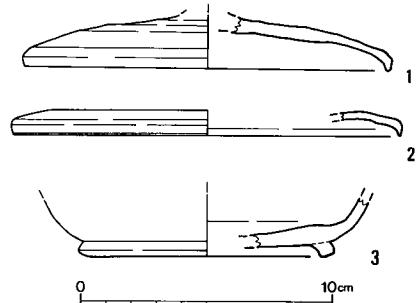
出土遺物

須恵器（第55図 1～3）

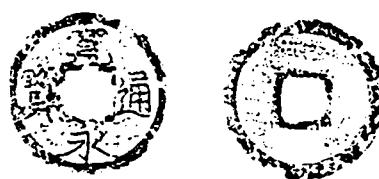
1・2は杯蓋の破片である。天井頂部を欠損。口縁部はやや内傾させ端部は丸くつくられる。復原口径14.45cm。灰色を呈し、焼成は良好。2は口縁部片で、復原口径15.35cmを測る。口縁部は内傾させ、端部は鋭い。1・2ともに外天井部は回転ヘラ削り、口縁部はヨコナデ、内天井部はナデ調整される。3は杯底部片で、短い高台がつく。

銅 錢（第56図）

2号住居跡北側の表採である。寛永通寶で直径22.52mm、内径18.06mm、内面窓径タテ6.08mm、ヨコ5.84mm、厚さ1.43mm、重さ2.3gを測る。



第 55 図 11号住居跡南側土壙出土土器実測図（縮尺1/3）



第 56 図 古銭拓影（実物大）

III 遺構と遺物

旧石器時代の遺物

1～3・6・7は、5号住居跡の埋土中から出土。4・8は2号掘立柱建物周辺の表土直下出土。5は4号土壙の埋土中出土。

ナイフ形石器（第57図1～3）

1は黒曜石の横剥ぎの剝片を素材とする。a面は右斜上位からの剝離が1回行われた以外は自然面を残している。右側辺中央部には打面が残っている。刃潰し加工はb面から行われている。基部は欠損している。2は黒曜石の縦長剝片を素材とする。c面の刃潰し加工は、先端部付近はa面からの加撃で行われ、基部付近はb面から行われている。a面右側辺の刃潰し加工はb面から行われている。c面の刃潰し加工が行われた部分は著しく磨耗している。3は黒曜石の石核から剝離された第1剝片と考えられる縦長剝片を素材とする。a面の右側辺上位は刃部と考えられるが、新しい加撃痕が入っている。刃潰し加工は両側辺ともb面から行われている。

尖頭器（第57図4）

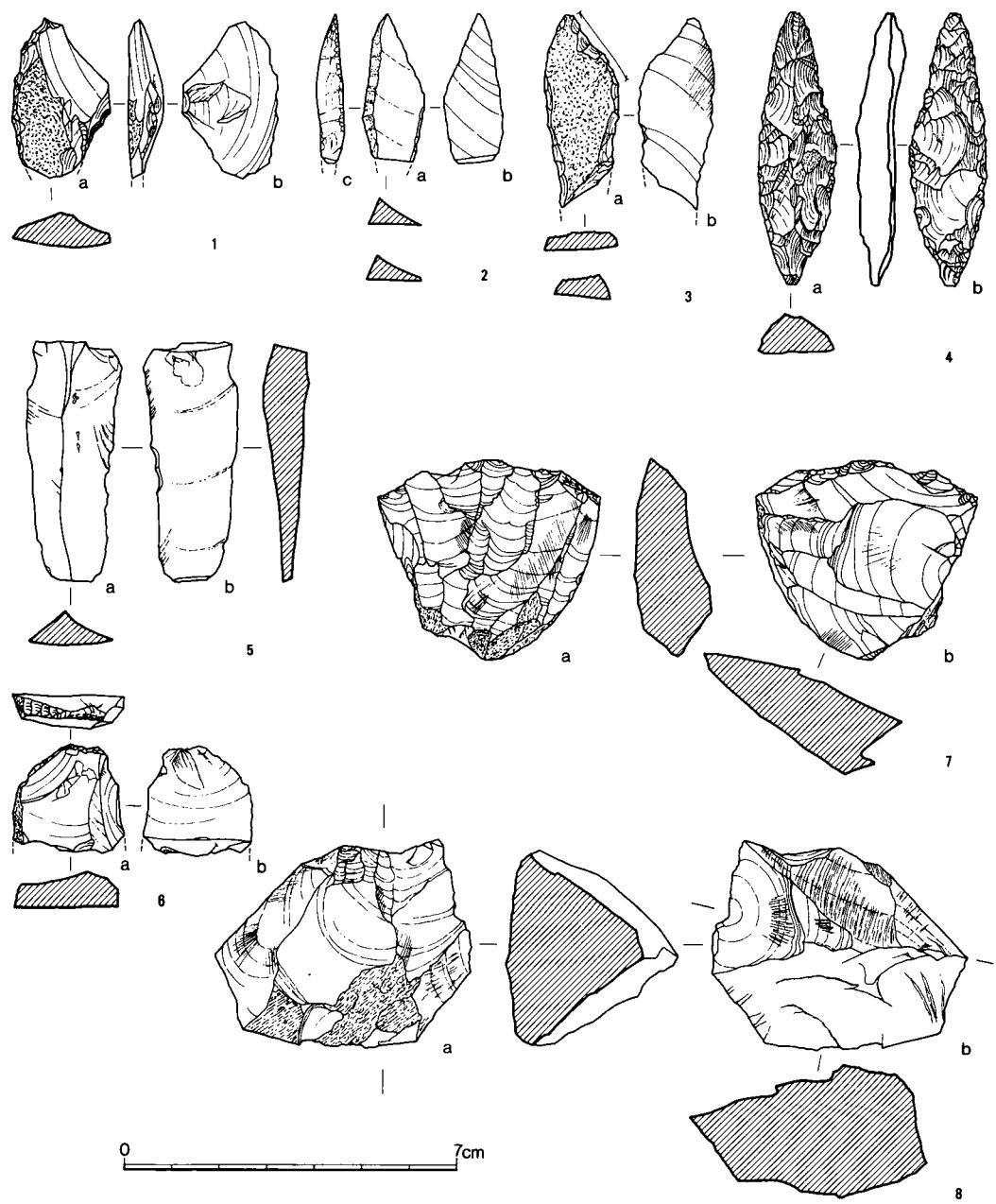
黒曜石の厚手の剝片を素材とする。a面の加工は、両側辺ともb面から急角度の剝離が行われ、中央に稜線が入り、断面形は三角形を呈する。先端部には1条上位からの樋条剝離が入っている。b面は両側辺から平坦剝離が行われている。

縦長剝片（第57図5・6）

5はサヌカイトの縦長剝片である。打面部の状態から、平坦な打面の石核から剝離されたものと推定できる。b面左側辺中央部に2回の加撃痕が残るが、他に加工の痕跡はない。b面上位にはバルブが残っている。6は黒曜石の縦長剝片である。打面部から左側に向って細い調整が正面方向から行われている。中間部からの折断はa面中央付近からの加撃によるものである。a面左側辺に自然面が残っている。

石核（第57図7・8）

7は、黒曜石の石核で、剝離は当初b面から行われた後a面からの剝離が行われる。a面の打面にあたるb面上位には打面調整が行われている。a面は上位からの加撃で6～7条の比較的大きな剝離痕が残る。b面はa面側の上位及び左側辺を打面として5条の剝離痕が残っている。打面部はa面、b面はも銳角である。8は頁岩の不定形な石核である。a面では上位から5条ほどの剝離痕が残っている。b面はa面左側辺を打面として1条の剝離痕が残っている。打面の銳角なことと、b面における剝離の状態から7の石核に類似するものであろうが、定形化した縦長剝片は剥ぎ取られていないようである。



第 57 図 旧石器実測図 (縮尺2/3)

IV おわりに

駿河遺跡の発掘調査面積は、約11,500m²である。遺溝の密集度は少ないが、調査区全体に間断なく拡がりをみせる。調査の結果検出した遺構は、弥生時代中期末から後期にかけての竪穴式住居跡12、堀立柱建物8、竪穴8、ピット群、古墳時代の土壙2、時代不明の土壙9を検出した。

竪穴式住居跡はその規模、形状からいくつに分けることができる。

I 不整円形プランを呈する6号住居跡で、方形に移行する直前の住居跡と考える。床面から出土した土器は後期初頭に属するものと考えられる。今後の資料増加を待ちたい。

II 方形プランに近く、床面積が8～15m²前後の小住居で、8号、9号住居跡がある。8号住居跡は柱穴を斜めに掘り込む特異な形状を示す。残念ながら時期の明確にする資料はない。この住居跡と類似する形状のものは春日市教育委員会調査区でも検出されており正式報告を待ちたい。^(註1) 9号住居跡の出土土器は中期末が主体である。

III 長壁がやや長い、長方形のプランを呈し、コーナーに長方形の張出し部とベッド状遺構をもつ。1号・2号・4号住居跡がある。1号・2号の張出し部は、ベッド状遺構とほぼ同大で床面からの高さも同レベルに造り出されている。出土土器は流入したものが多く時期は確定できないが、住居跡の形状からみて後期に属するものである。

IV 長方形プランを呈し、ベッド状遺構をもつ。7号・10号・11号・12号住居跡がある。10号～12号住居跡の床面積は50m²前後の大住居である。IIIタイプよりやや新しい要素をもつ後期の土器が主体である。

堀立柱建物は、1間×2間の建物5棟、1間×1間の建物2棟を検出した。2号・3号堀立柱物の掘方内からは後期に属する土器が出土しており、住居跡III・IVタイプと時期的に大差ないもので倉庫と考えられる。

住居跡と堀立柱建物の分布は、調査区の東側と南側にまとまる傾向があるが、春日市教育委員会調査区では、約5,000m²の調査区に竪穴住居跡40軒以上、堀立柱建物60棟以上が密集して検出され、集落の中心的な様相を示している。当遺跡を含めた形で遺跡の全容を検討しなければならない。

竪穴は調査の西半部に20m前後の間隔をおいて点存している。出土土器は、中期末から後期のものである。周囲にピットを伴う7号・8号竪穴であるが、堀立柱建物の柱穴掘方とは様相を異にする。深さも浅く、径も小さい。小屋あるいは覆屋的な施設が考えられる。出土土器がなく時期の決定ができない。調査例の増加を待ちたい。

調査区中央の谷頭部で弧状に分布する土壙を検出した。近年の調査で明らかにされてきた落

表2 壇穴式住居跡一覧表

No	規 模 (m)	形 状	面 積 (m ²)	柱穴数	主 軸 方 位	壁残高 (cm)	炉跡の位 置	屋肉土壤 の位 置	ベッド状置 構の位 置	周溝の有 無
1	5.8×5.6 6.65	長方形 張出有	32.45	2本	N15°W	40	中 央	長壁中央		有
2	4.55×4.4 4.75	長方形 張出有	19.21	2本	N14.5°E	30	中 央	長壁中央		有
3	—×3.9	— (長方形)	(8.78)	—	N13°W	20	—	—	—	有
4	4.15×3.7 (5.25)	長方形 張出有	(16.48)	2本	N0.5°E	15	中 央	長壁中央		有 (一部)
5	4.4×—	— (長方形)	(13.52)	2本	N18.5°W	20	中 央	南壁中央	—	有
6	径 6.76	丸 形	33.18	7本	N17°E	50	中 央	—	—	有
7	5.9×4.2	長方形	23.63	2本	N25°W	47	中 央	長壁中央		無
8	3.3×2.9	長方形	8.44	2本	N16.5°W	35	不 明	長壁中央	無	無
9	4.3×3.75	方 形	15.04	2本	N25°W	50	中 央	南壁中央	無	有
10	8.65×6.7	長方形	54.41	2本	N14°W	40	中 央	長壁中央		有
11	8.3×6.14 (9.14)	長方形	49.53	2本	N10°W	30	中 央	長壁中央		有
12	(7.85)×5.97	長方形	(32.15)	2本	N13°E	33	中 央	長壁中央		有

し穴状遺構に形態が似るが、床面のピットやその他の付属施設が認められない。出土土器もなく性格は不明である。

6号住居跡からは、胴部上位に窓状の透しをもつ、甕形土器（第16図12・13）2点が床面から2～3cm浮いた状態で出土している。これまでの出土例から焼成前にあけられた窓は、容器としての機能を当初から否定するためのもので祭祀的な用途に使われていたものと考えられている。中期末のものでは三雲八反田II-3の住居跡を利用した土器留出土の甕、後期前半のものでは古賀町鹿部の東町遺跡の土器留遺構から出土した甕、終末期のものでは三雲番上II-5の土器留出土の脚台付土器がある。しかし、当遺跡のような住居跡からの出土例はなく、用途については今後の出土例を待ち検討する必要があろう。

2号・3号掘立柱建物の掘方から、手捏ね土器、広範囲に、黒斑が認められる長頸壺が完形

品で出土している(第36図)。完形品で流入したものとは考えにくく、祭祀的用途に使われたものであろう。

床面積54,41m²の10号住居跡からは、青銅製鋤先が出土した。全体に脆く、袋部と刃部の一部を欠くがほぼ原形を保つ。豎穴式住居跡からの出土例は当遺跡で10例目である。出土土器の年代からみて後期に属し、柳田氏の分類によるII型にあたる。
(註6)

当遺跡の接する春日市調査区では、前述したように、豎穴式住居跡、掘立柱遺構が多数検出(註7)され、さらには、小型彷彿鏡、鋳型などの貴重な遺物も多数出土している。後日詳細な報告がなされるが、この駿河遺跡も、奴国というクニを構成する中心集落のひとつで、クニの全体像を知る上で貴重な遺跡となる。

註1 春日市教育委員会 平田正幸氏教示。

2 註1に同じ。

3 福岡県教育委員会『三雲遺跡』III 福岡県文化財調査報告書第63集 1982

4 日本住宅公団『鹿部山遺跡』1973

5 註2に同じ。

6 柳田康雄「青銅製鋤先」『鏡山先生古稀記念古文化論叢』1980

7 註1に同じ。



暑い夏の現場作業を乗り切った作業員の皆さん。御苦労様でした。

図 版

1.

駿河遺跡全景
(東南上空から)



2.

遺跡北半部全景

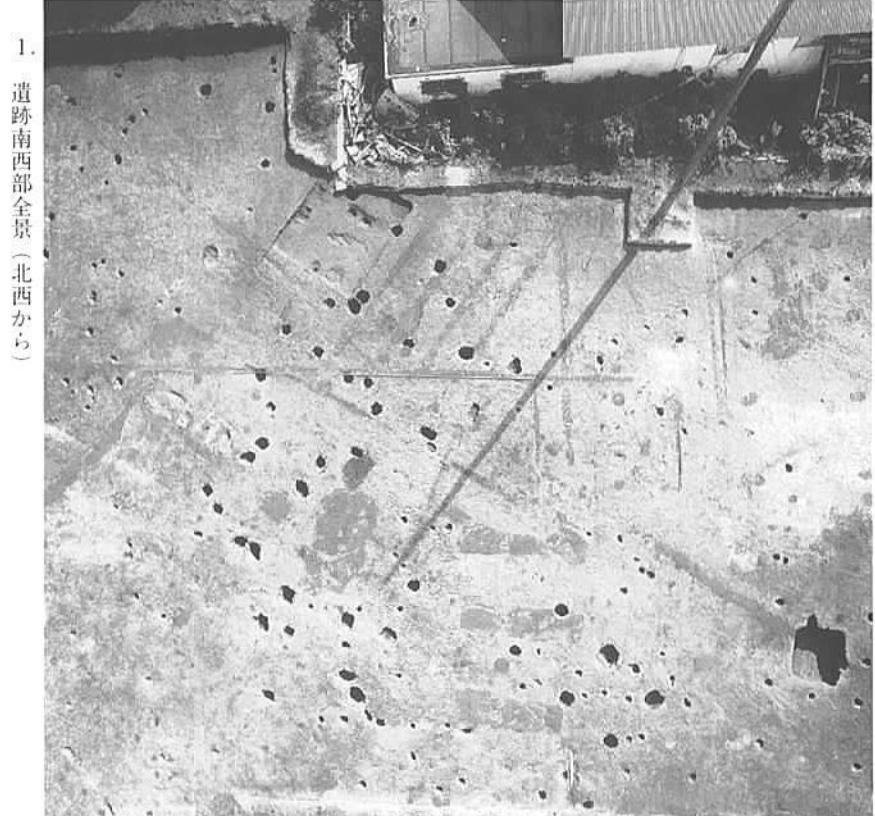




1.
遺跡東南部全景
(北から)



2.
遺跡南部全景
(北から)

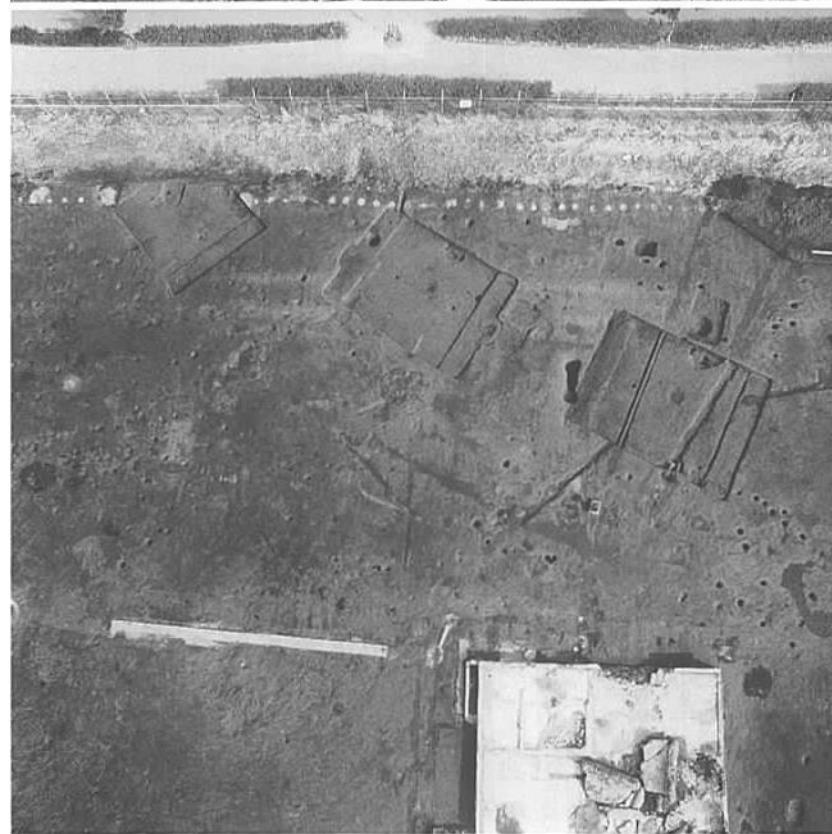


図版 4



1.

7号住居跡周辺全景



2.

10・
11・
12号住居跡
(西から)



1. 調査区遠景 1



2. 調査区遠景 2



1. 遺跡南半部遠景（南西から）



2. 遺跡南西部近景（東から）



1. 遺跡東側全景（北から）



2. 遺跡中央谷部（南から）



1. 遺跡西部全景（北から）



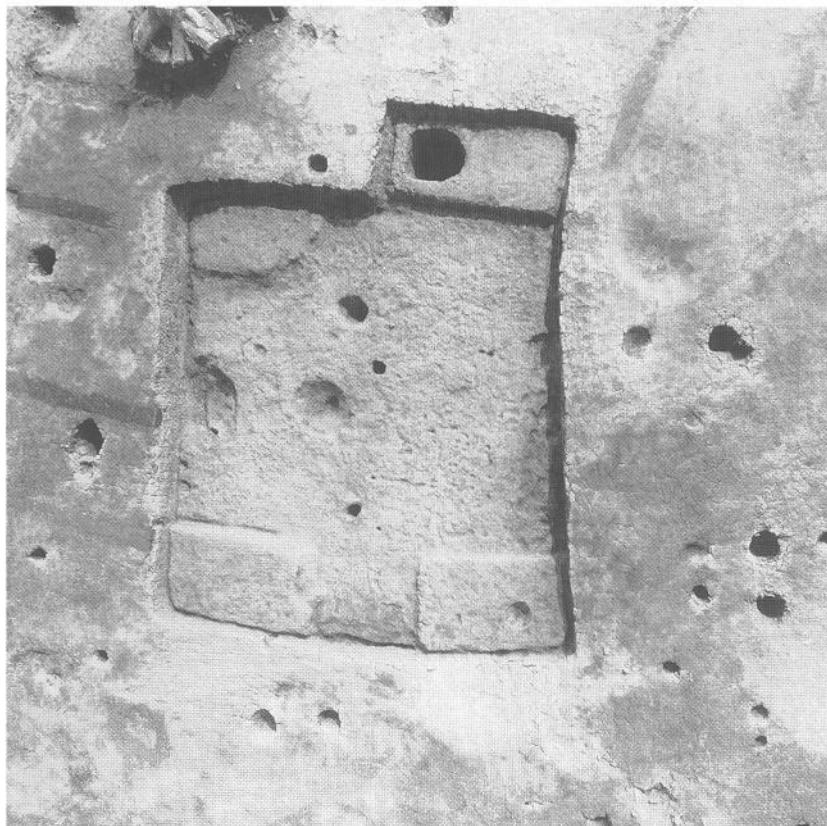
2. 遺跡北部全景（南から）



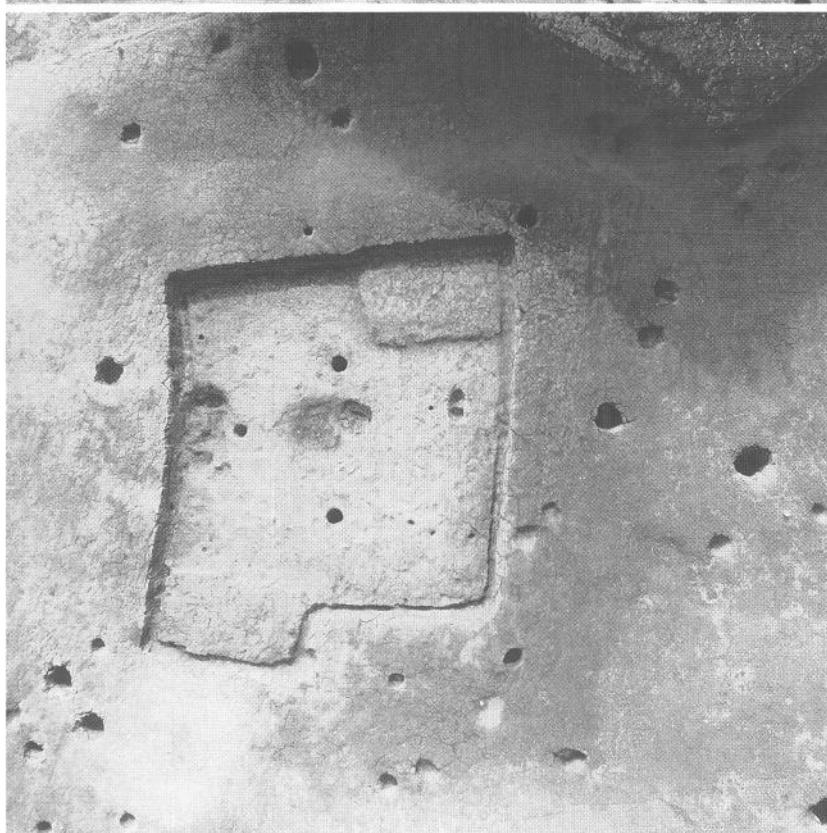
1. 1・2号住居跡（南西から）



2. 1号住居跡（北から）



1.
1号住居跡
(北上空から)



2.
2号住居跡
(北東から)



1. 2号住居跡（北東から）



2. 3号住居跡（南西から）



1.

4号住居跡



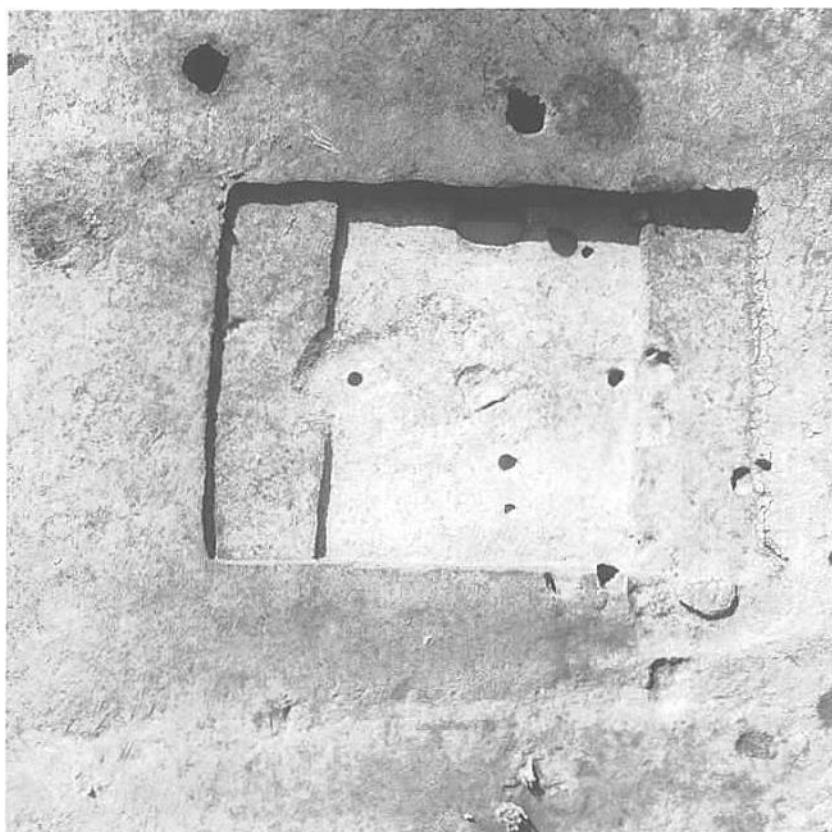
2. 4号住居跡（北から）



1. 5号住居跡（北から）



2. 6号住居跡（北東から）



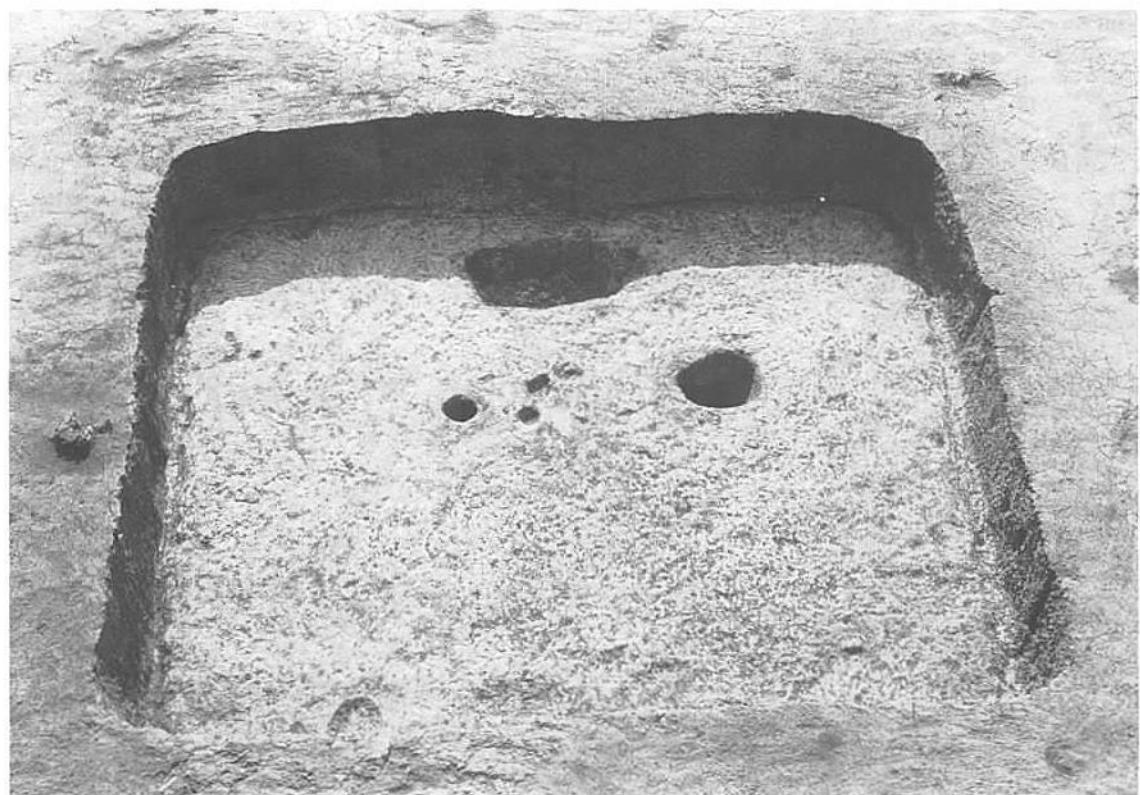
1.
7号住居跡



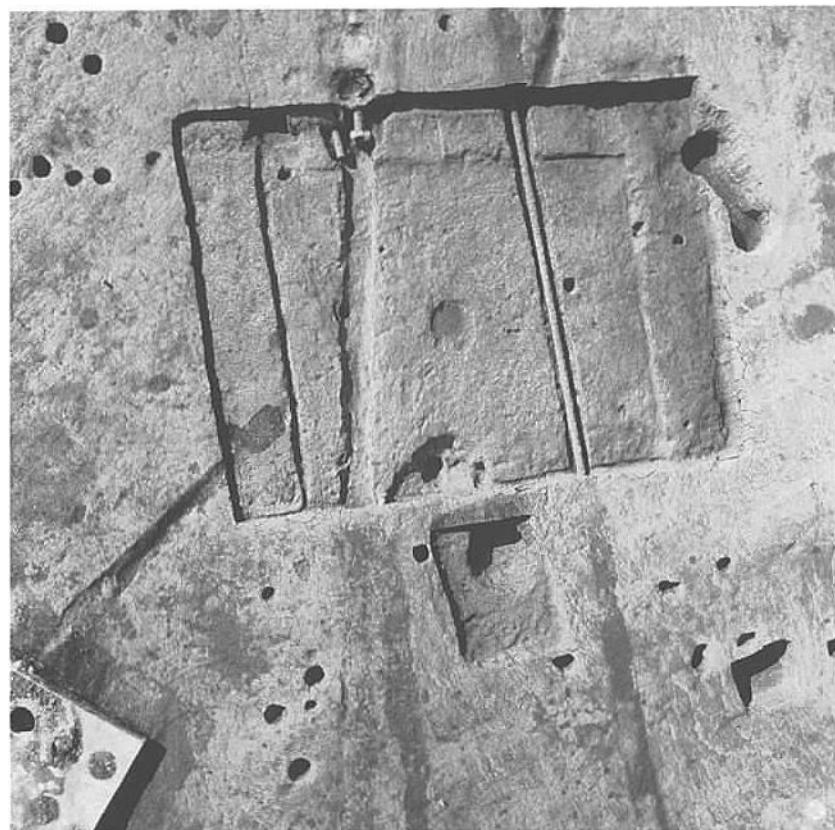
2. 7号住居跡（北東から）



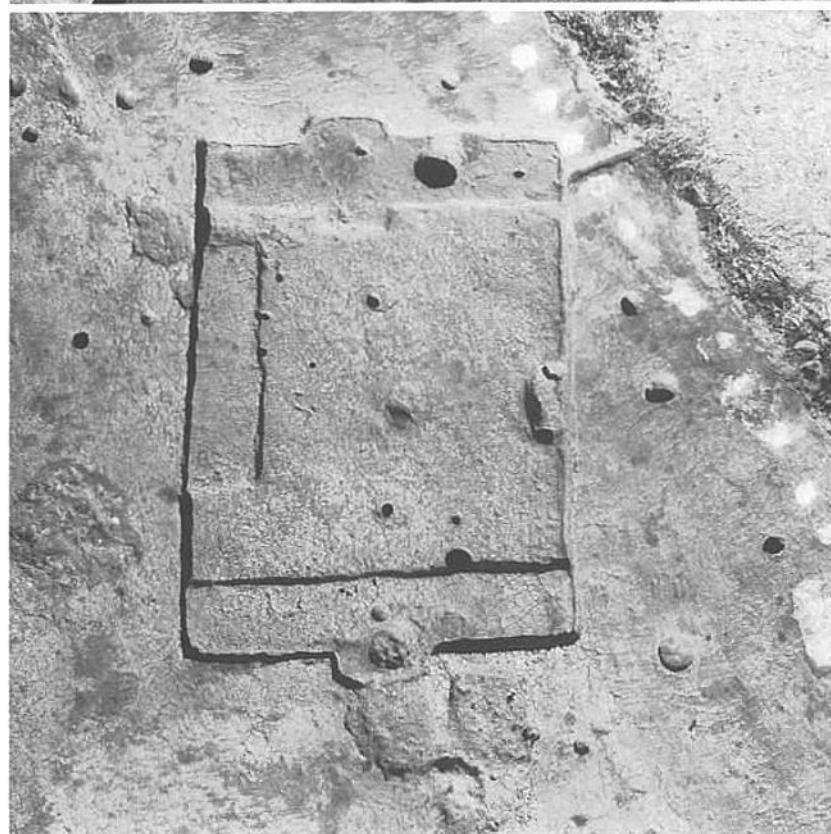
1. 8号住居跡（北から）



2. 9号住居跡（北西から）

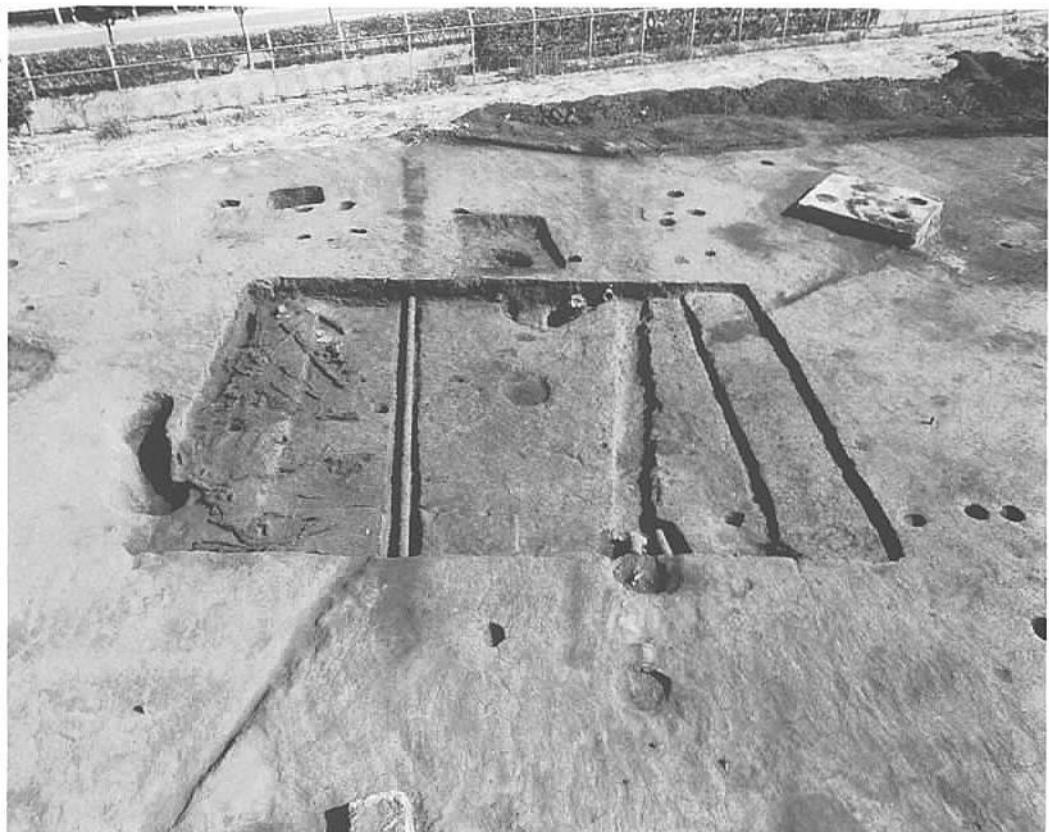


1.
10号住居跡東側土壙
(東から)



2.
11号住居跡
(南から)

1.
10号住居跡（西から）



2. 10号住居跡 青銅製鋤先出土状態





1.
11号住居跡（西から）



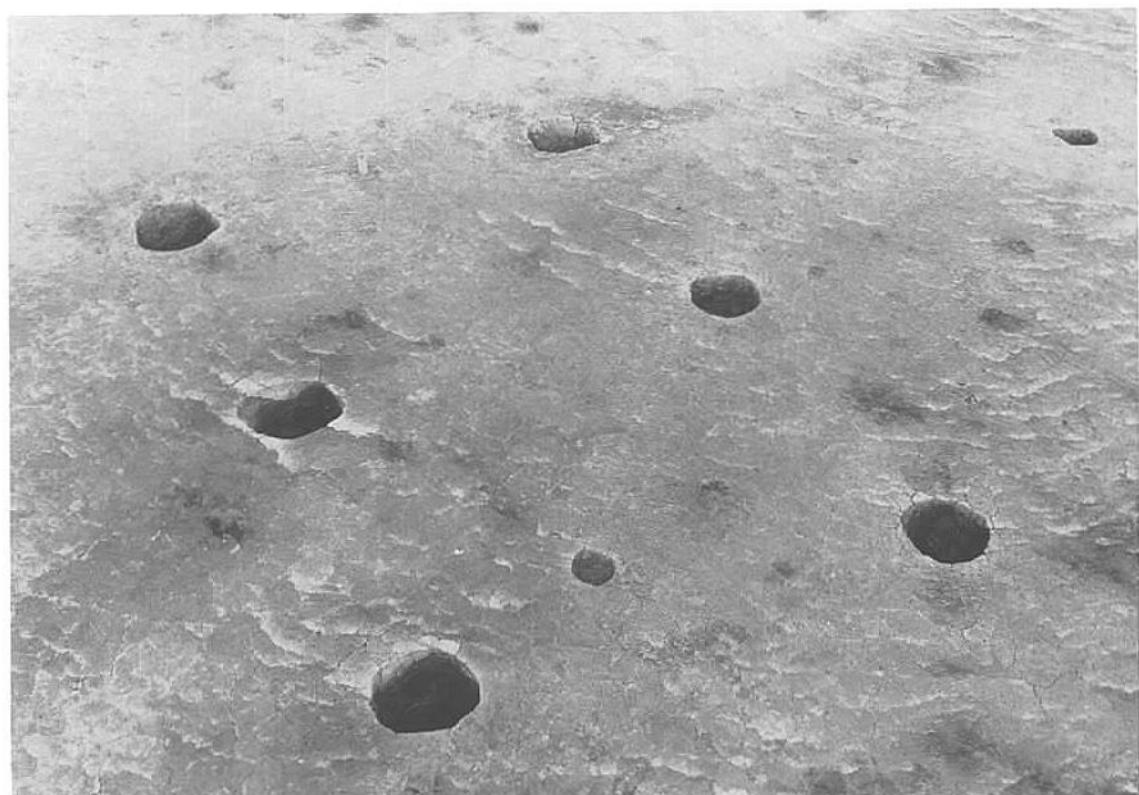
2.
12号住居跡（北西から）



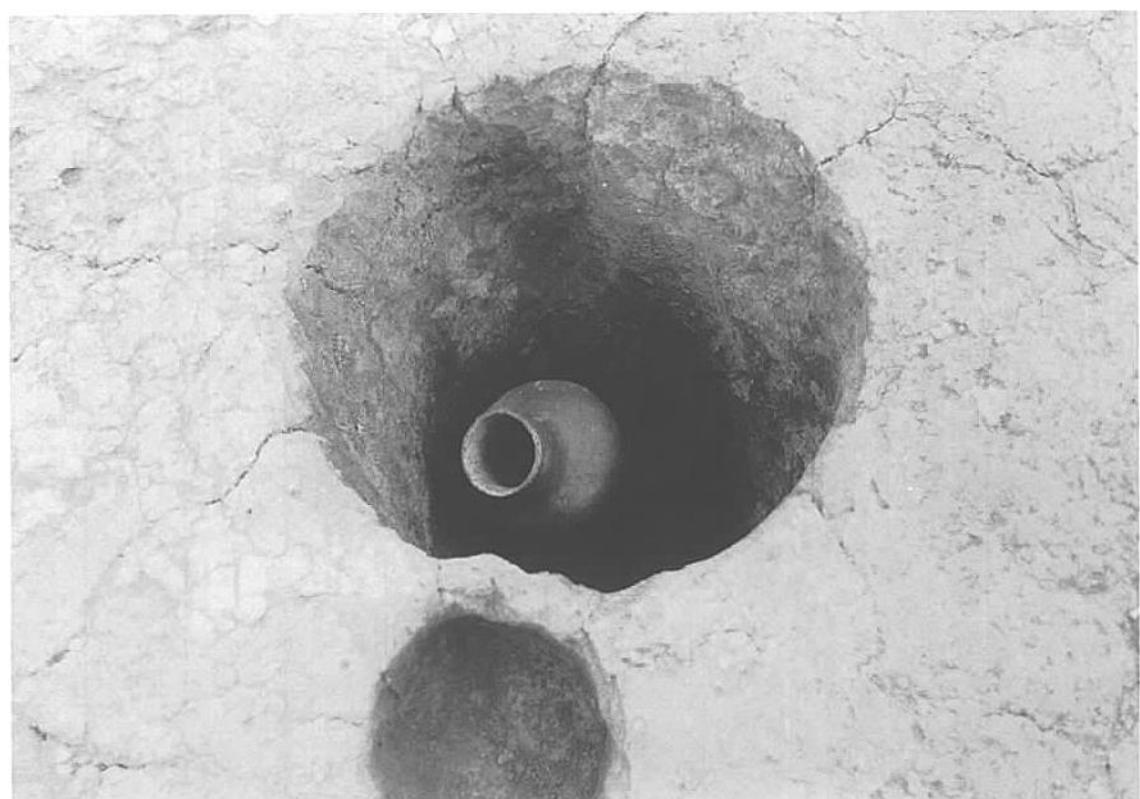
1. 1号掘立柱建物（西から）



2. 2号掘立柱建物（南から）



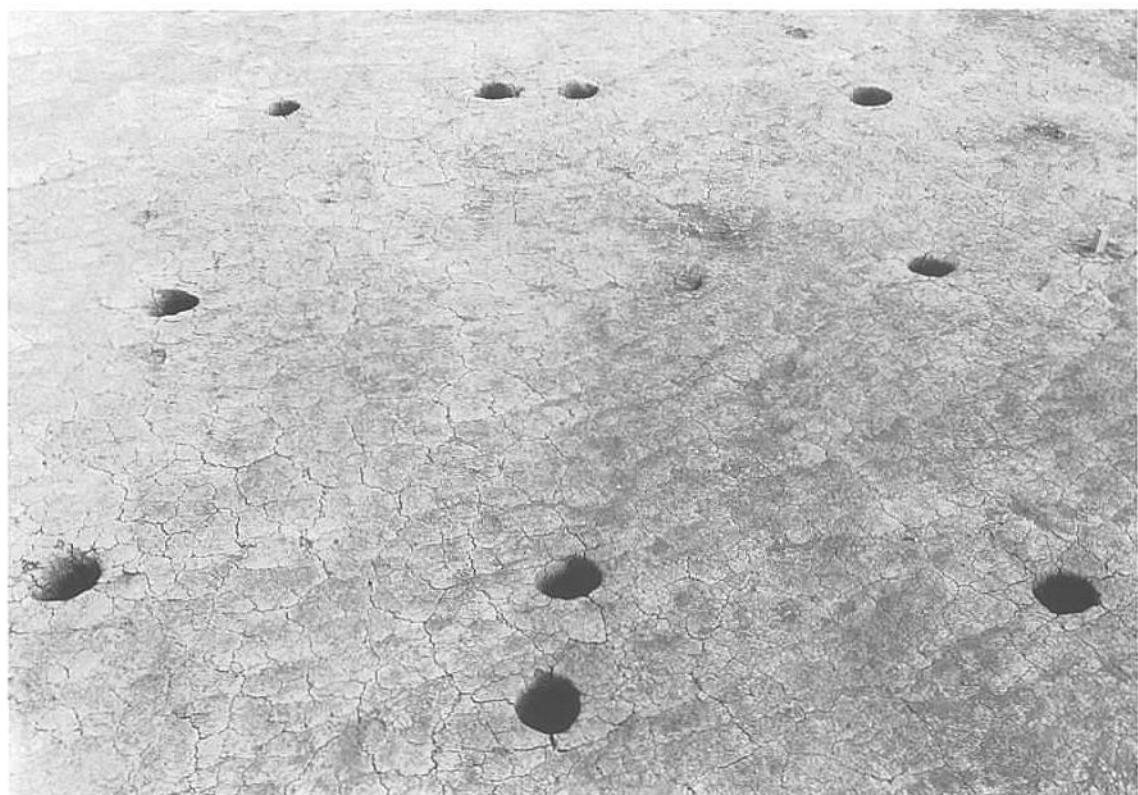
1. 3号掘立柱建物（南から）



2. 3号掘立柱建物 P3 壺形土器出土状態



1. 6号掘立柱建物（西から）



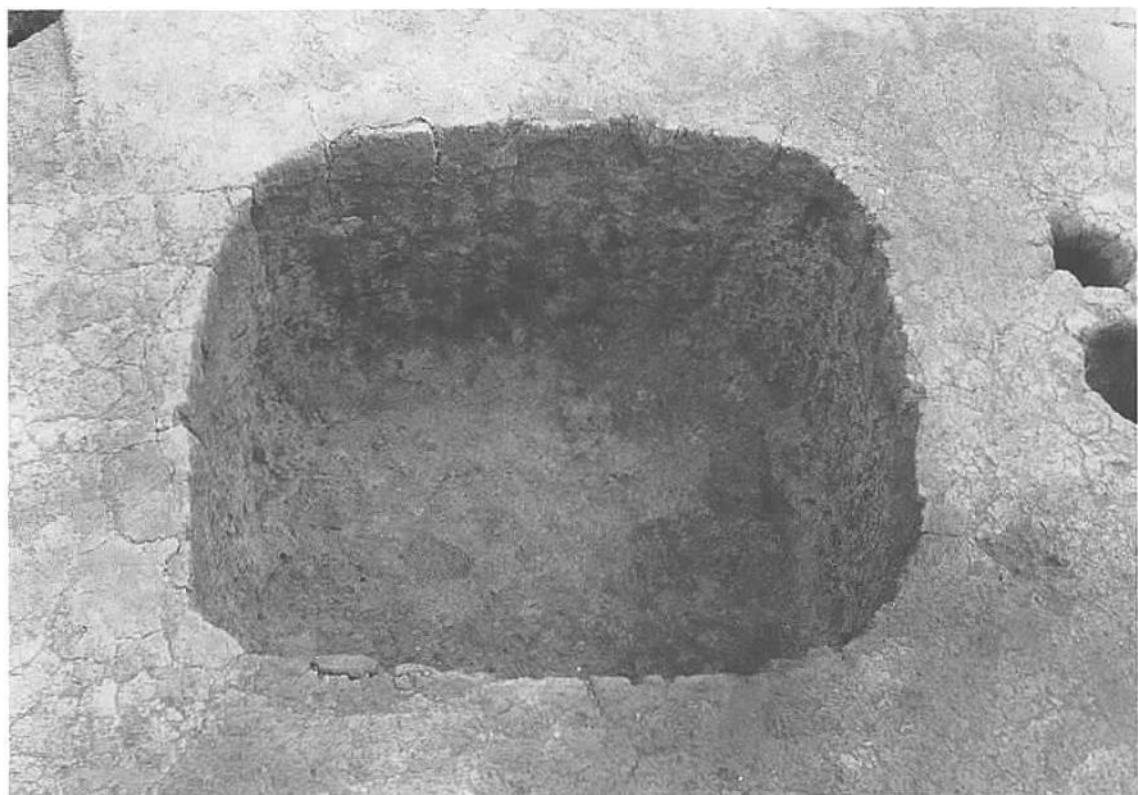
2. 7号掘立柱建物（南西から）



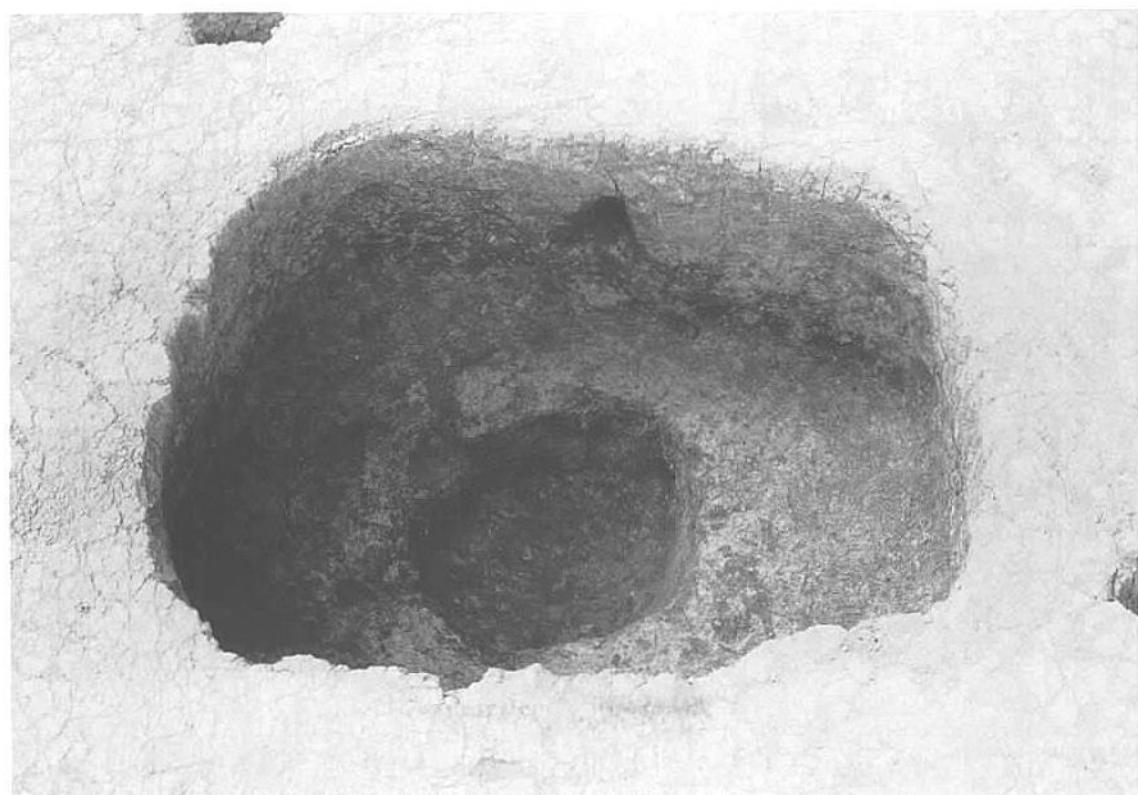
1. 1号竪穴（北から）



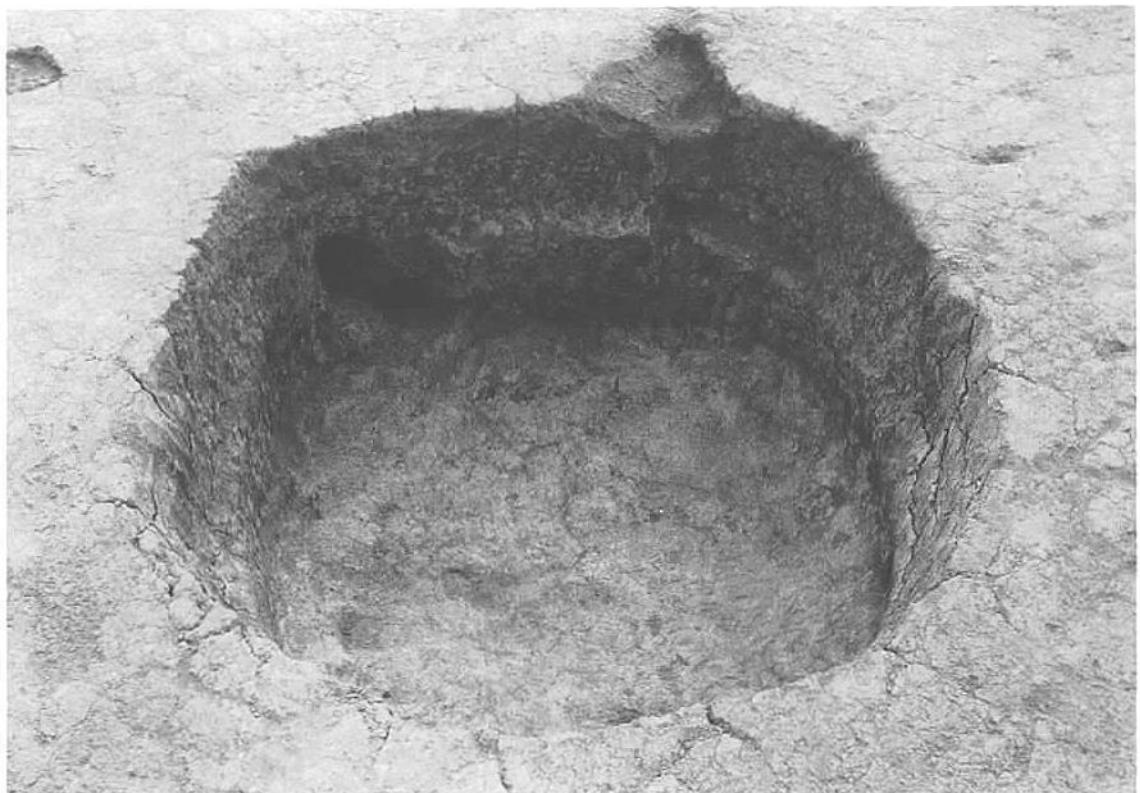
2. 2号竪穴（南から）



1. 3号竪穴（北から）



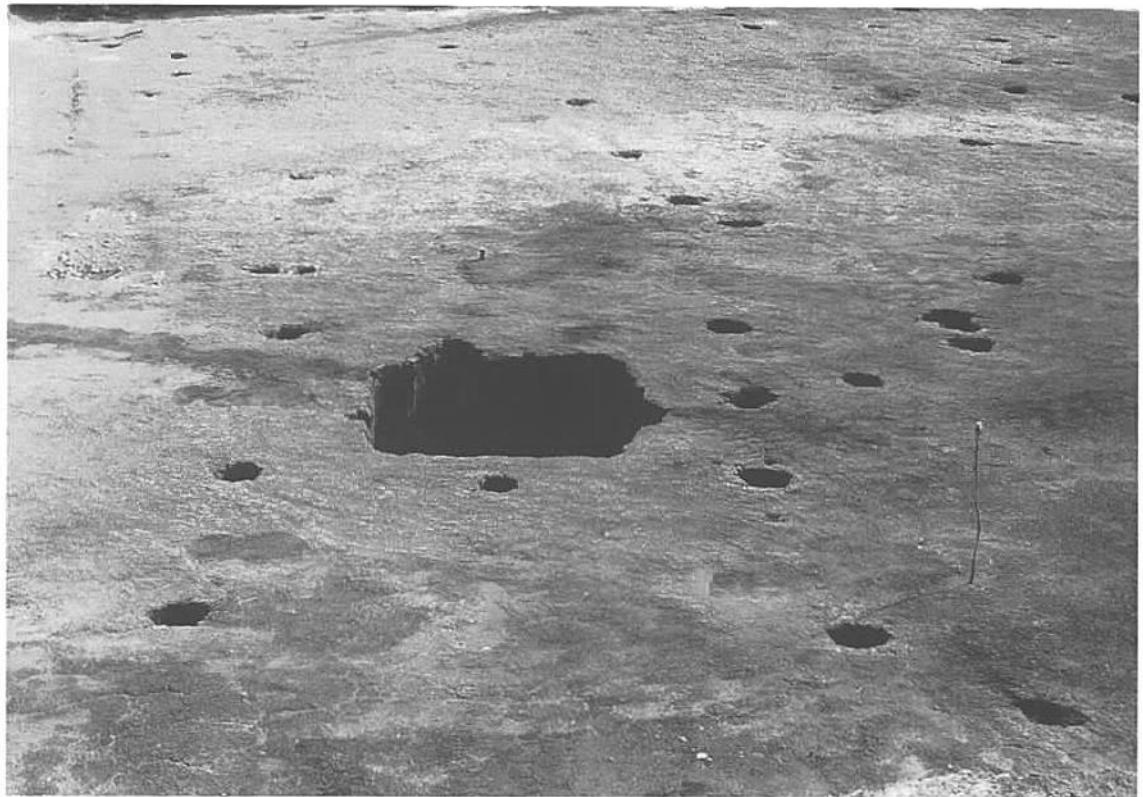
2. 4号竪穴（南東から）



1. 5号竖穴 (東から)



2. 5号竖穴土層断面



1. 7号竪穴（北から）



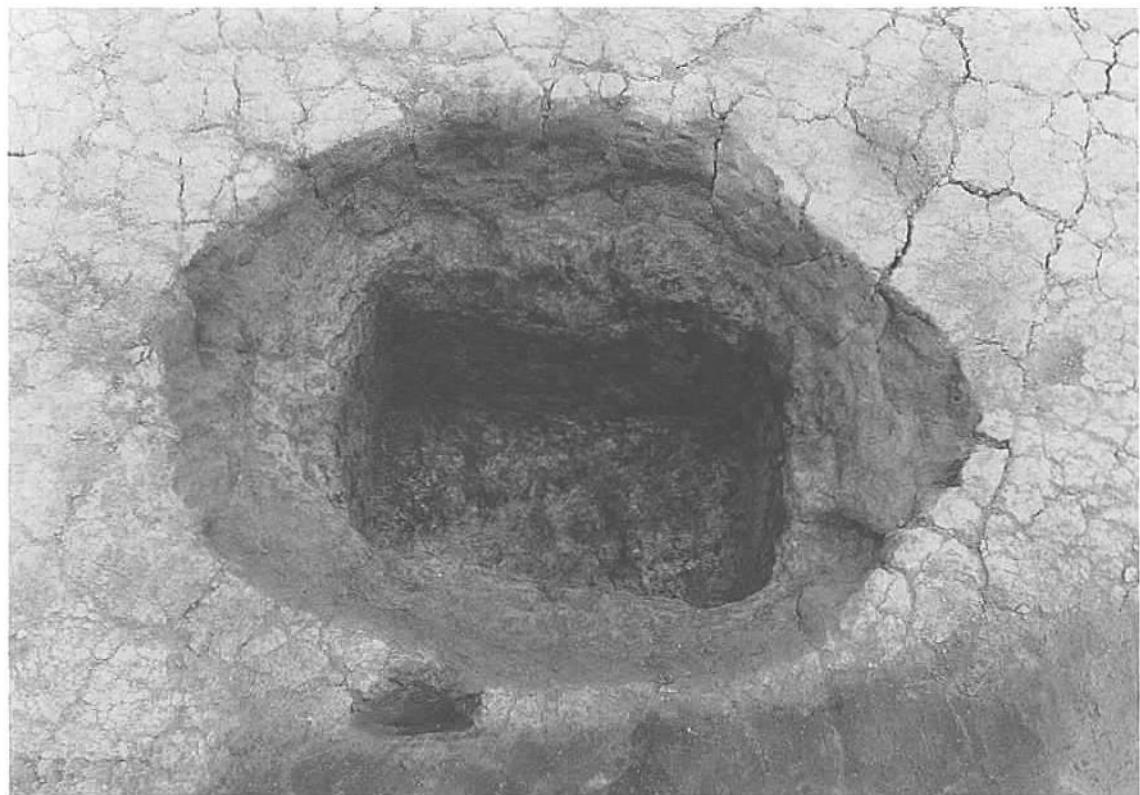
2. 7号竪穴（東から）



1. 9号竪穴（北から）



2. 10号竪穴（北西から）



1. 1号土壤（北から）



2. 2号土壤（東から）



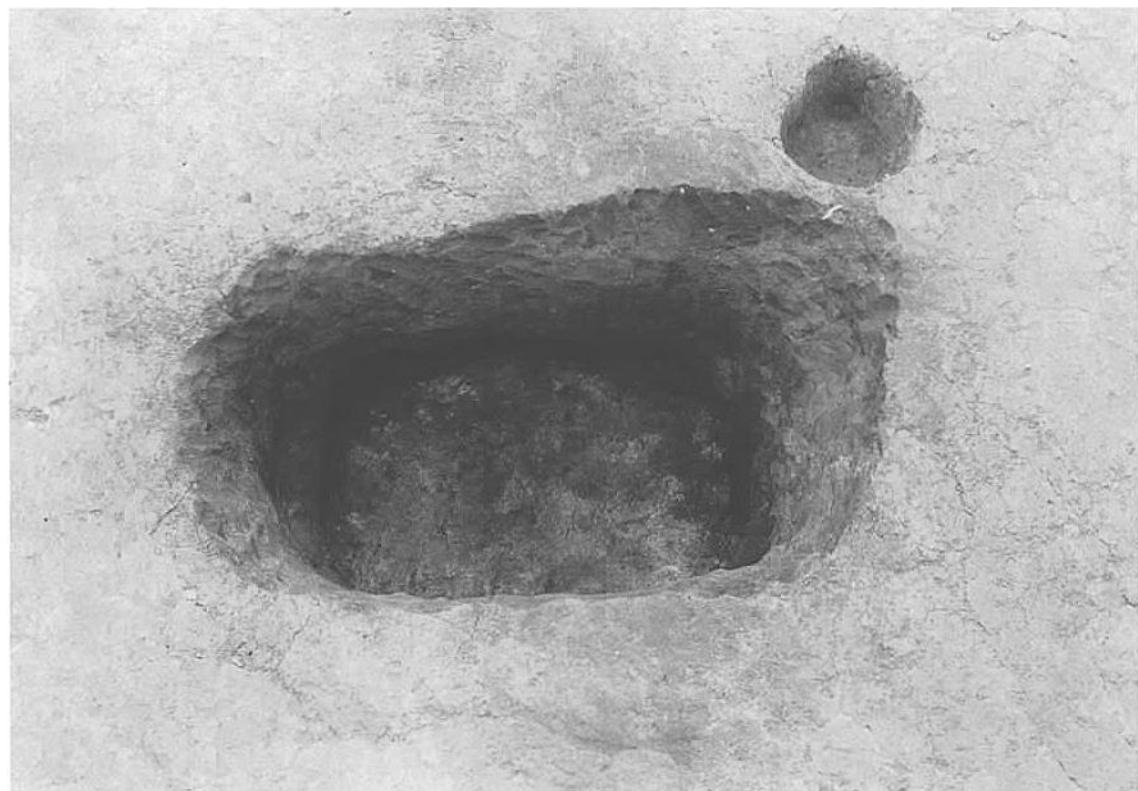
1. 5号土壤（東から）



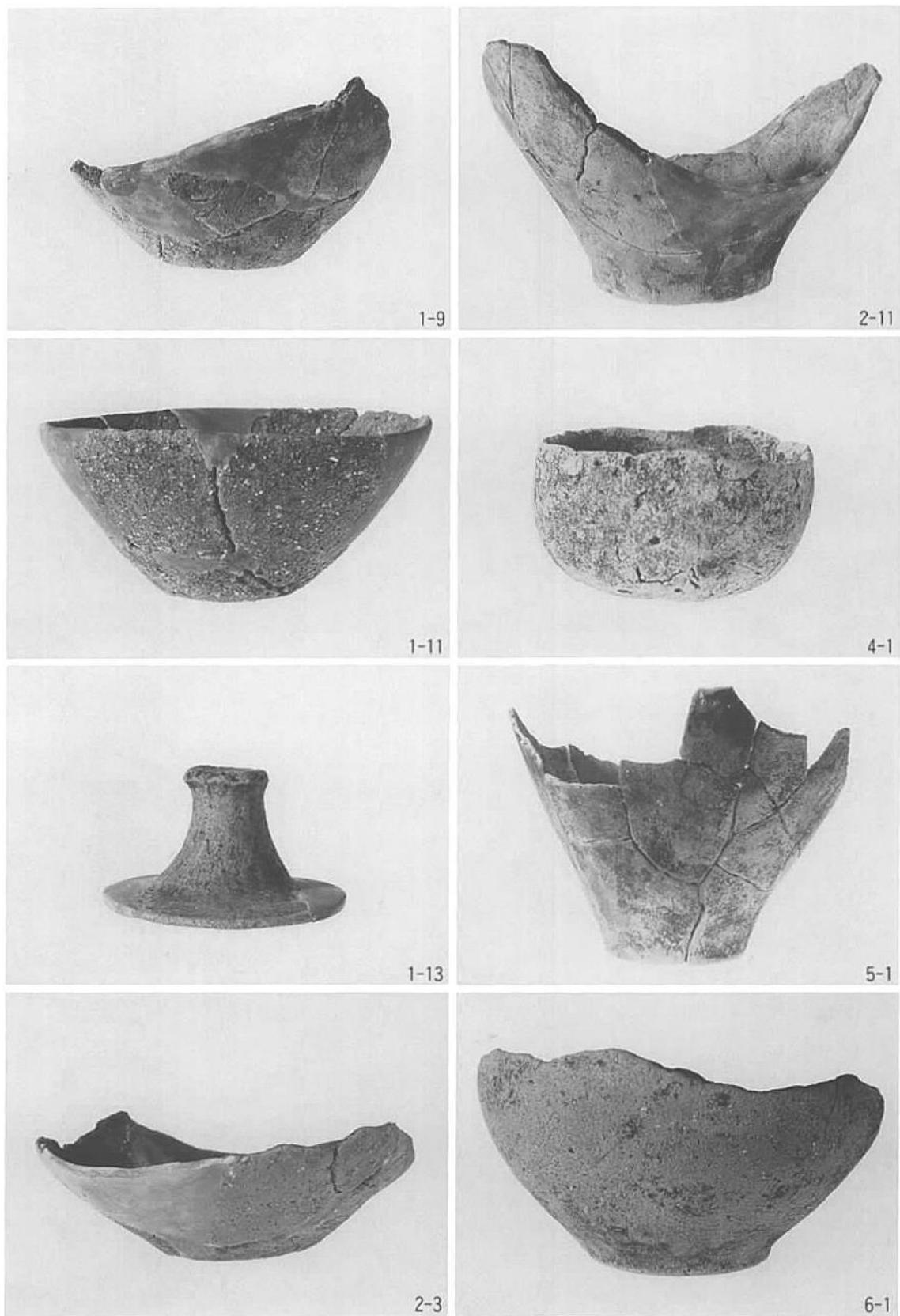
2. 6号土壤（南東から）

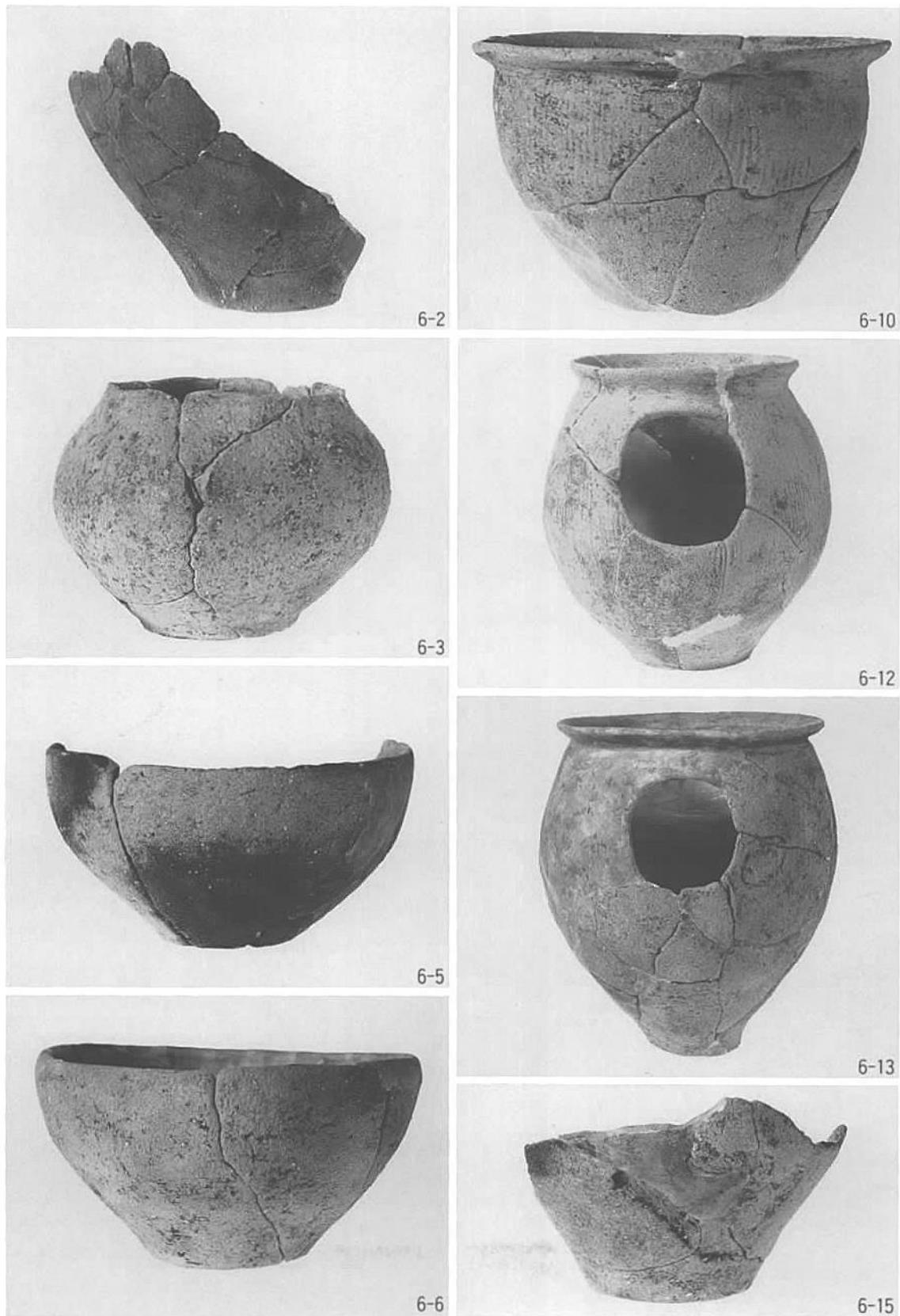


1. 8号土壤（地から）



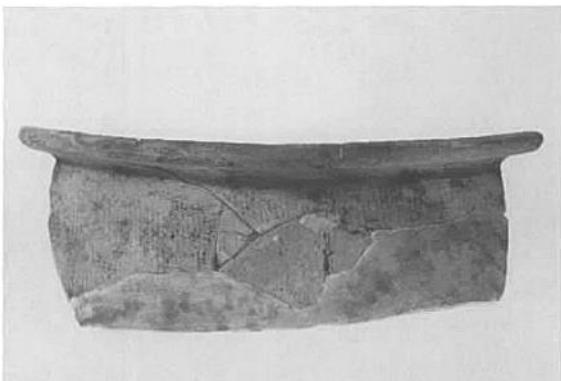
2. 9号土壤（南東から）



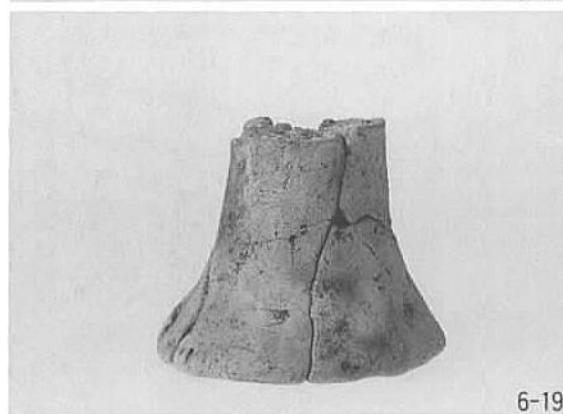




6-17



9-5



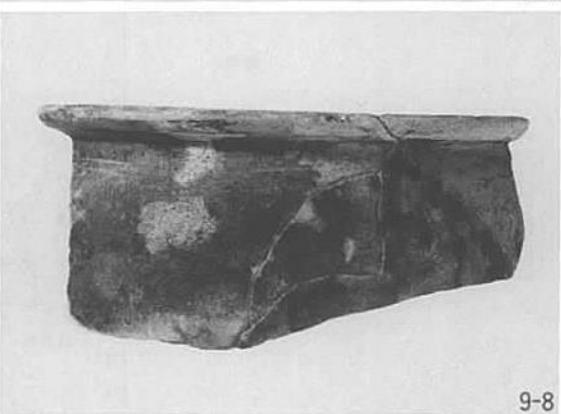
6-19



9-7



9-1



9-8



9-3



9-9



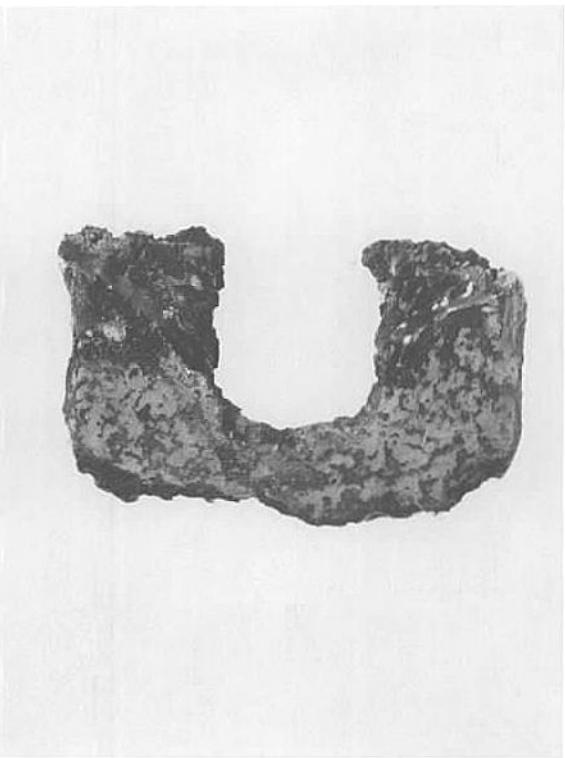
住居跡出土土器・10号住東側土壤出土須恵器



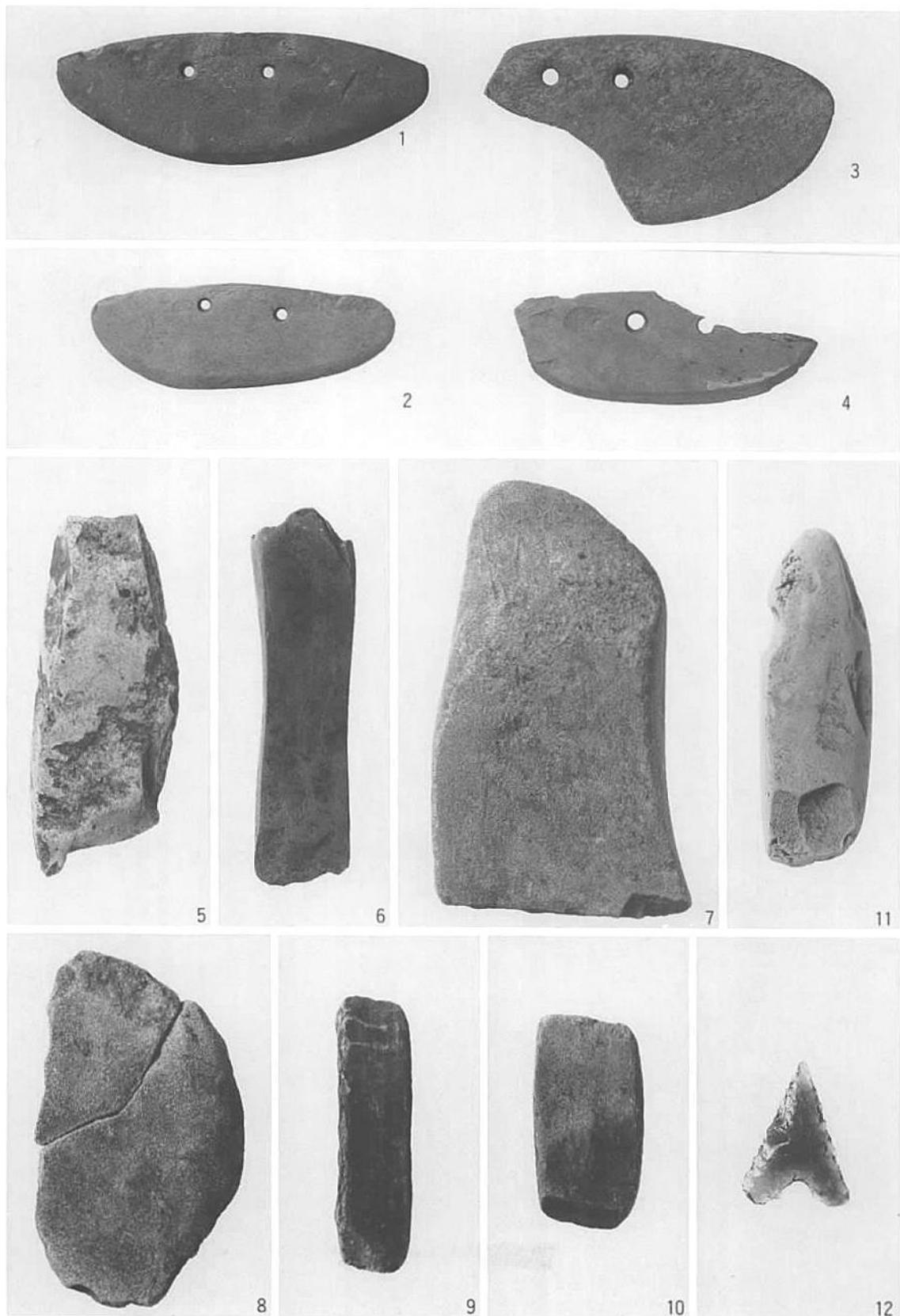
左上 2号掘立柱建物出土

左下 7号住居跡出土

上 3号掘立柱建物出土

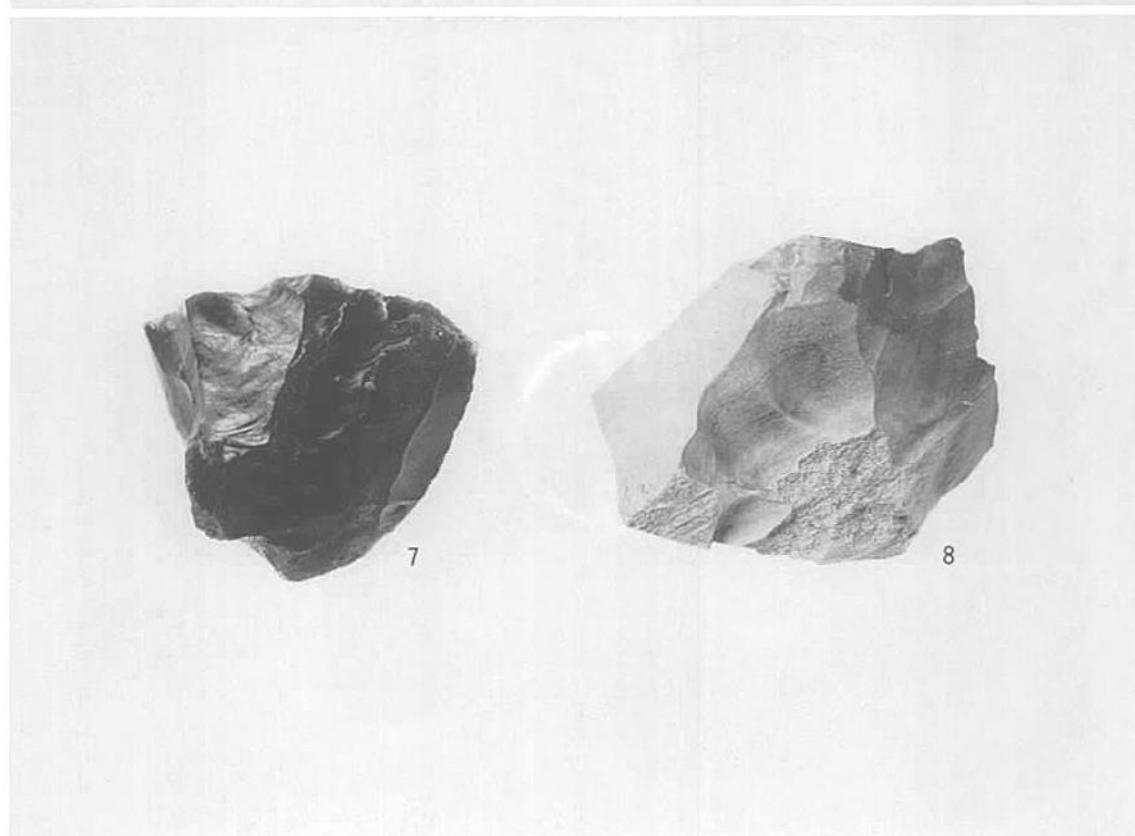
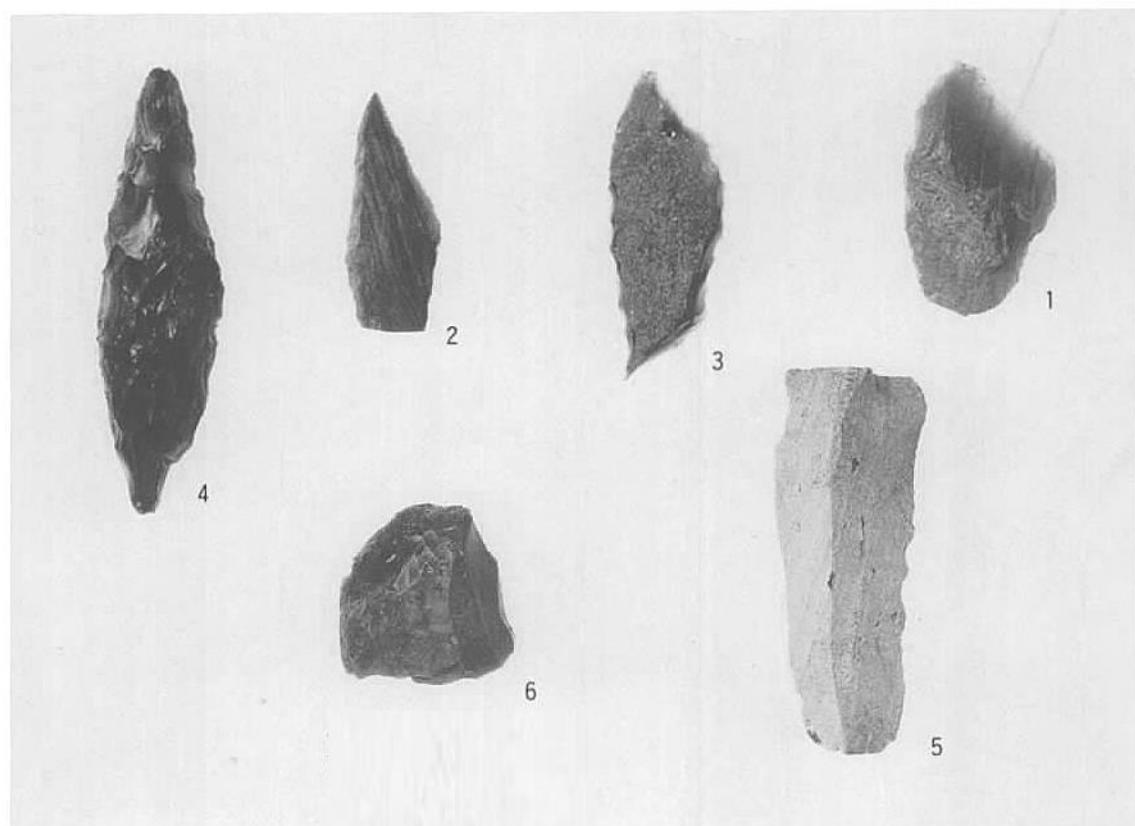


10号住居跡出土 青銅製鋤先



4号住居跡 5 5号住居跡 11 6号住居跡 12 7号住居跡 1

10号住居跡 2・6・7 11号住居跡 3・8 12号住居跡 4・9 P-180 10



駿河遺跡

福岡県文化財調査報告書 第98集

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 天地堂印刷
北九州市小倉北区大手町10-18

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 3	登録番号 14

駿河遺跡

福岡県文化財調査報告書

第 98 集

一付 図一

駿河遺跡遺構配置図（縮尺1/400）

